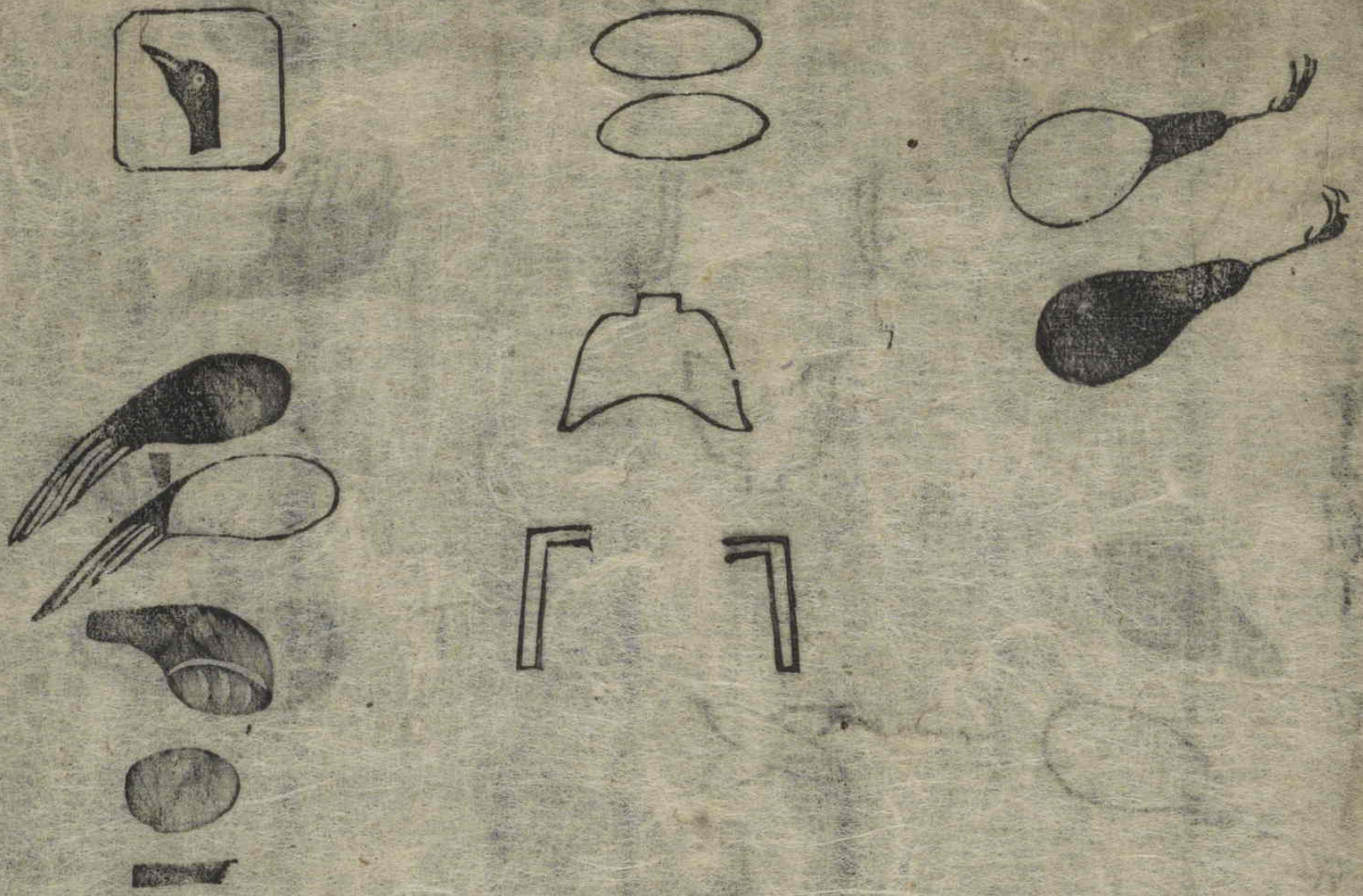
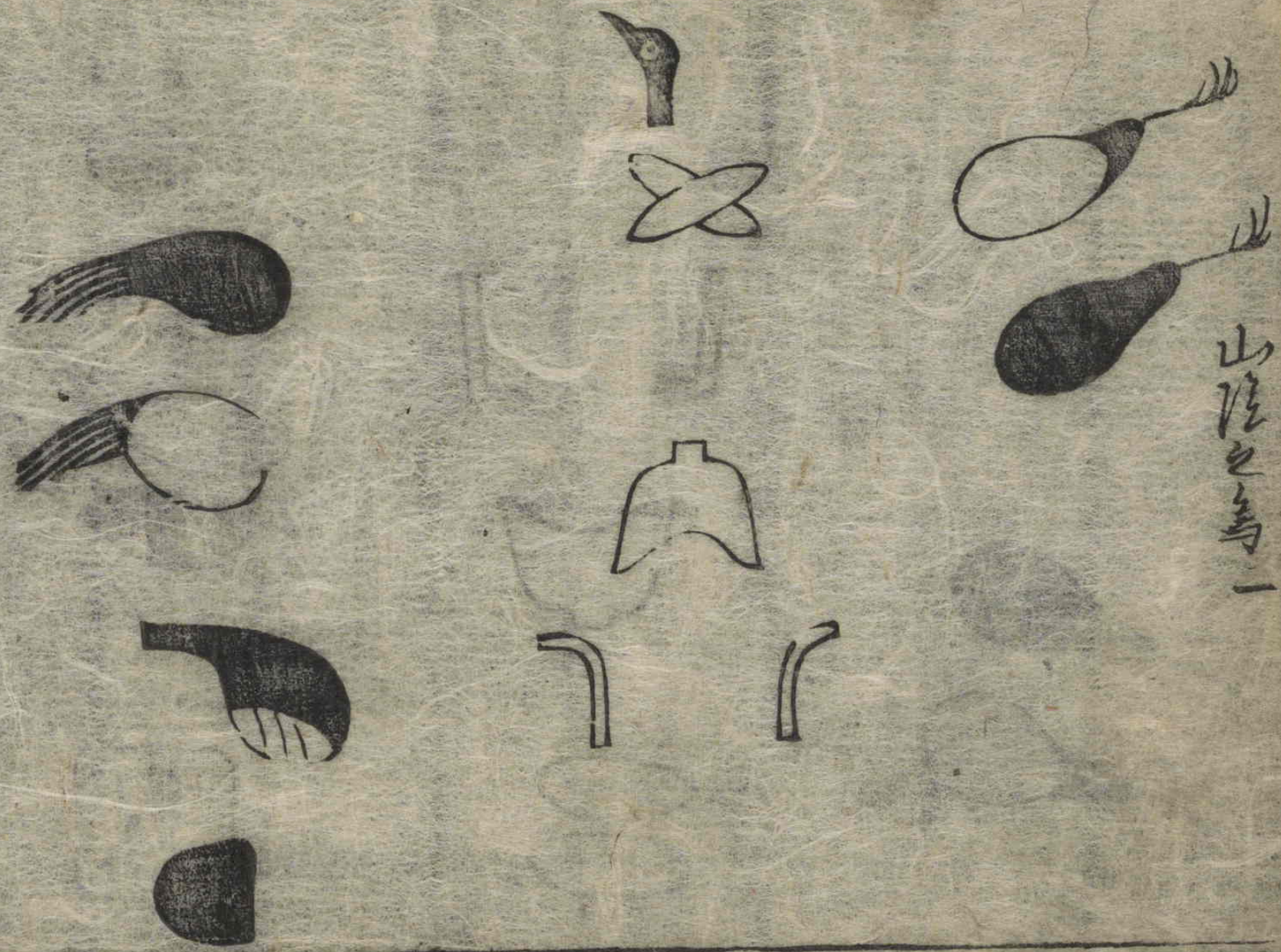
料理躾抄

寛永版

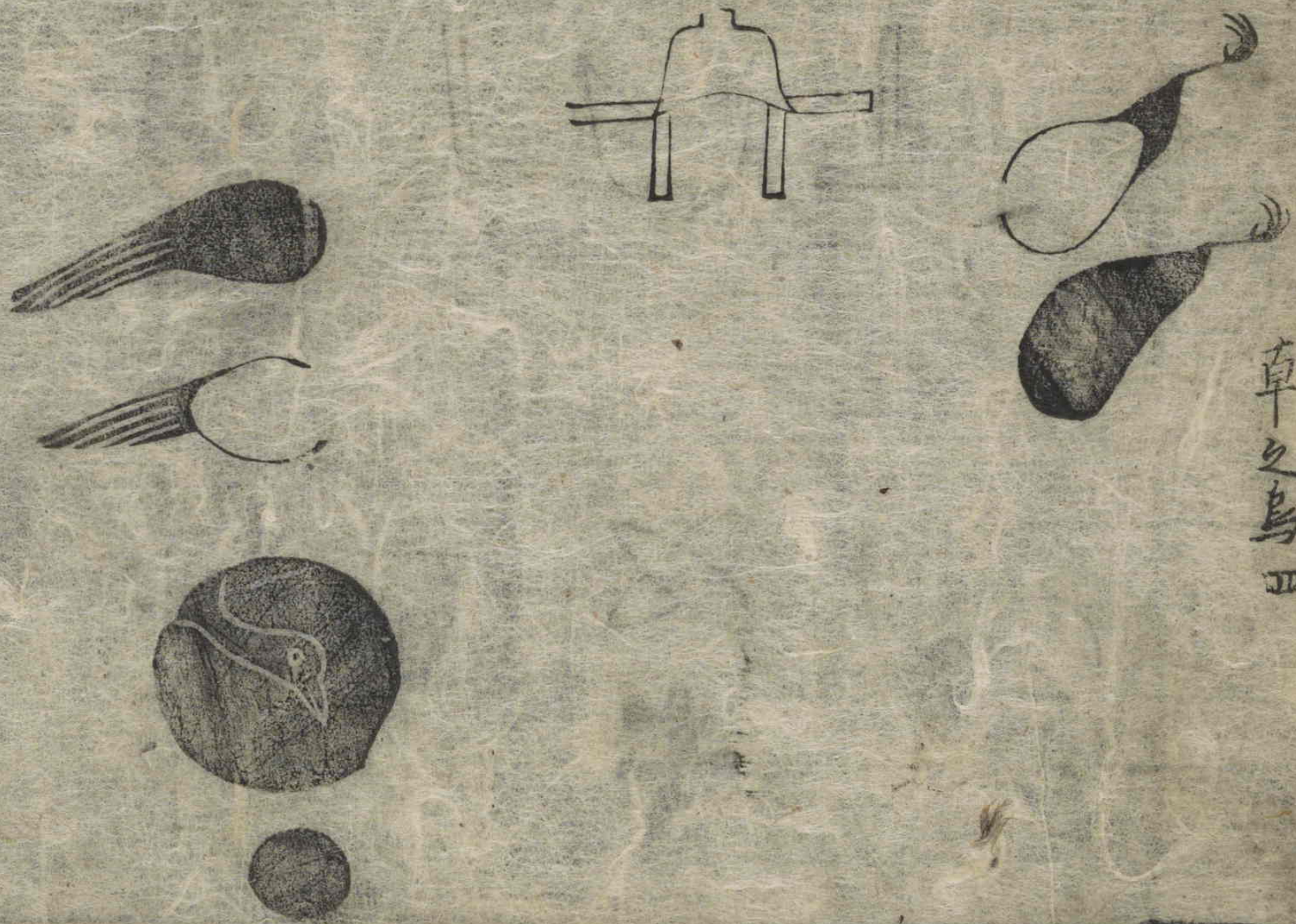
祝之鳥 一
式之鳥 三
鷹之鳥 五
大友呂傳之鳥 七
鷹之小鳥 十
乱切 十二
真之鴨 十四
鷹之鷹 十六
真之鷹 十八
御前 二十
初鷹之乱 廿二
隼鷹 廿四
山陰之鳥 二
草之鳥 四
嫁取之鳥 陰陽 六
後来之鳥 八 大挟鳥 九
雪之朝之鳥 十
江雪 十三
大八サミ鳥 十五
鴨 十七
鷹鴨 十九
落鷹 廿一
帰鷹 廿三
鷹之乱 廿五

初鴈 廿六
千年之霍 廿八
舞霍 卅
弍霍 三十二
野鳥白鳥 三十四
大鳥切白鳥 三十六
草白鳥 三十八
鴈之スヂカイ 廿七
鷹之霍 廿九
弍鴈 三十一
草霍 三十三
千年之霍 三十五
弍白鳥 三十七
沢帰白 三十九



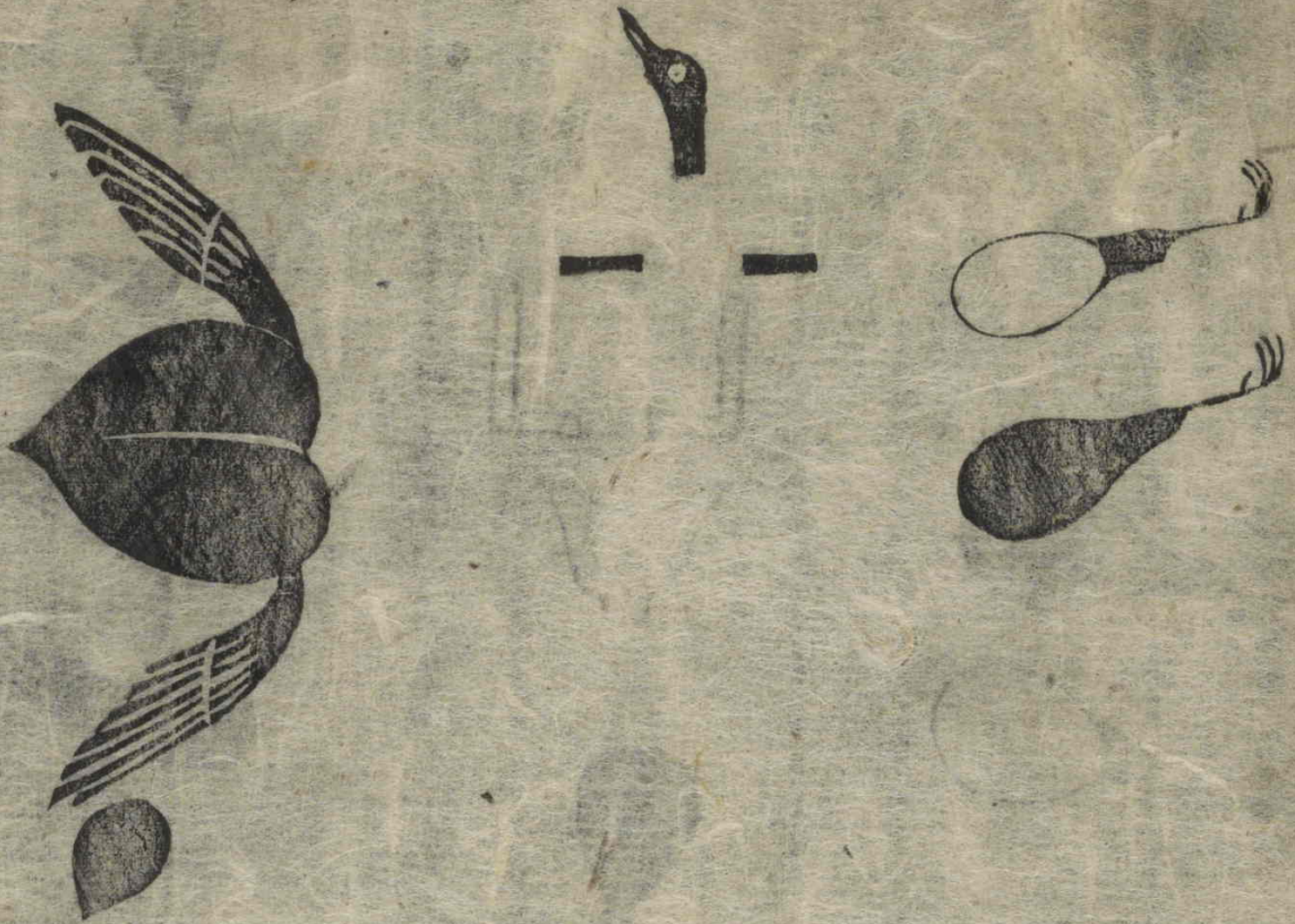


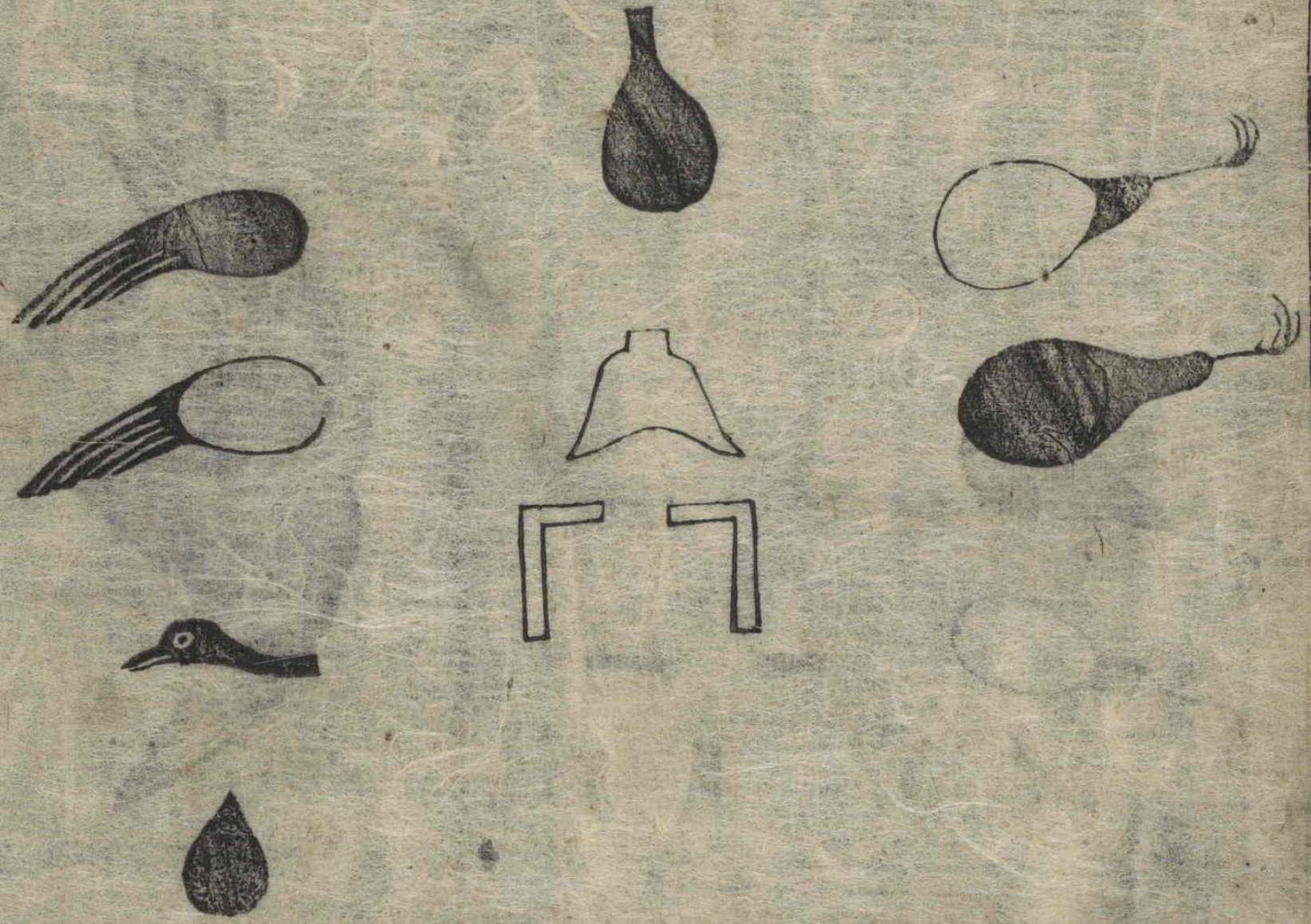
山陰之為一

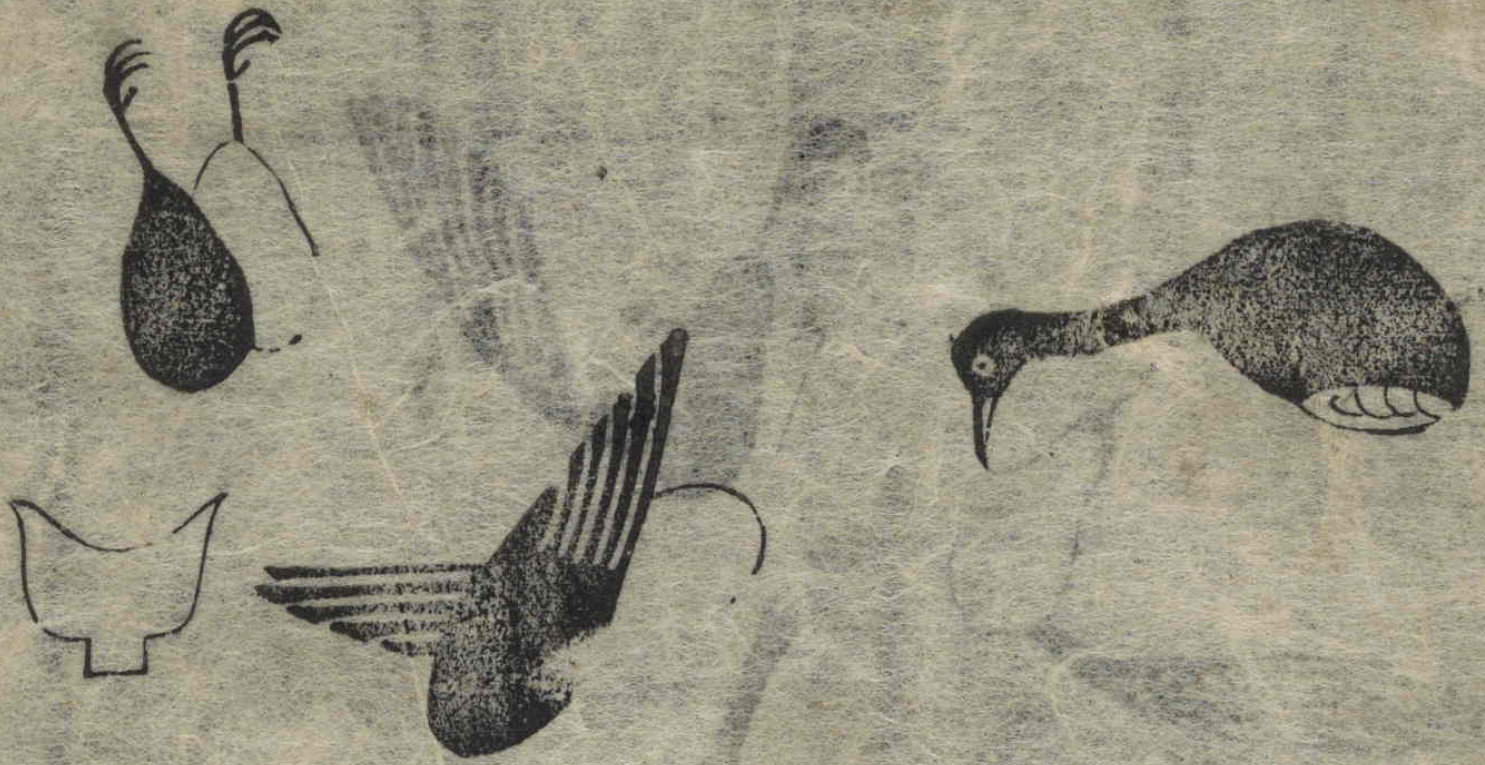


卓之鳥四

嫁取之鳥陰陽六







カイロ

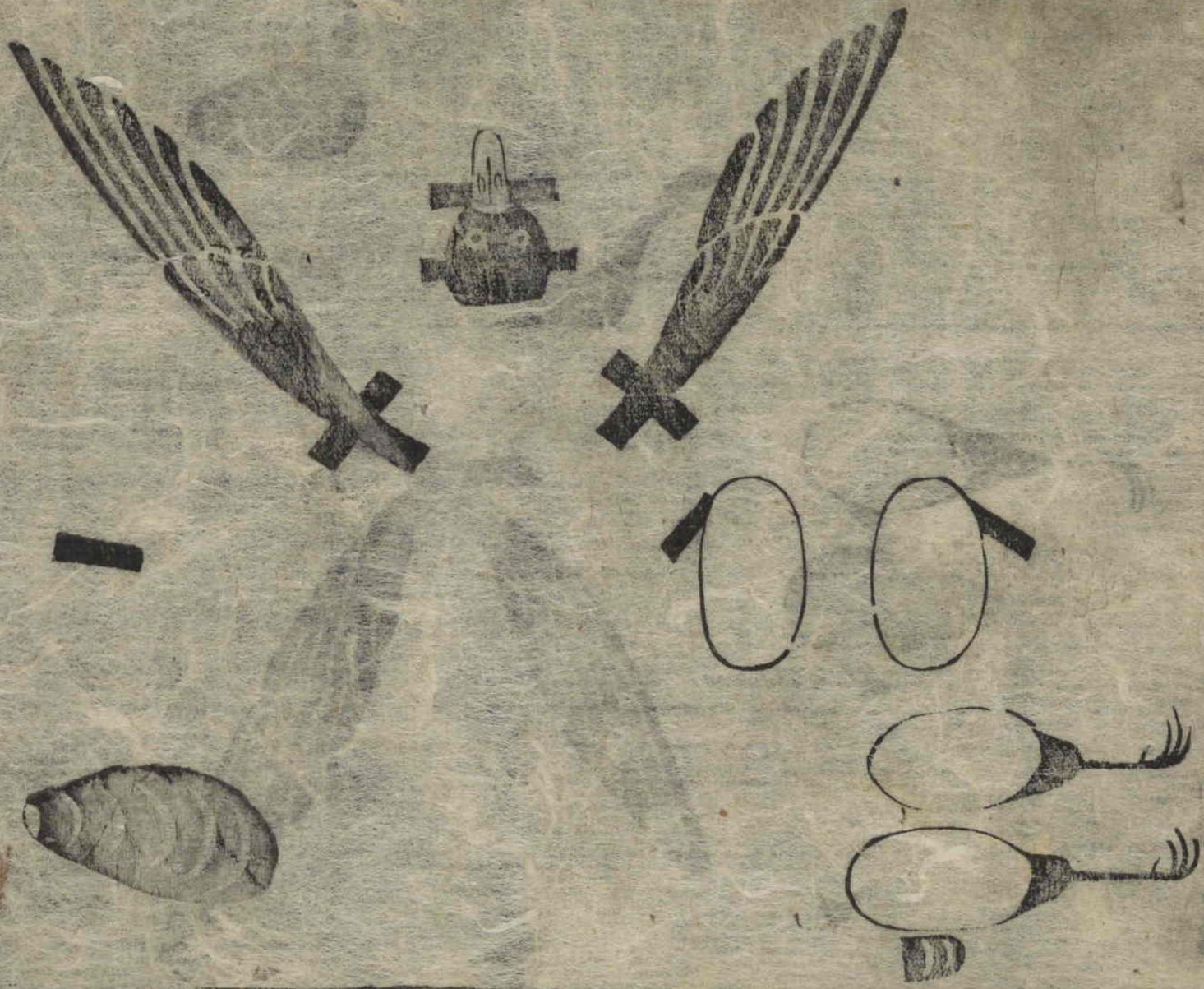
右四條家秘傳也

蘭部新兵法尉
吉岡五右衛門尉
蘭部和家守
相岡神右衛門尉
宮橋桂兵法尉
高橋五右衛門尉

寛永十九年
五月廿一日

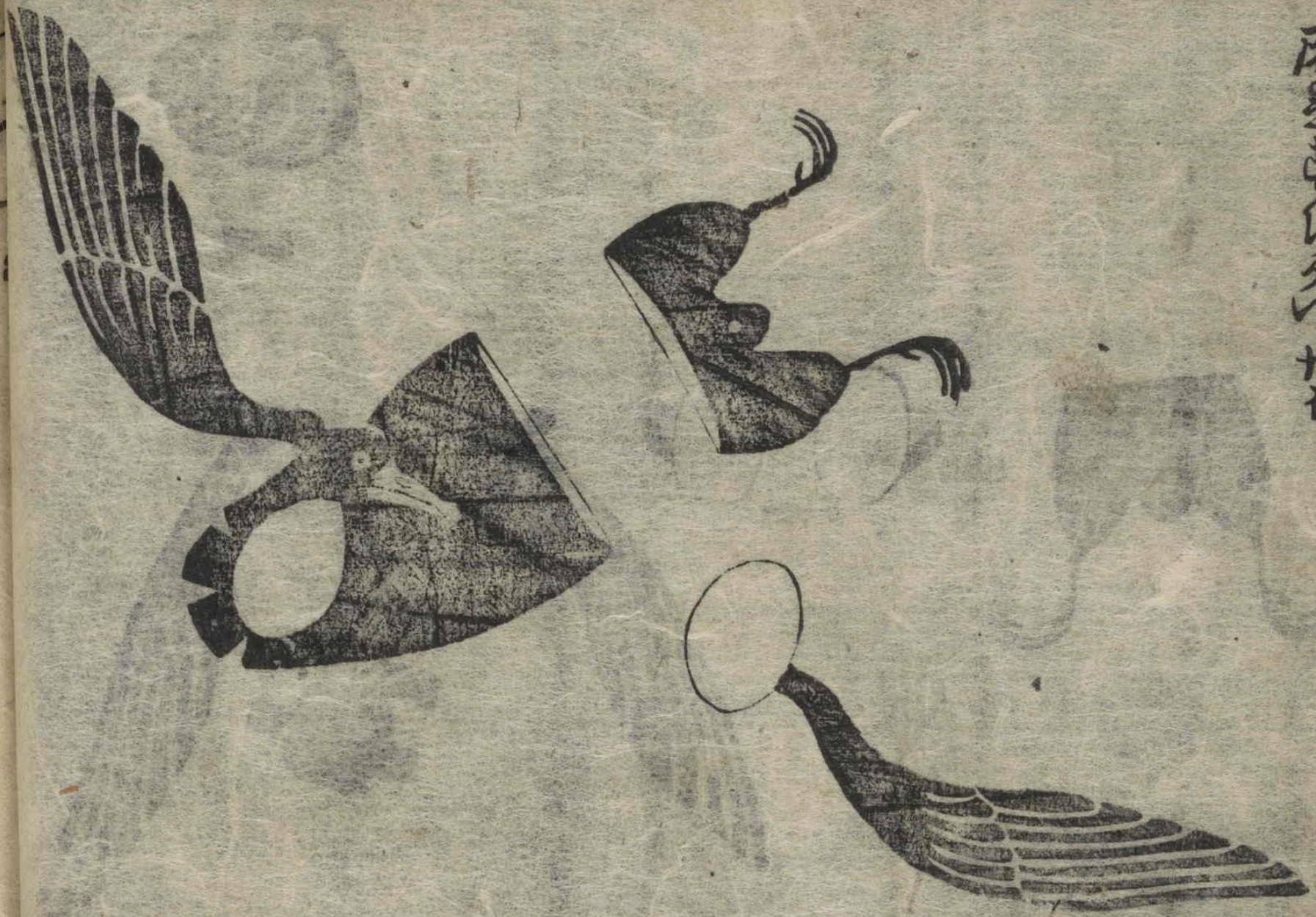
中村十右衛門尉

十五

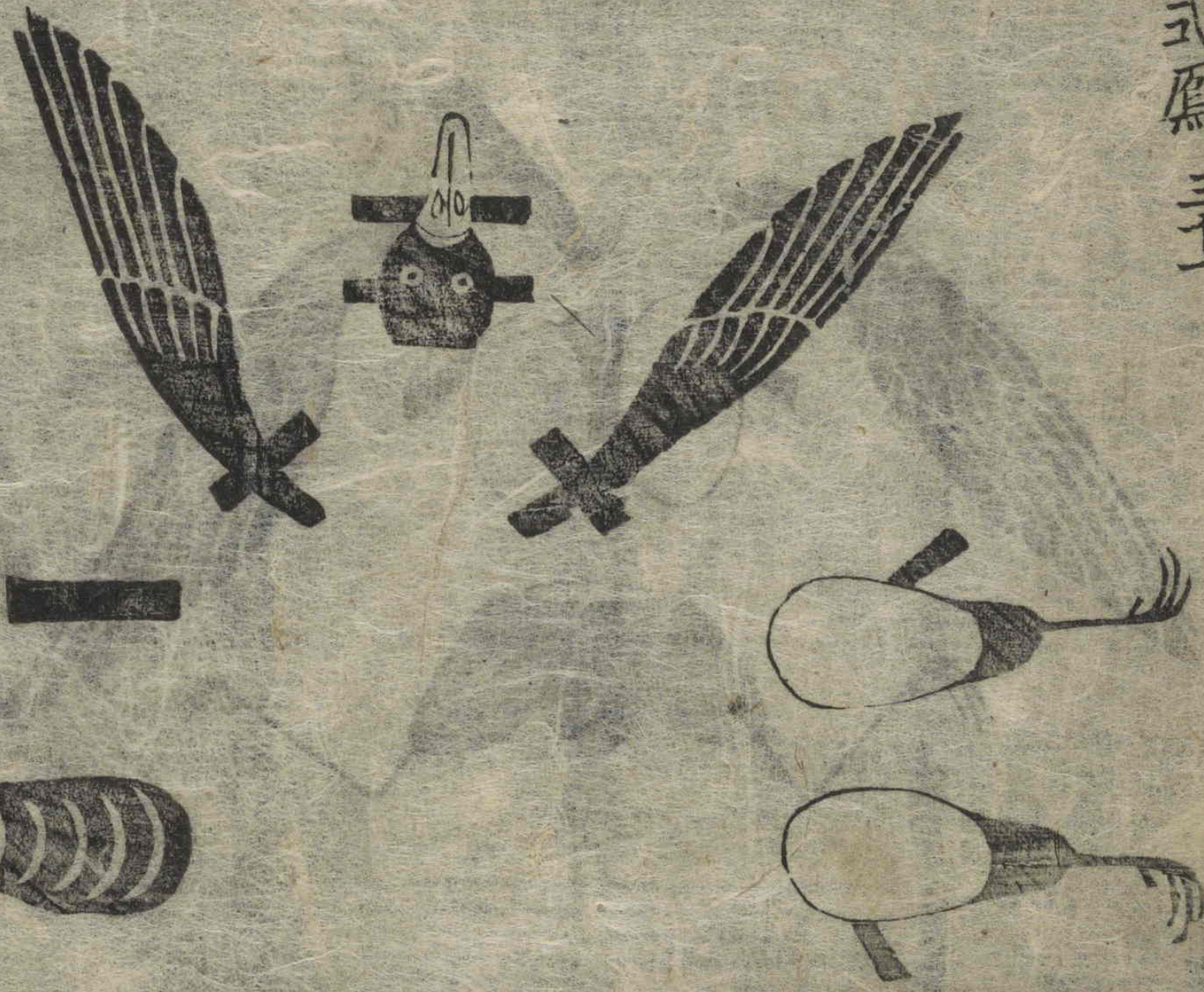


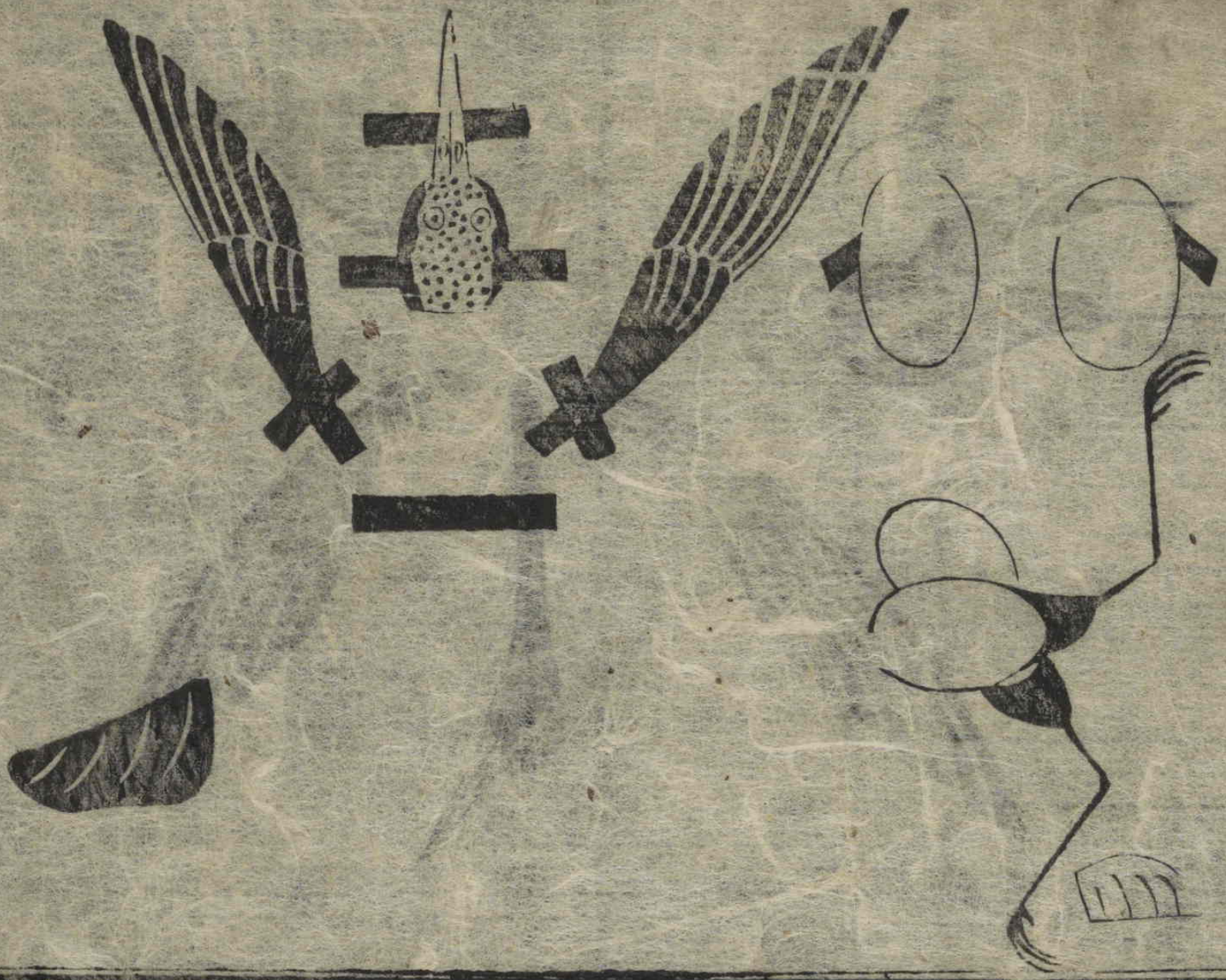
落鴈 廿一

初鴈之乱

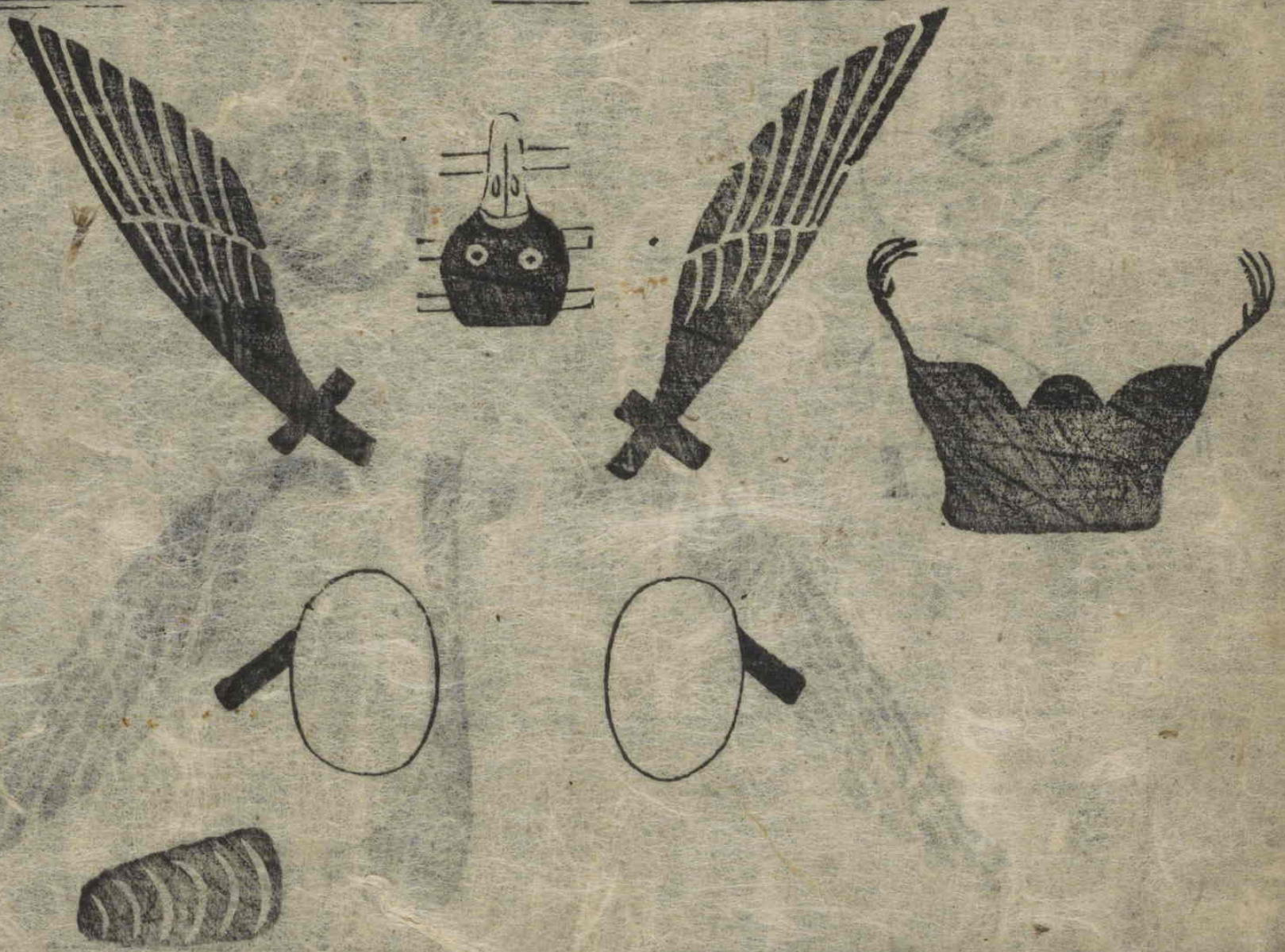


鳳之まちかへ 廿七





千年之鶴 三十九



必專不可有他見者也

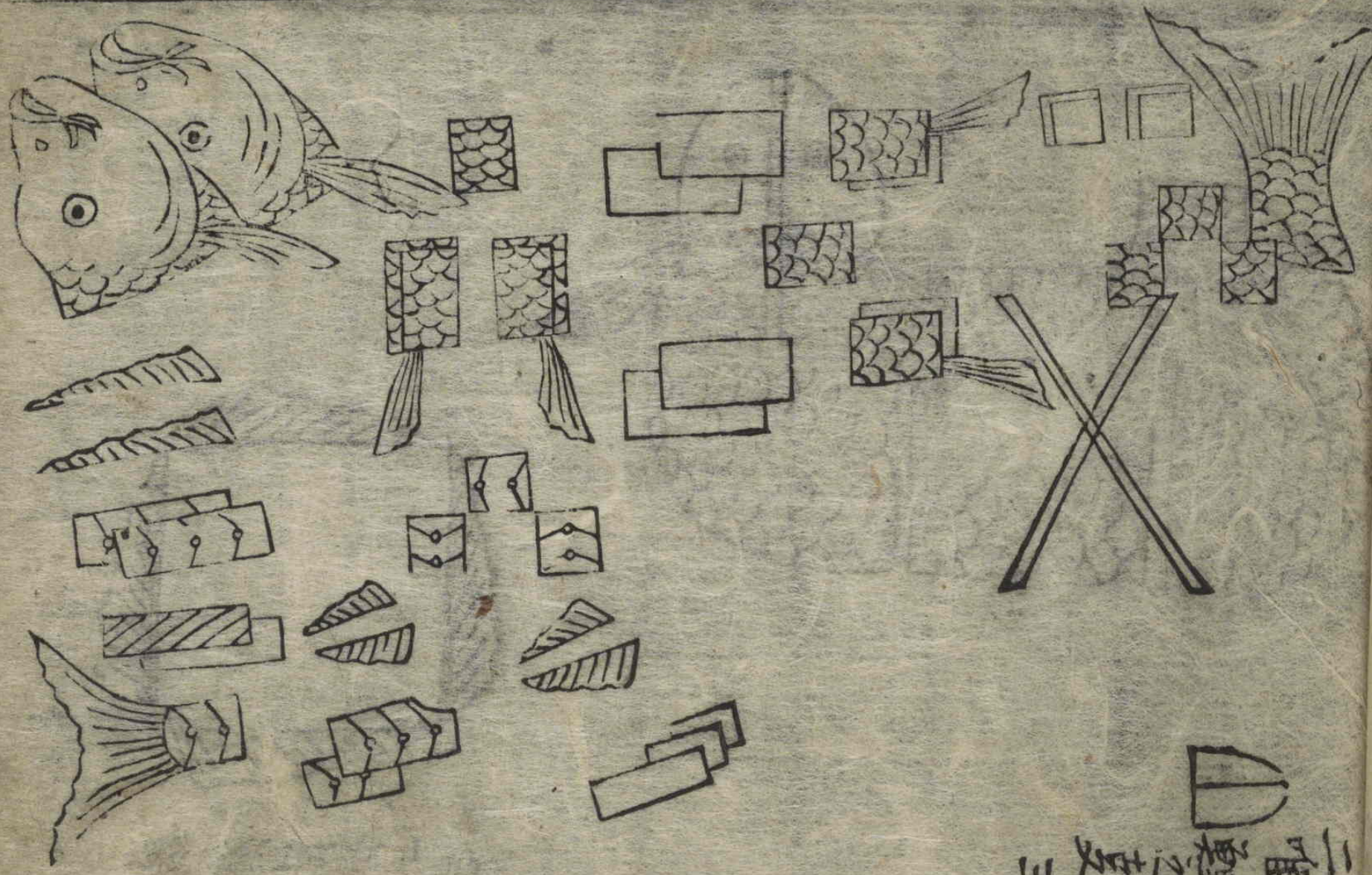
右四條家之秘傳不可有他見者也

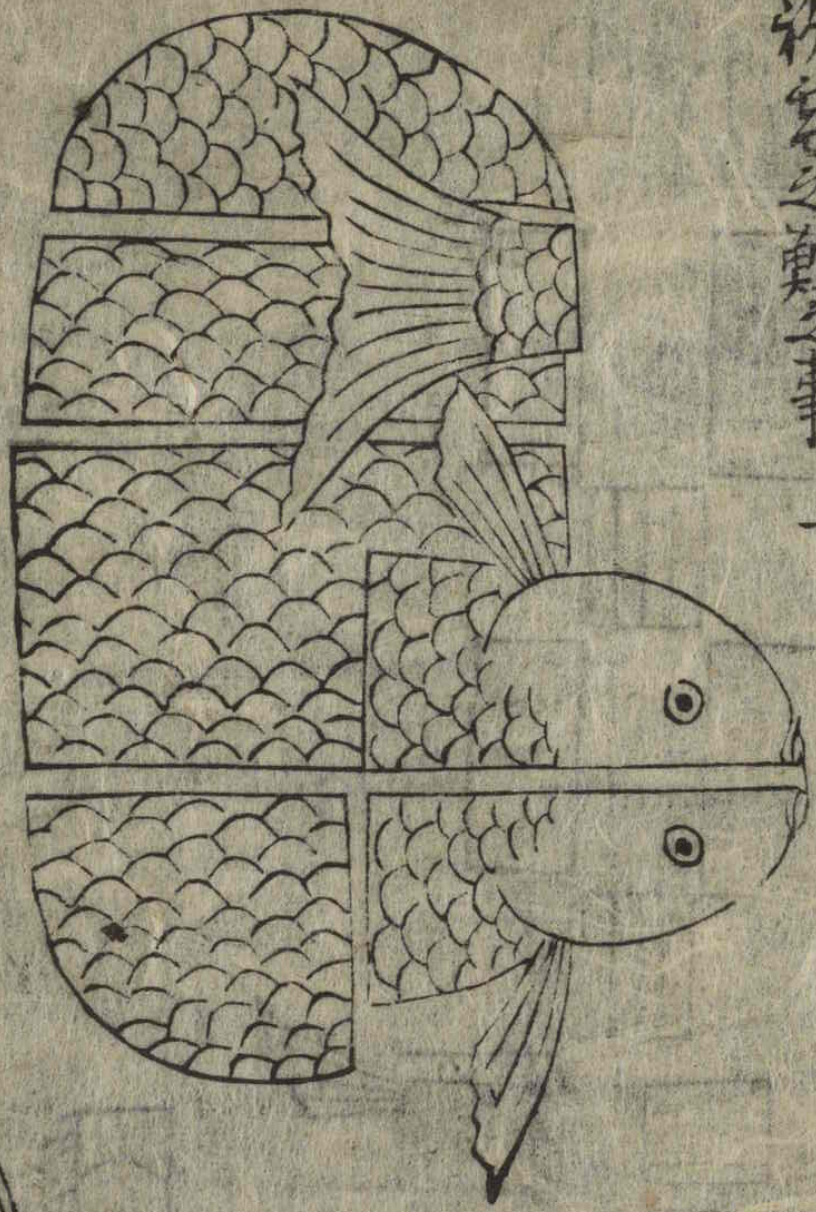
菌部新兵衛尉
吉田五右衛門尉
菌部和泉守
羽田神右衛門尉
高橋桂兵衛尉
高橋五右衛門尉

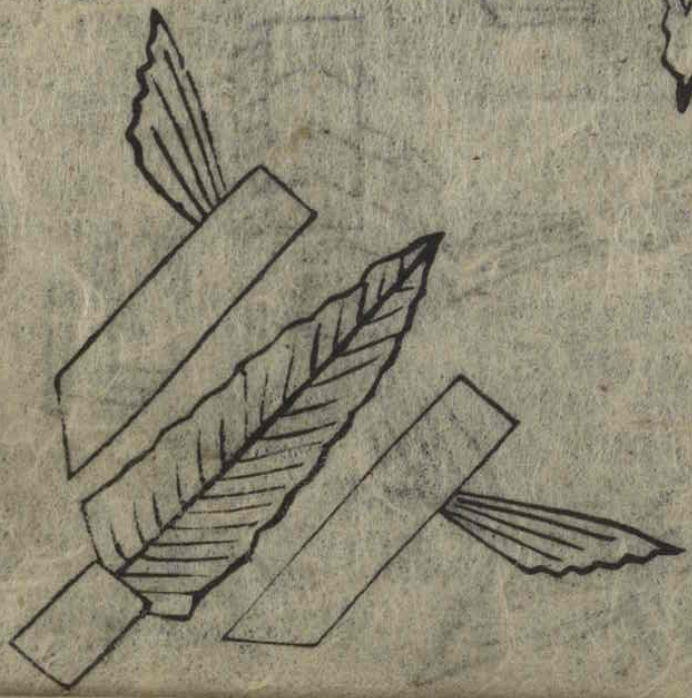
寛永十九年
午ノ
五月廿一日
中村十右衛門殿

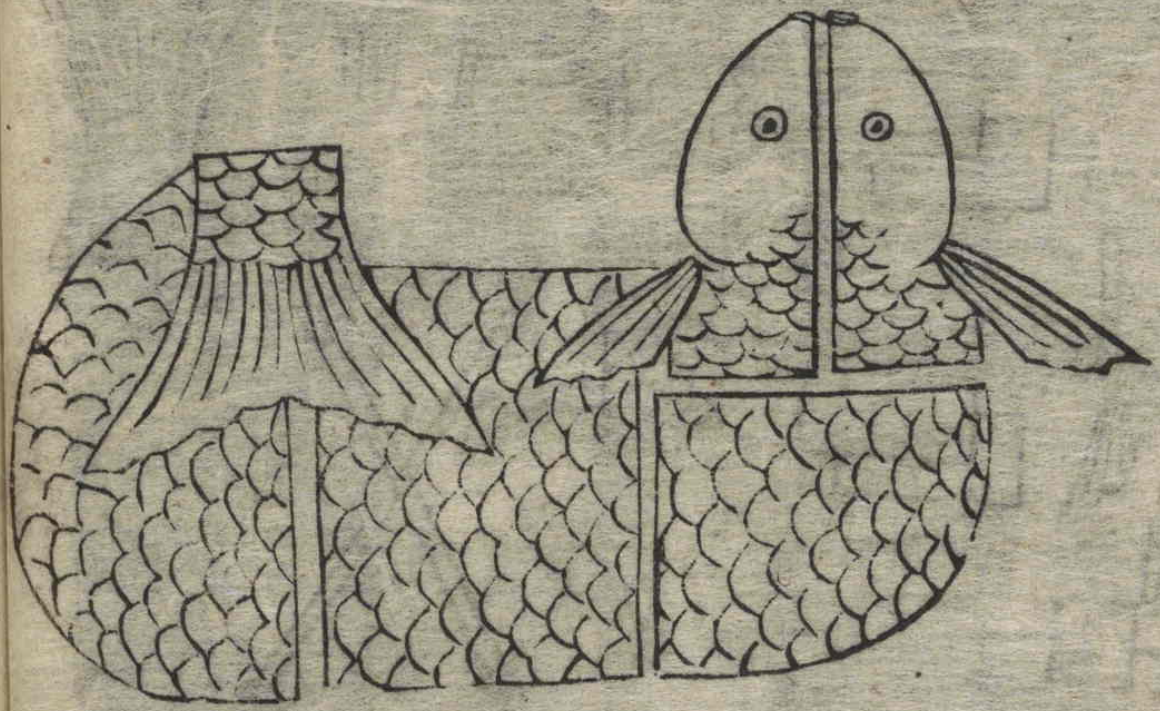
肴庖丁之支 一
袴着之鯉之事 二
二唯鯉之事 三
鱗煮筒切之事 四
初雪鯉之事 五
祝之鯉之事 六
雪朝鯉之事 七
庇之鯉之事 八
両身下弐之鯉事 九
斤手切之鯉之事 十
後来之鯉之事 十一
小鯉切之事 十二
洗鯉筒切之事 十三
斤身下奥躰鯉之事 十四
身下尾立鯉事 十五
斤身下之鯉之事 十六
藻包鯉之事 十七
御前包丁鯉之事 十八
二鯉之事 十九
社頭之鯉之事 廿
出陣之鯉事 廿一
泉之鯉之事 廿二
真薦包鯉事 廿三
檀紙包之鯉之事 廿四

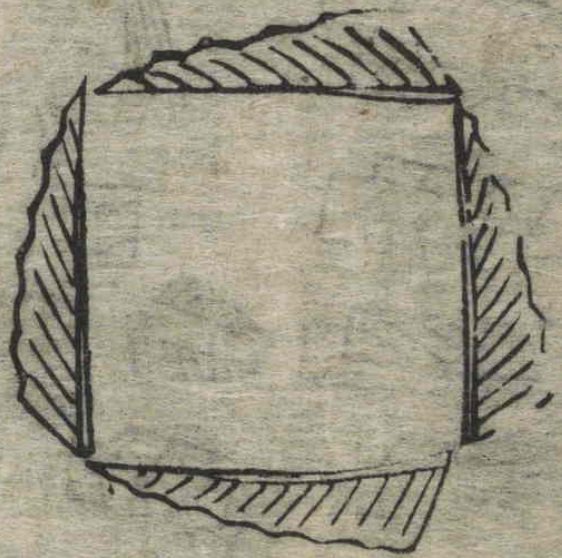
八十嶋詣之鯉事 廿五
兩身下與躰鯉之事 廿六
海道之鯉之事 廿七
移徒之鯉之事 廿八
元服之鯉事 廿九
鱗包之鯉之事 卅
長厅身下之鯉事 卅一
鰭立之鯉事 卅二
兩身下尾立鯉事 卅三
聟娶嫁娶鯉事 卅四
馬場之鯉之事 卅五
懸之鯉之事 卅六
龍門 卅七
鯉切 卅八
檀紙包之鯉 卅九
藻包之鯉 四十
花見之鯉 四十一
真薦包之鯉 四十二
丁鯉 四十三
長命之鯉 四十四
長懴之鯉 四十五
月見之鯉 四十六
舩中之鯉 四十七
肴鮒 四十八

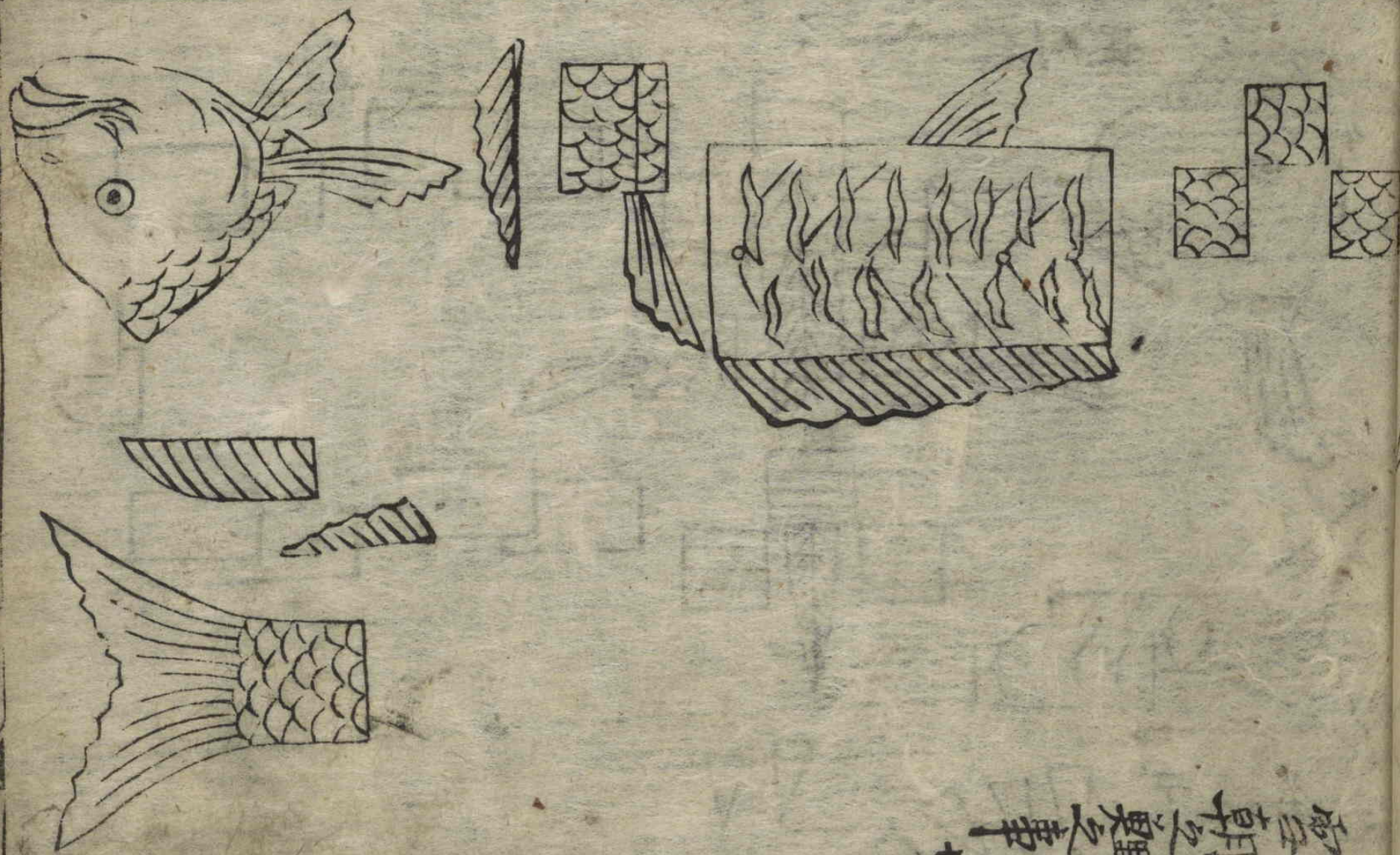


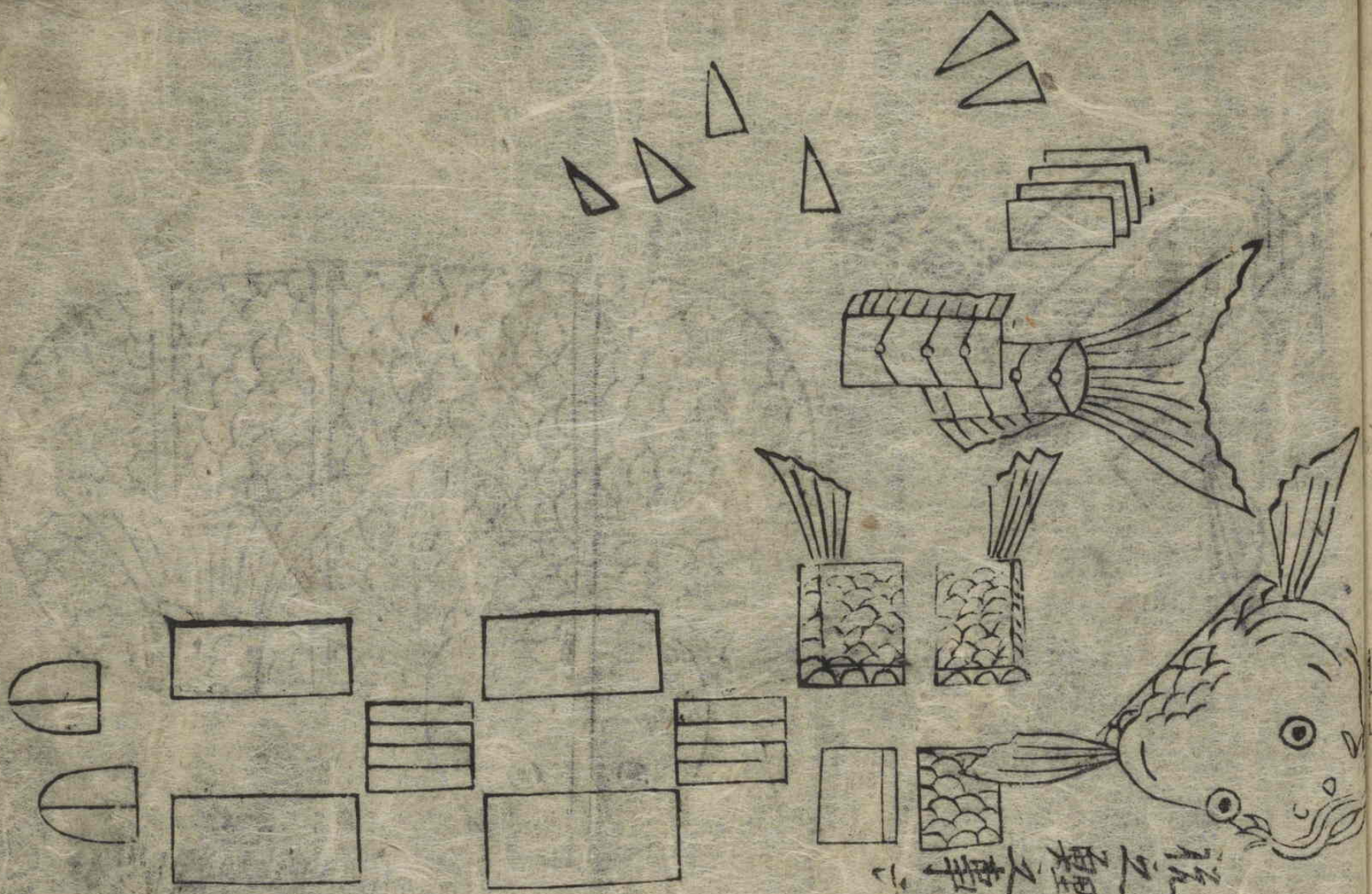




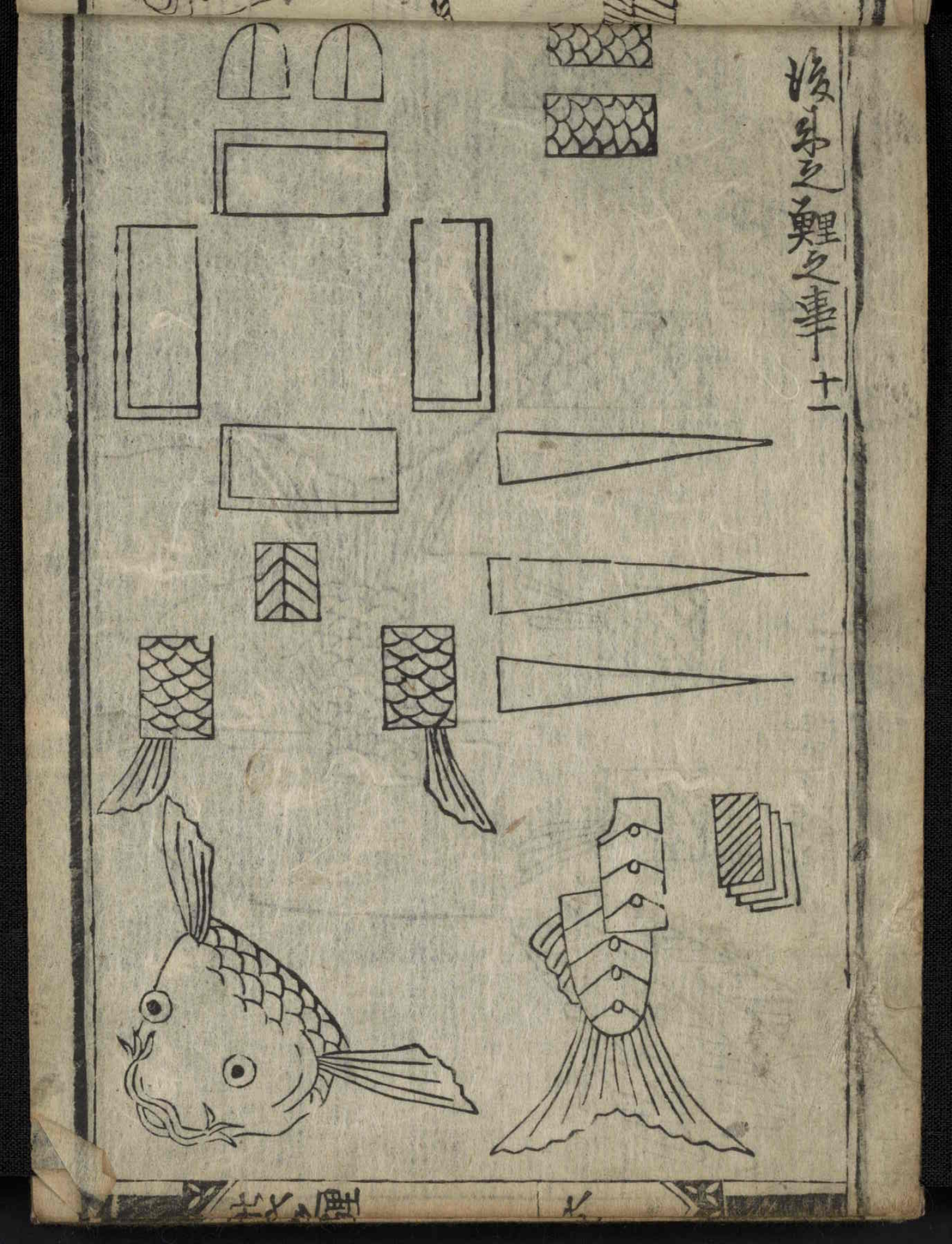


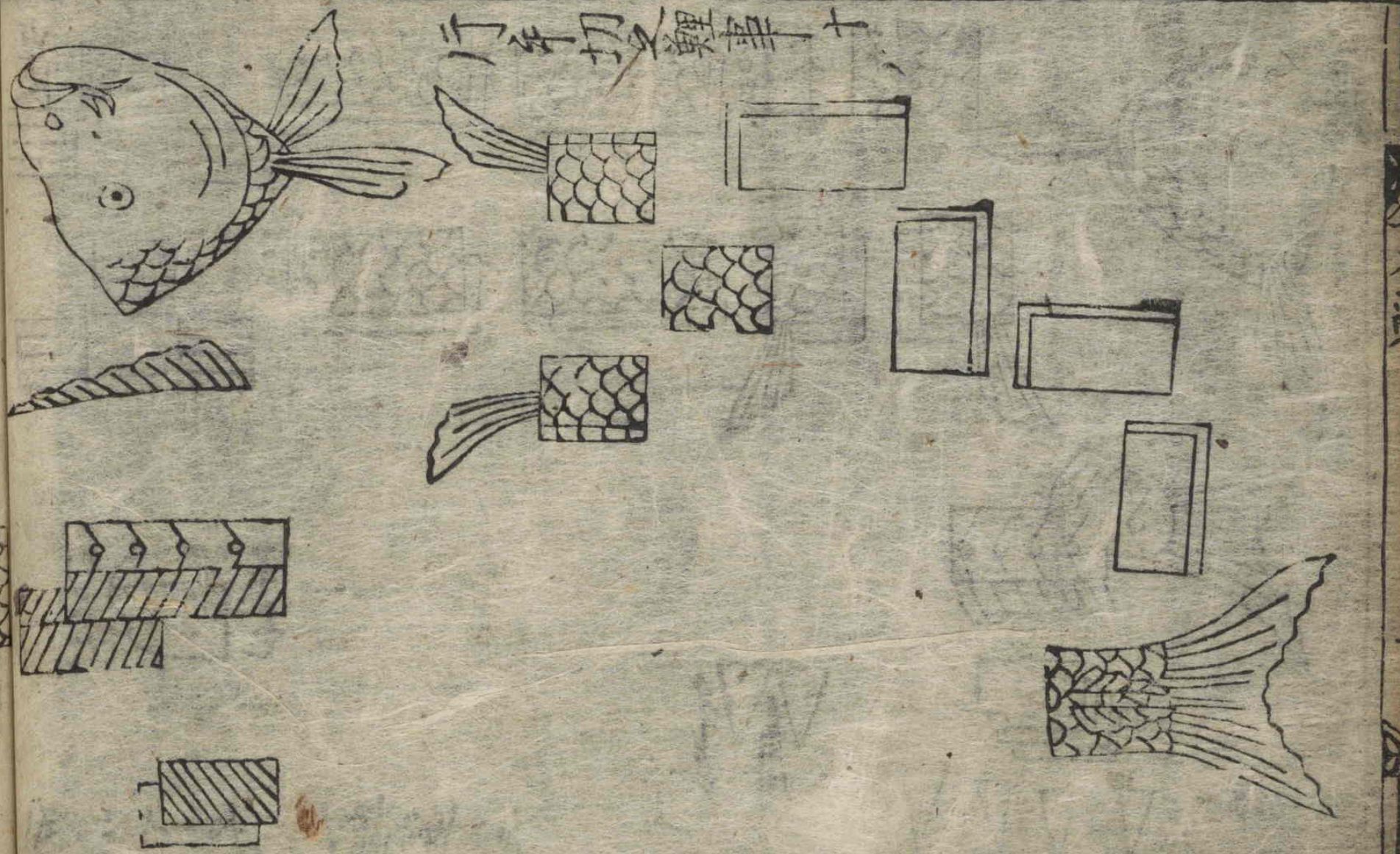




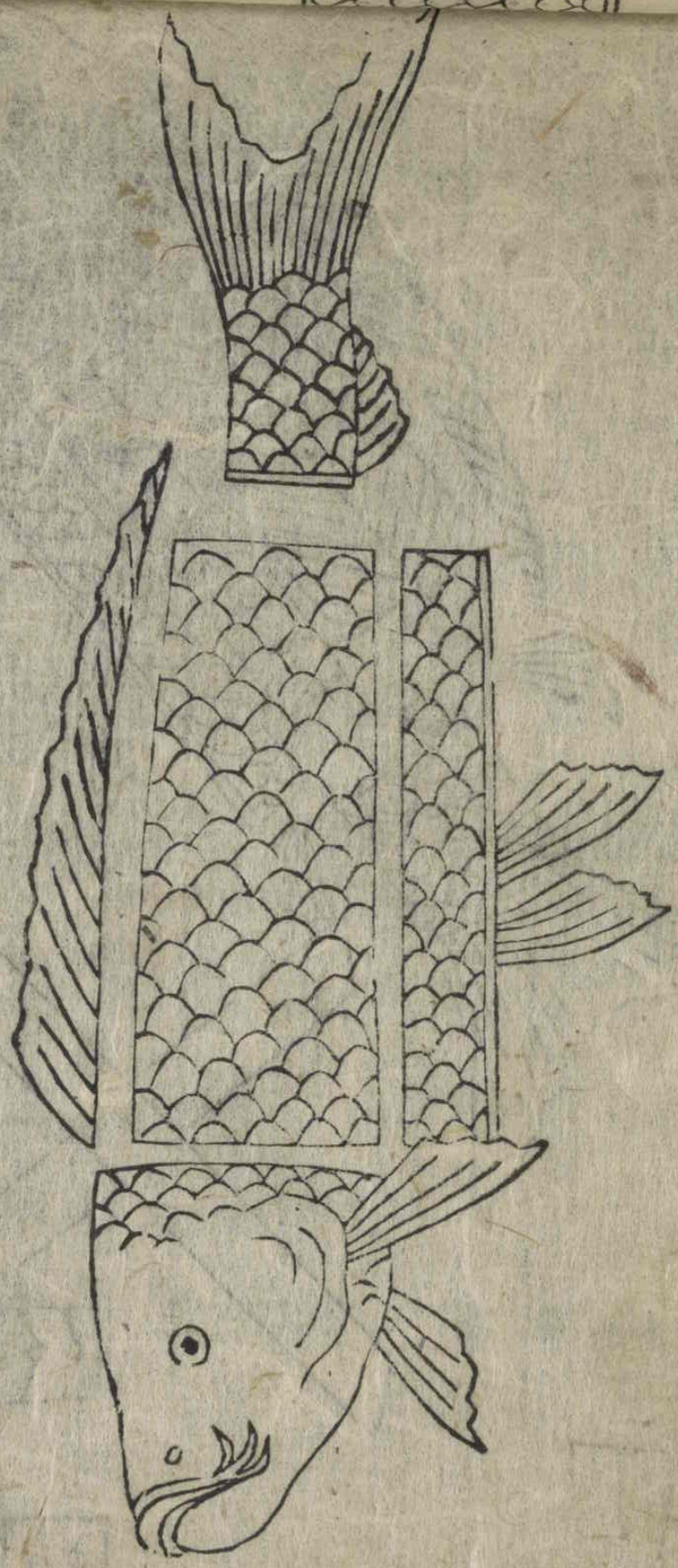


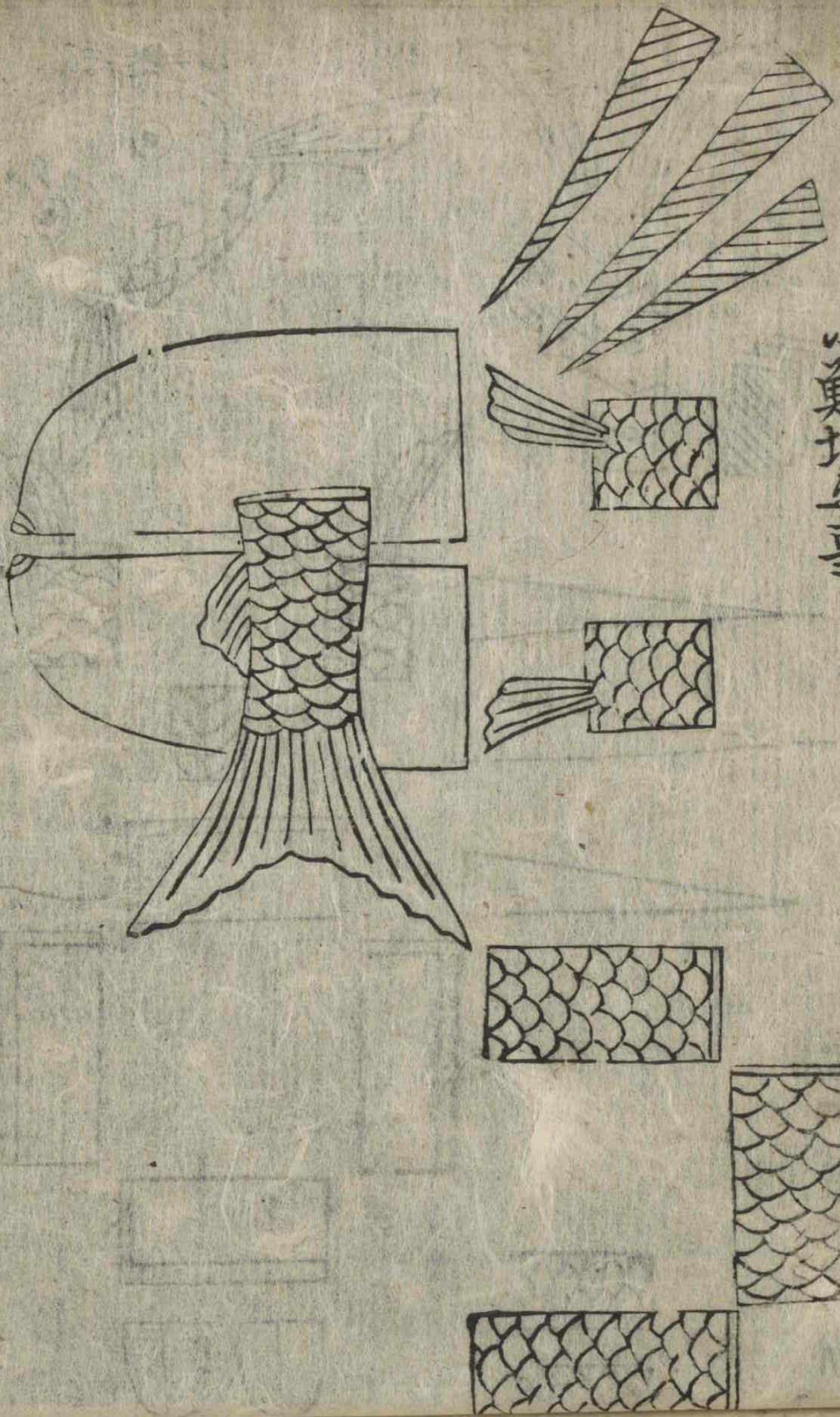
両身下之式之鯉事 九


坂本之鯉之事 十一

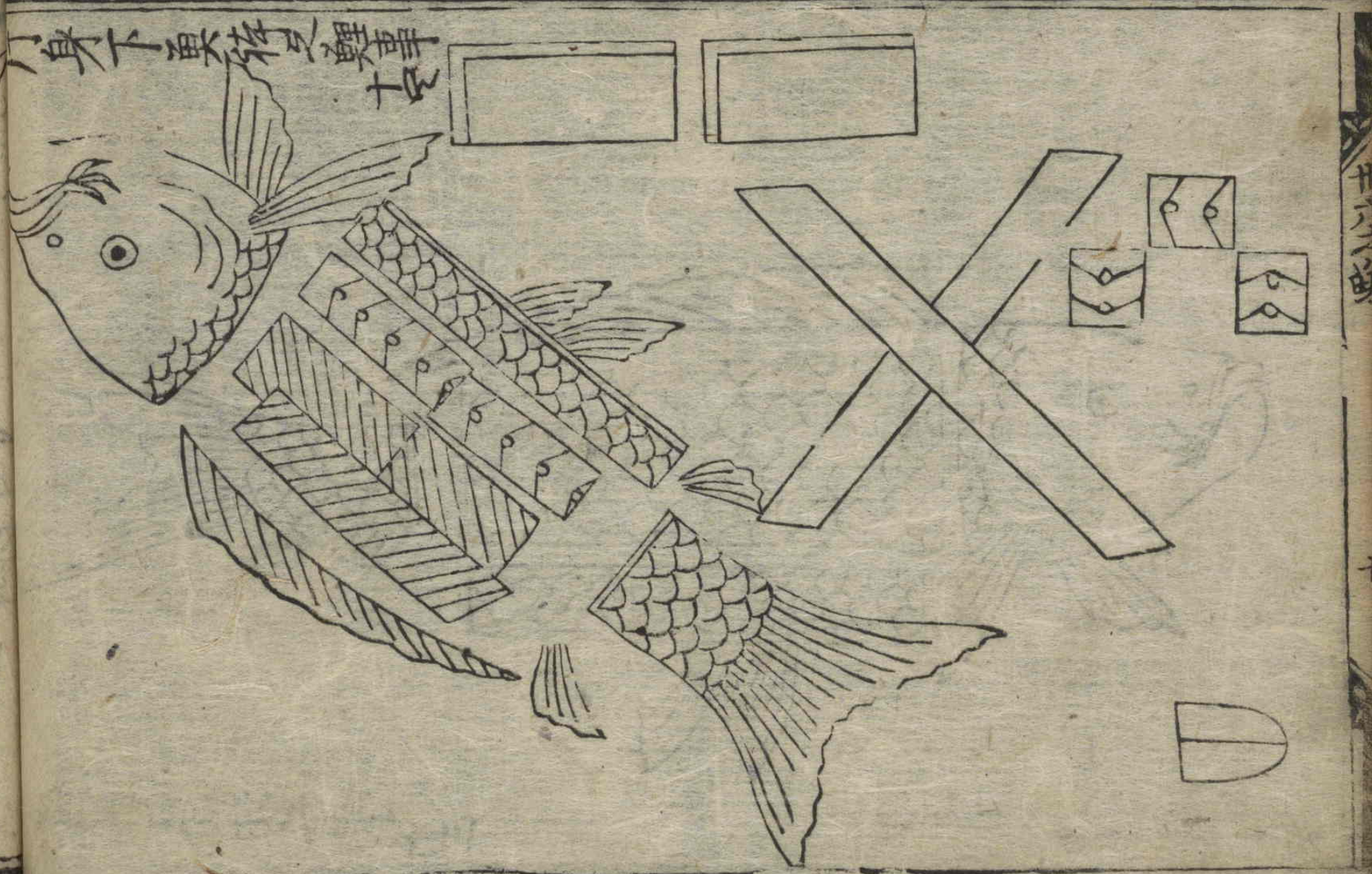


洗鯉筒切之事 十三

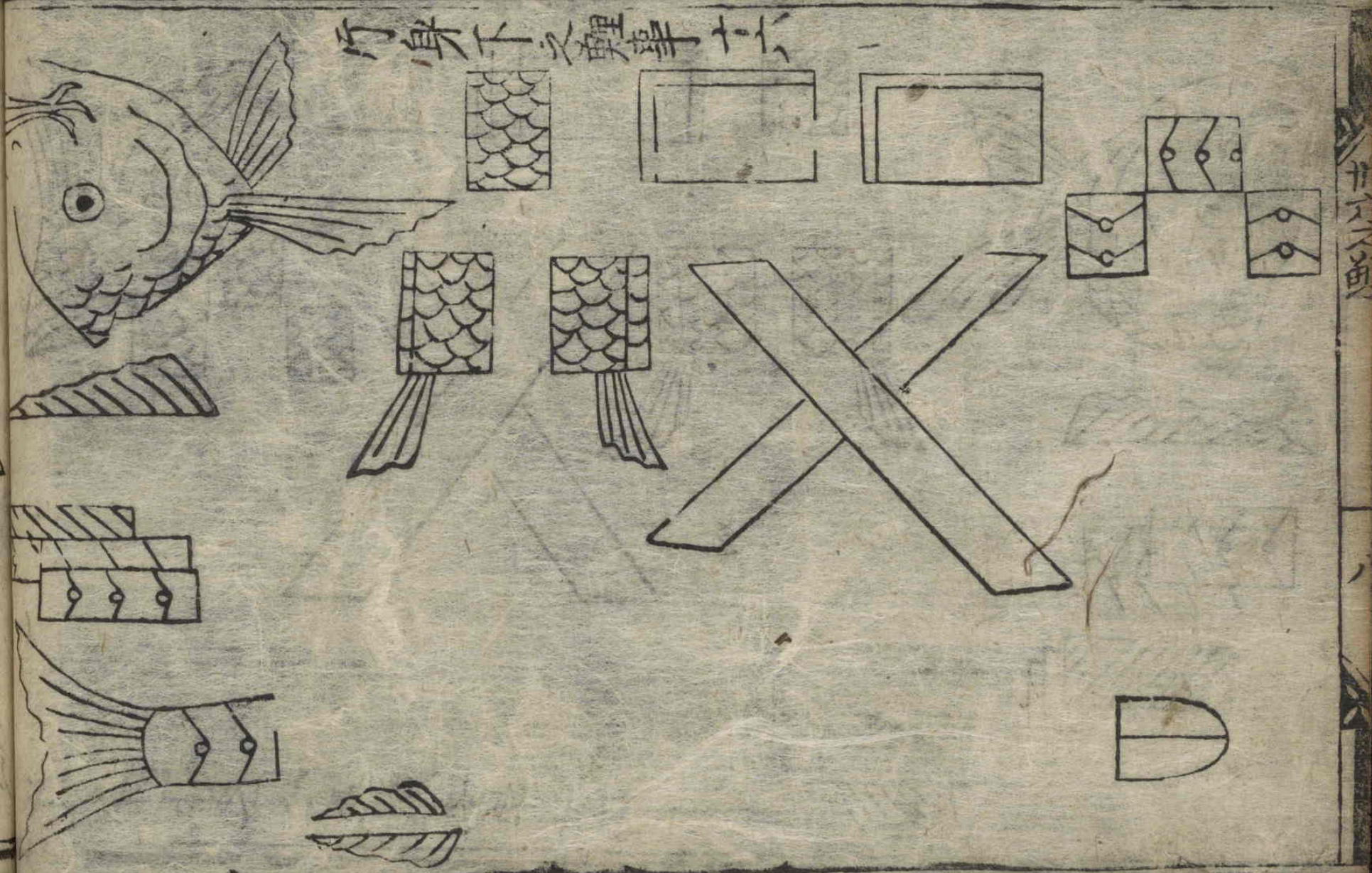


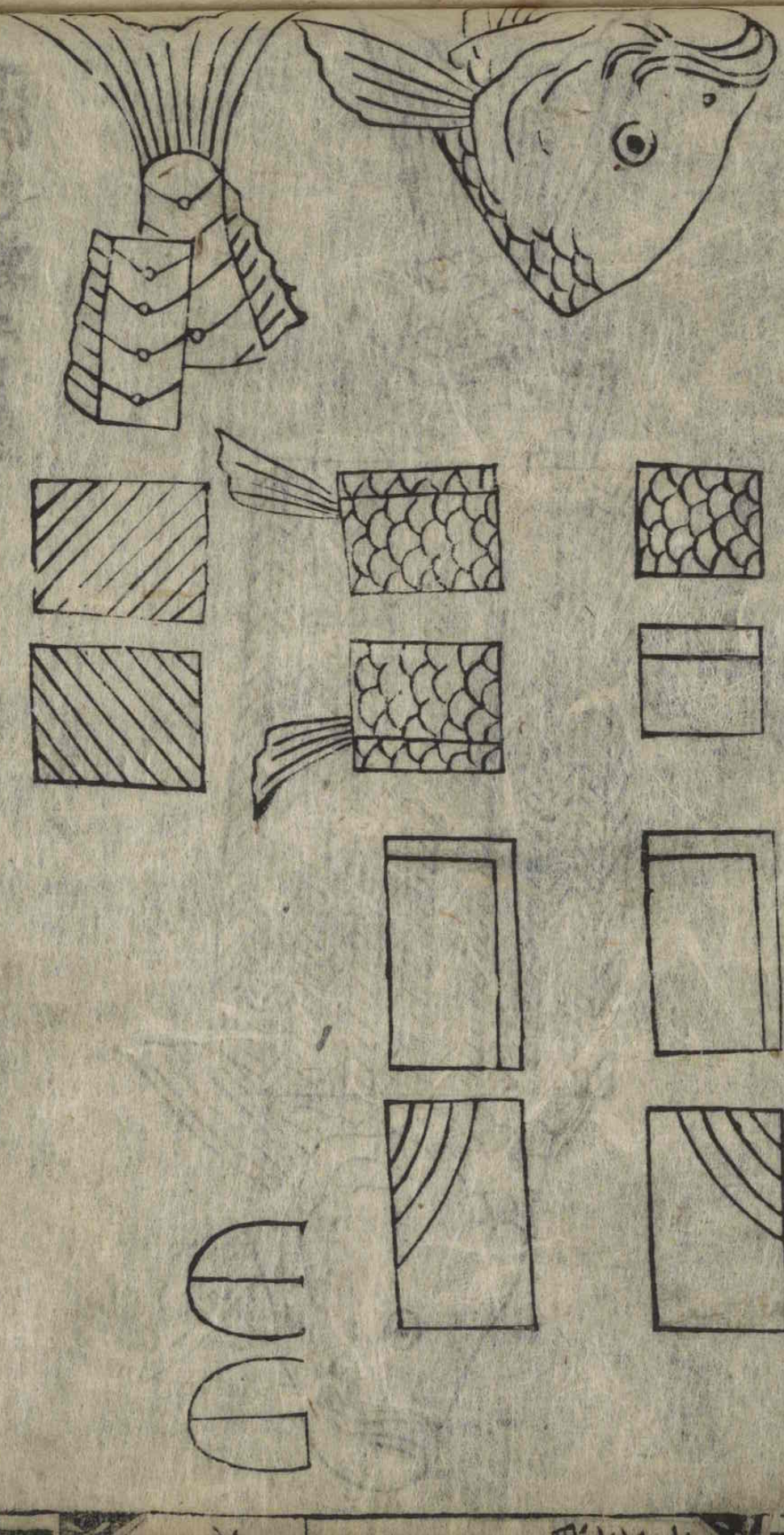


小鯉切之事 十二



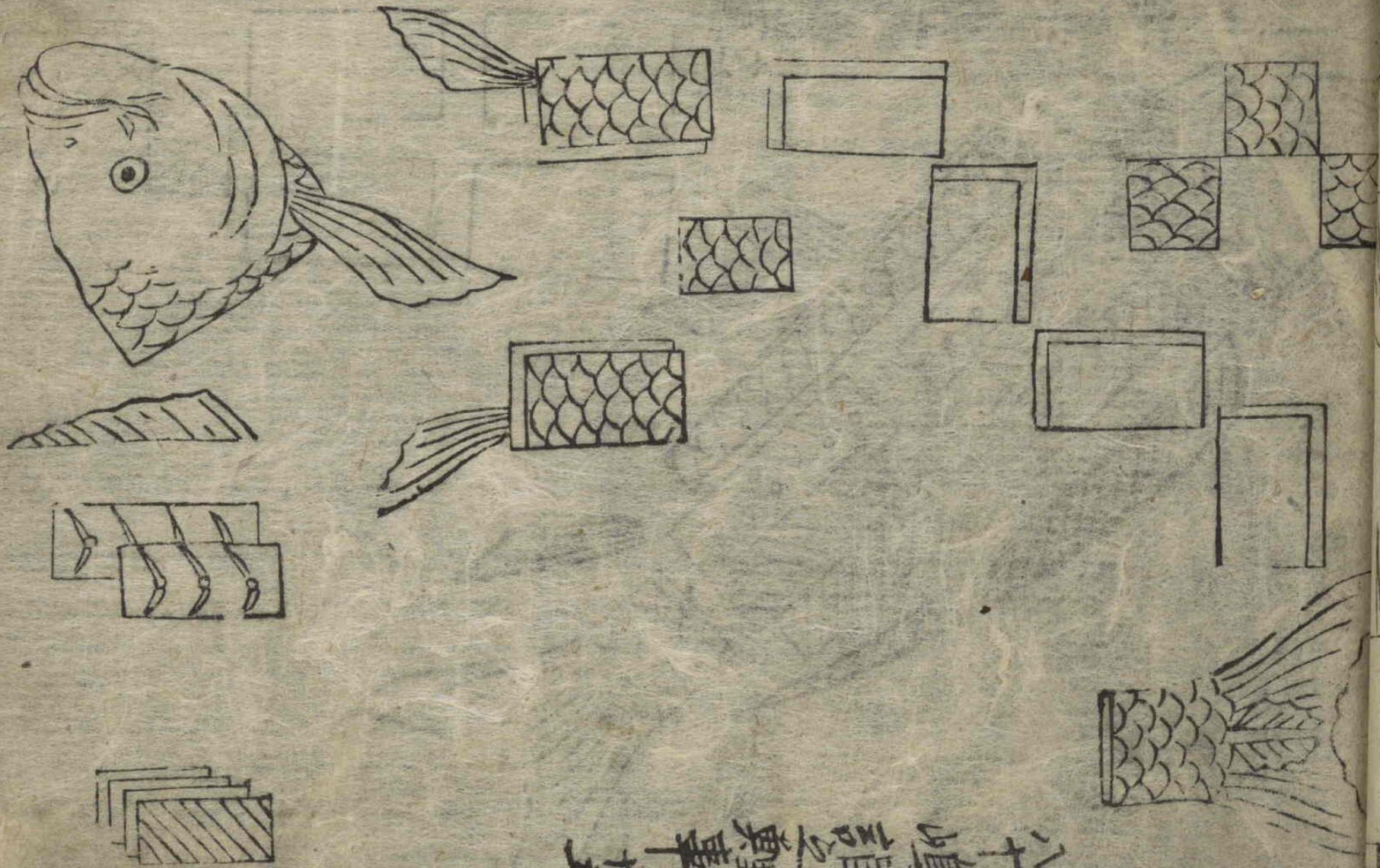
藻包鯉之事 十七



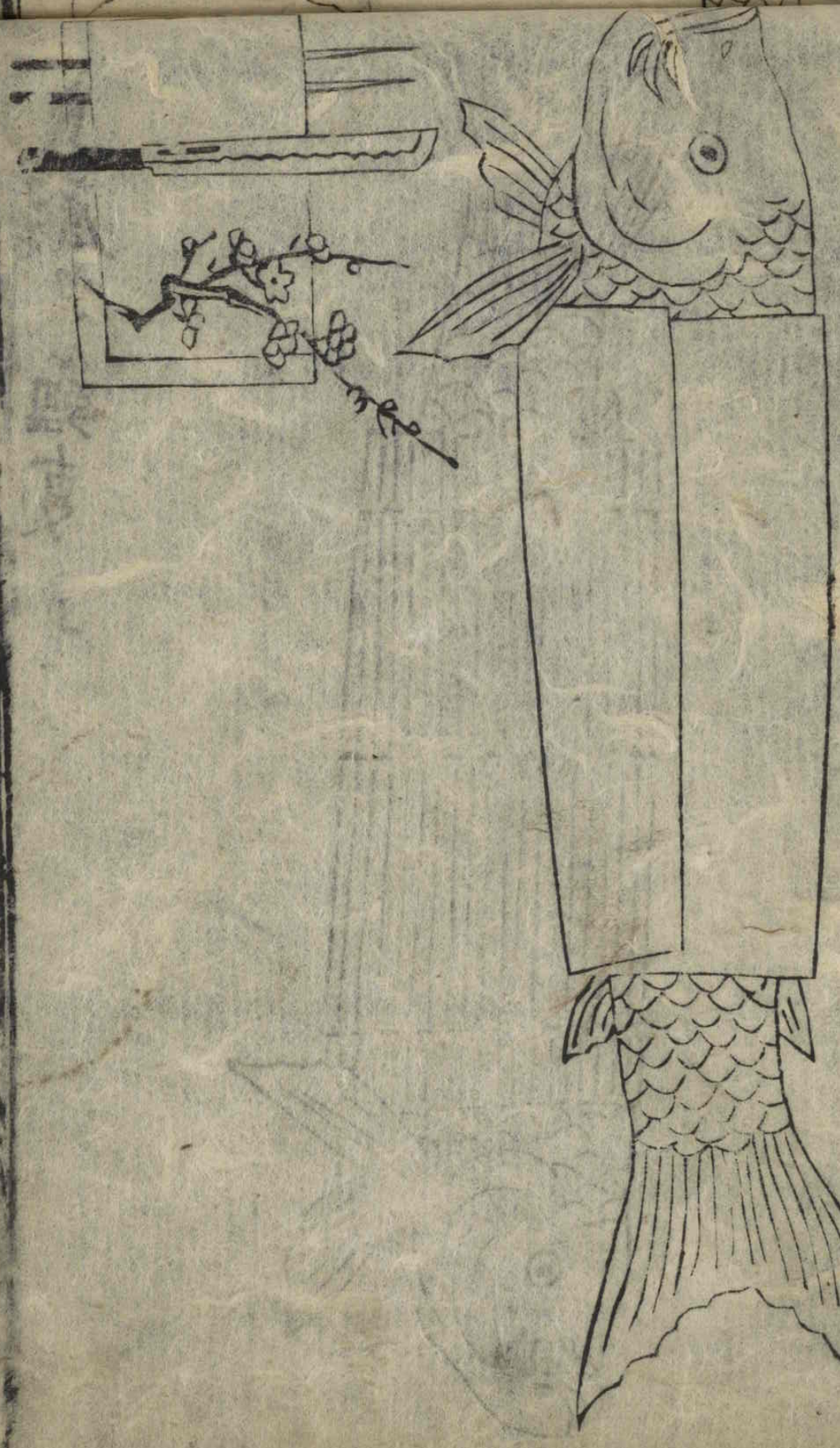


御前庖丁鯉之事 十八

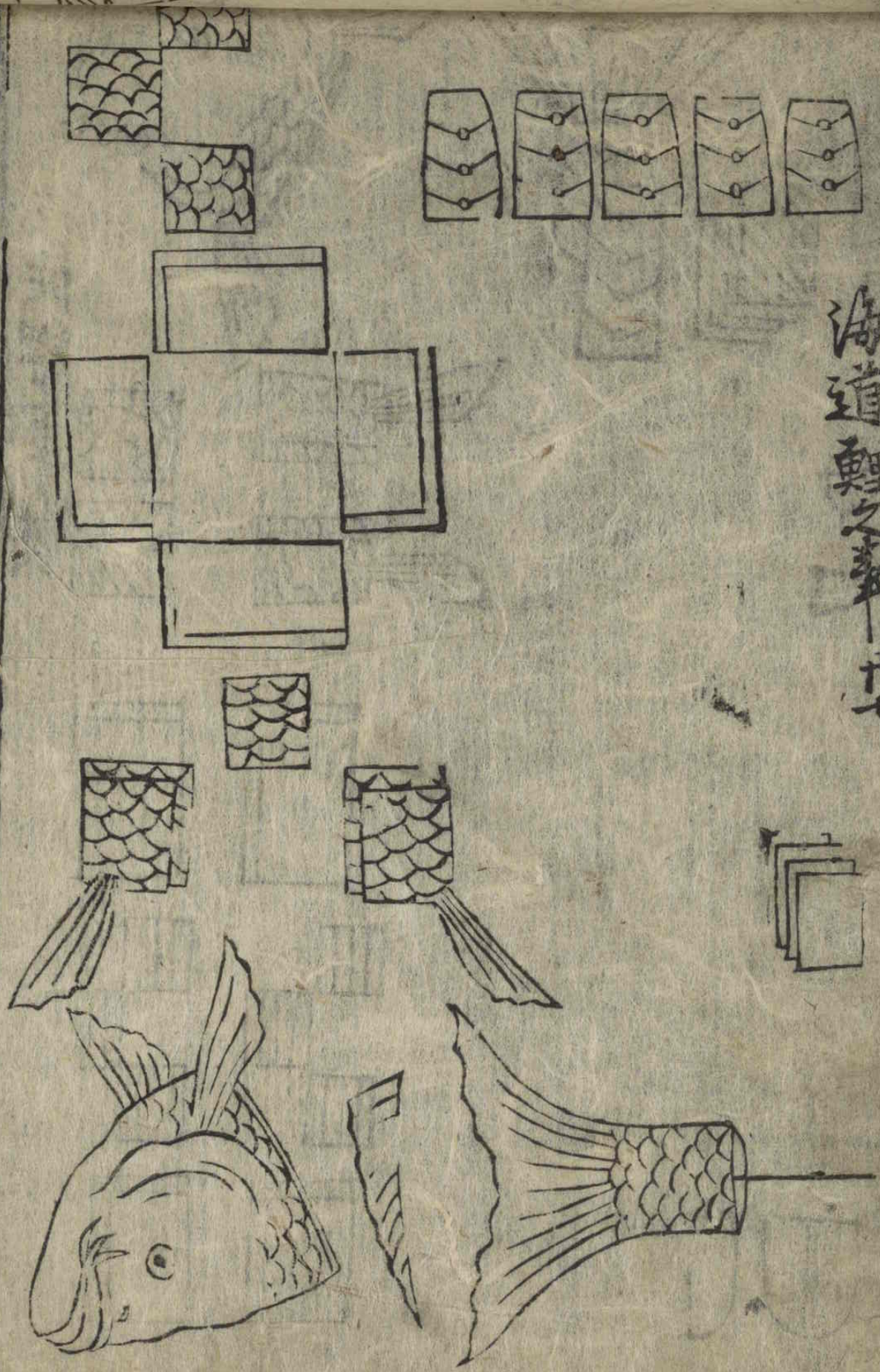
出陣鯉之事 九一

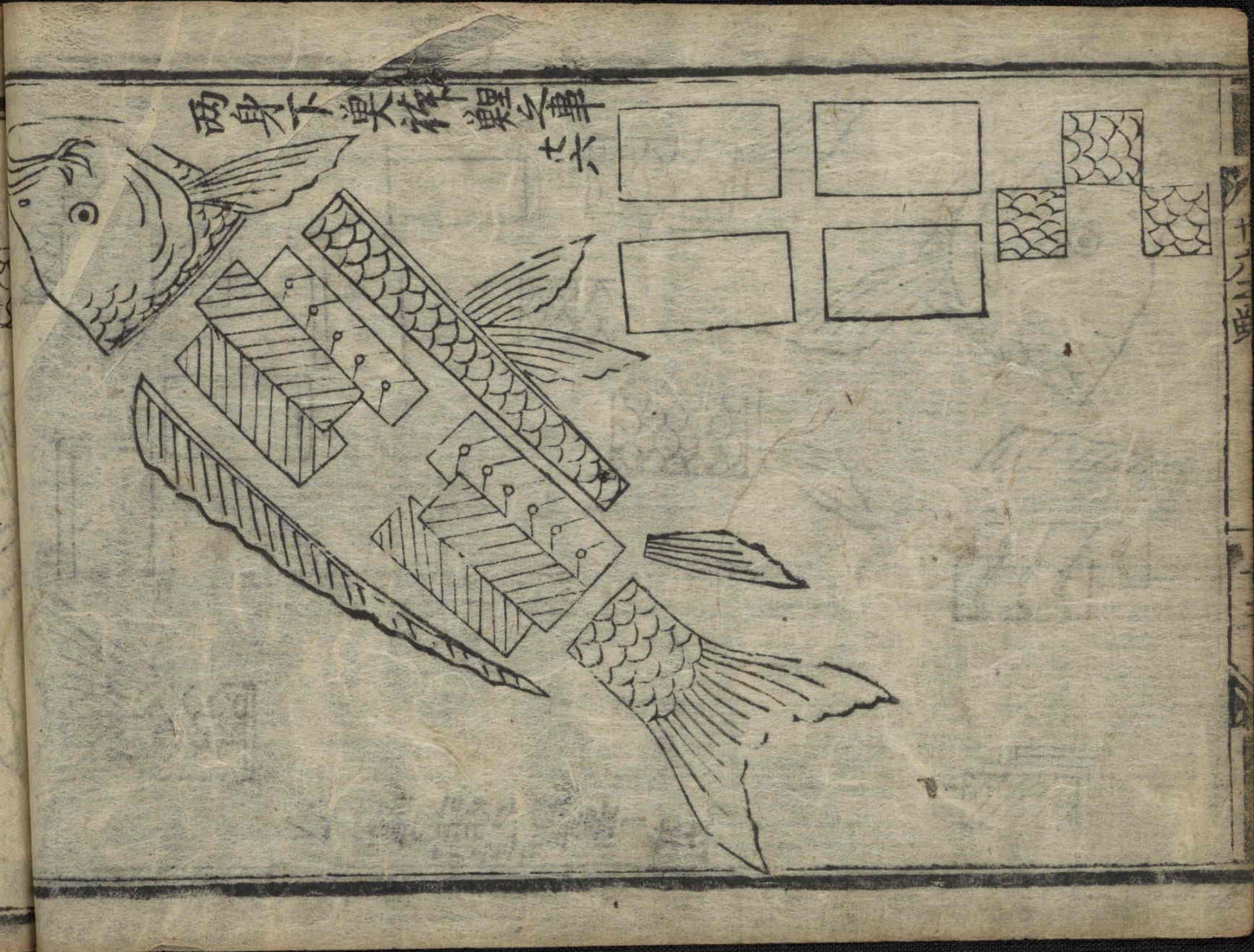


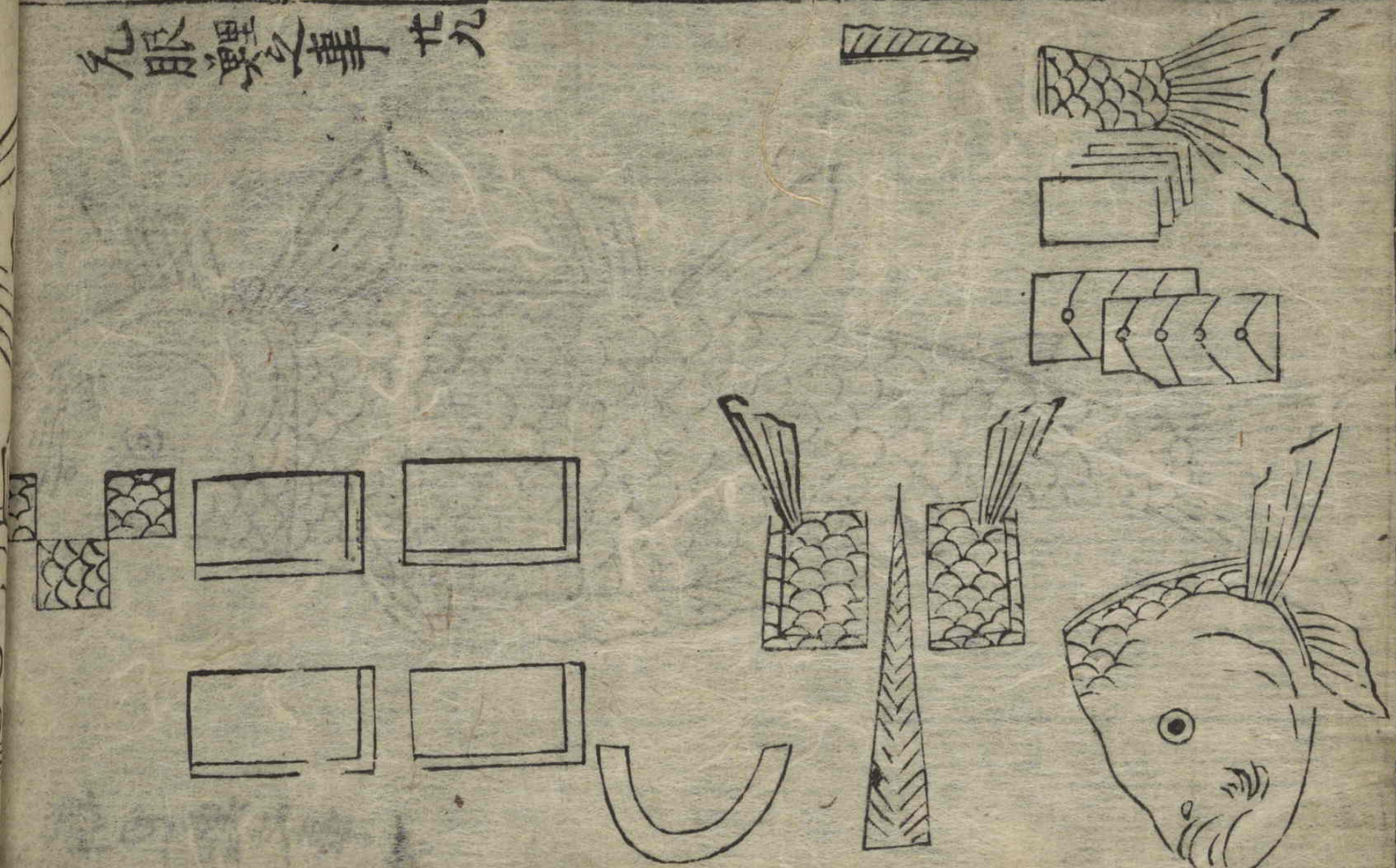
檀紙包之鯉事 九四

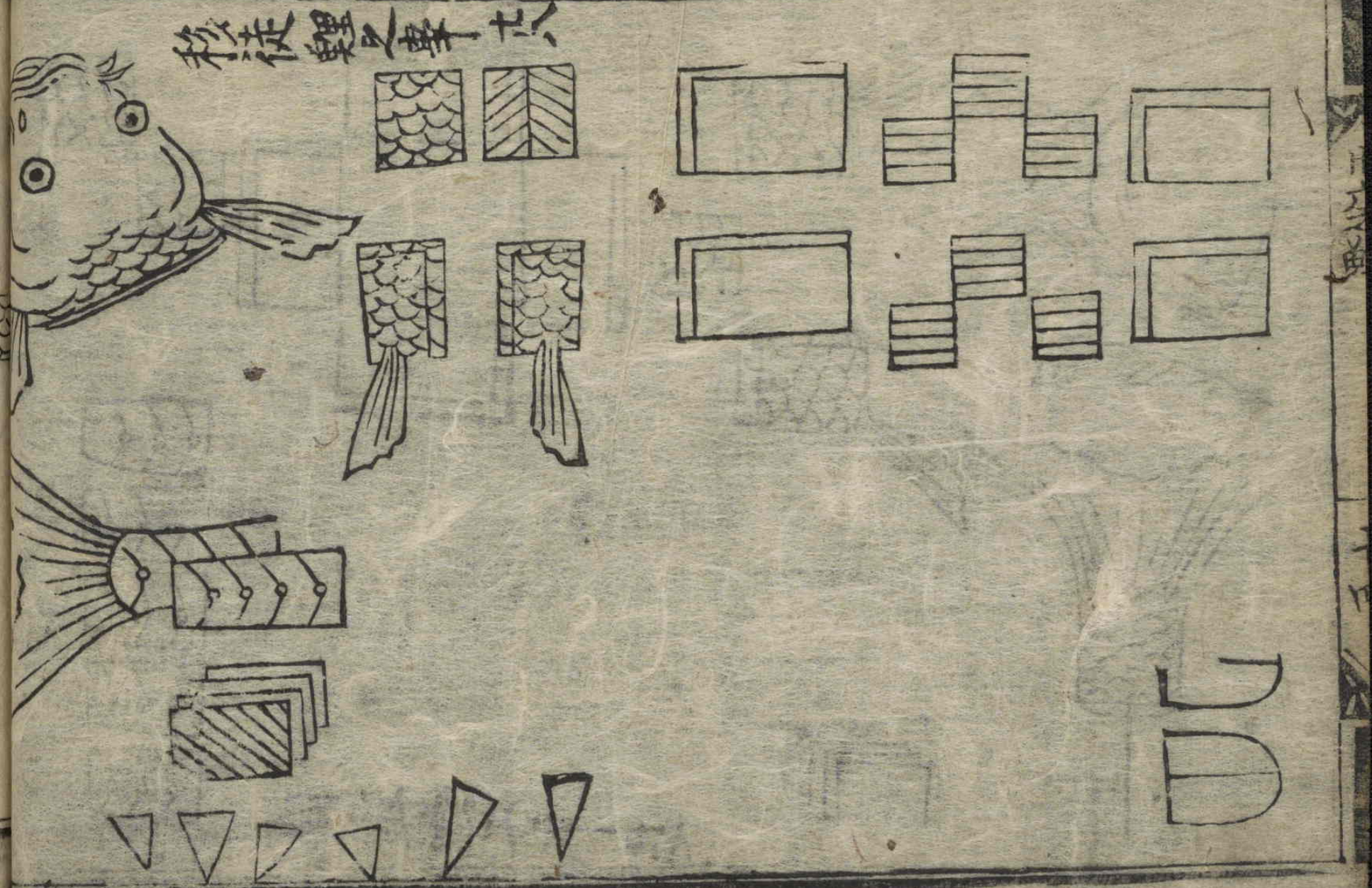


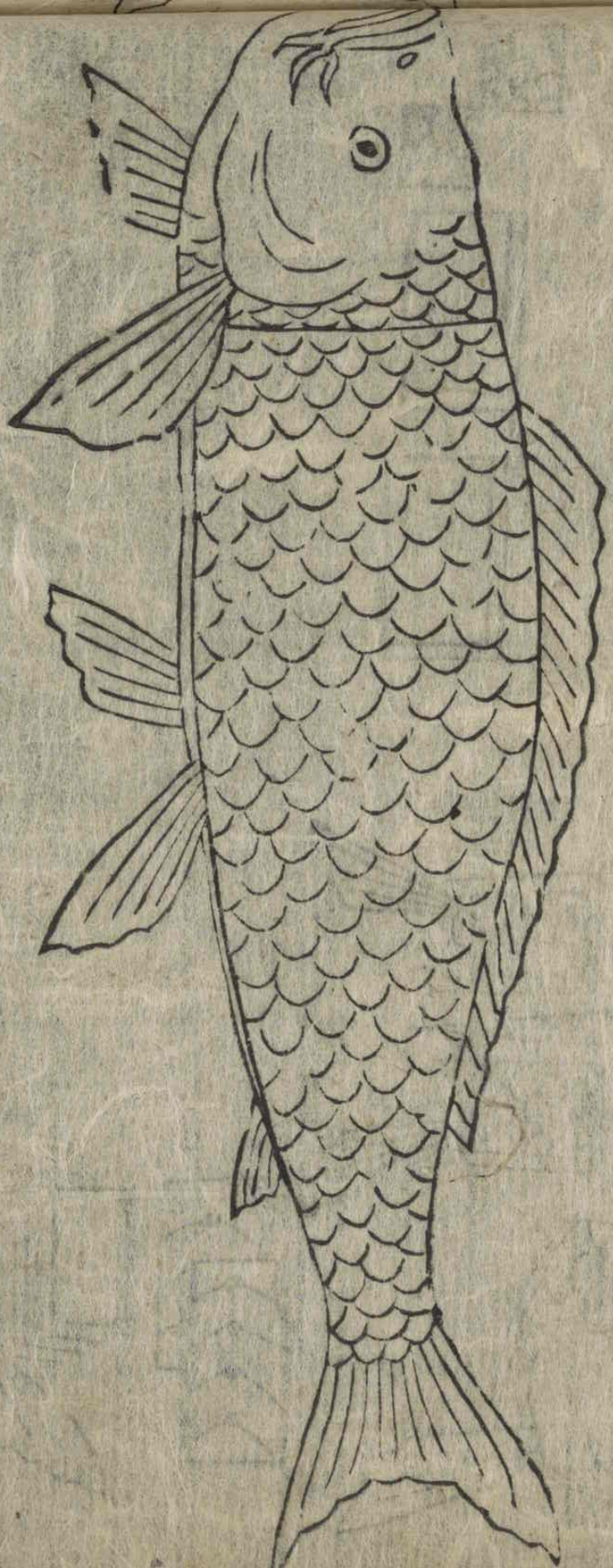
海道鯉之華 廿七



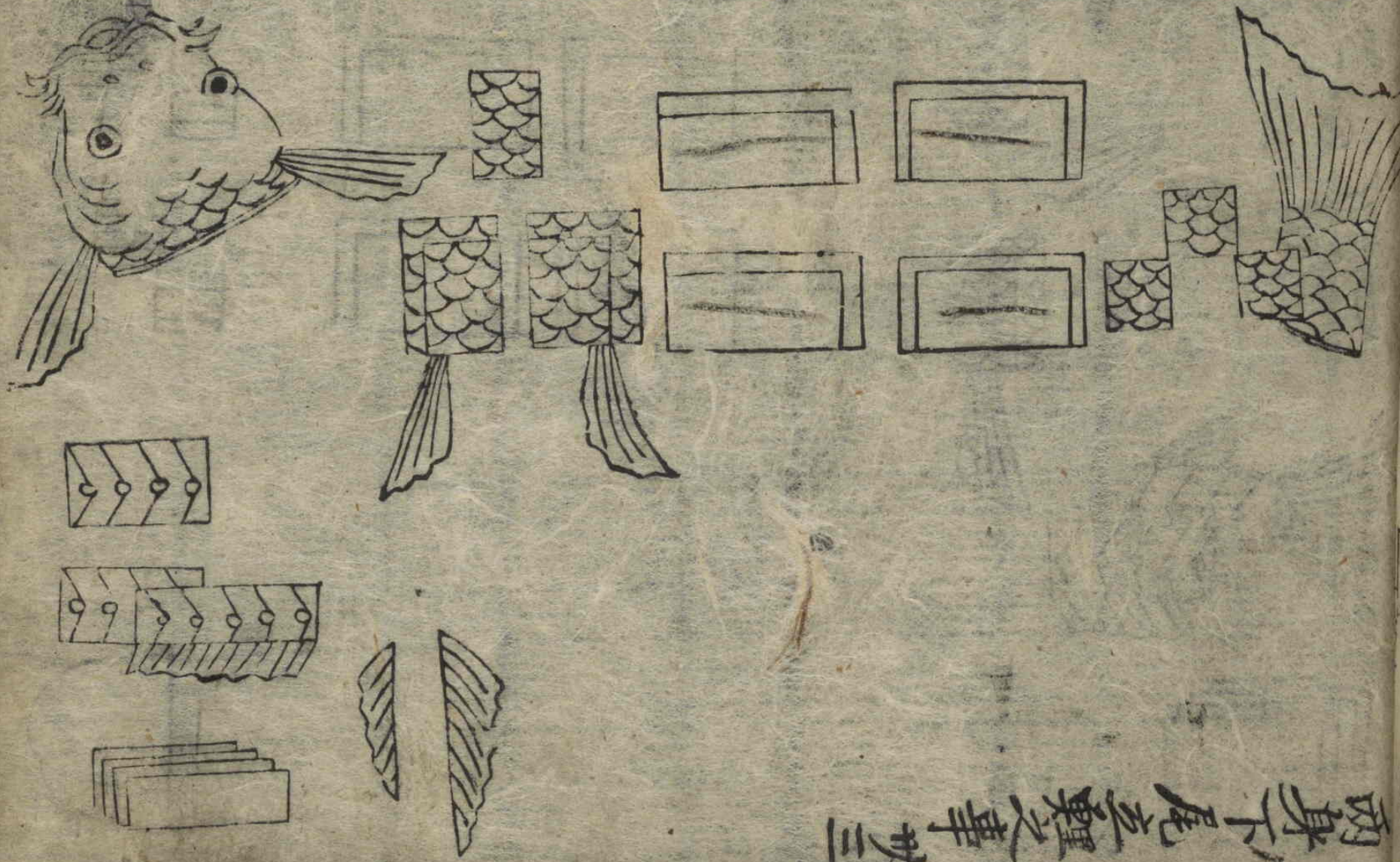


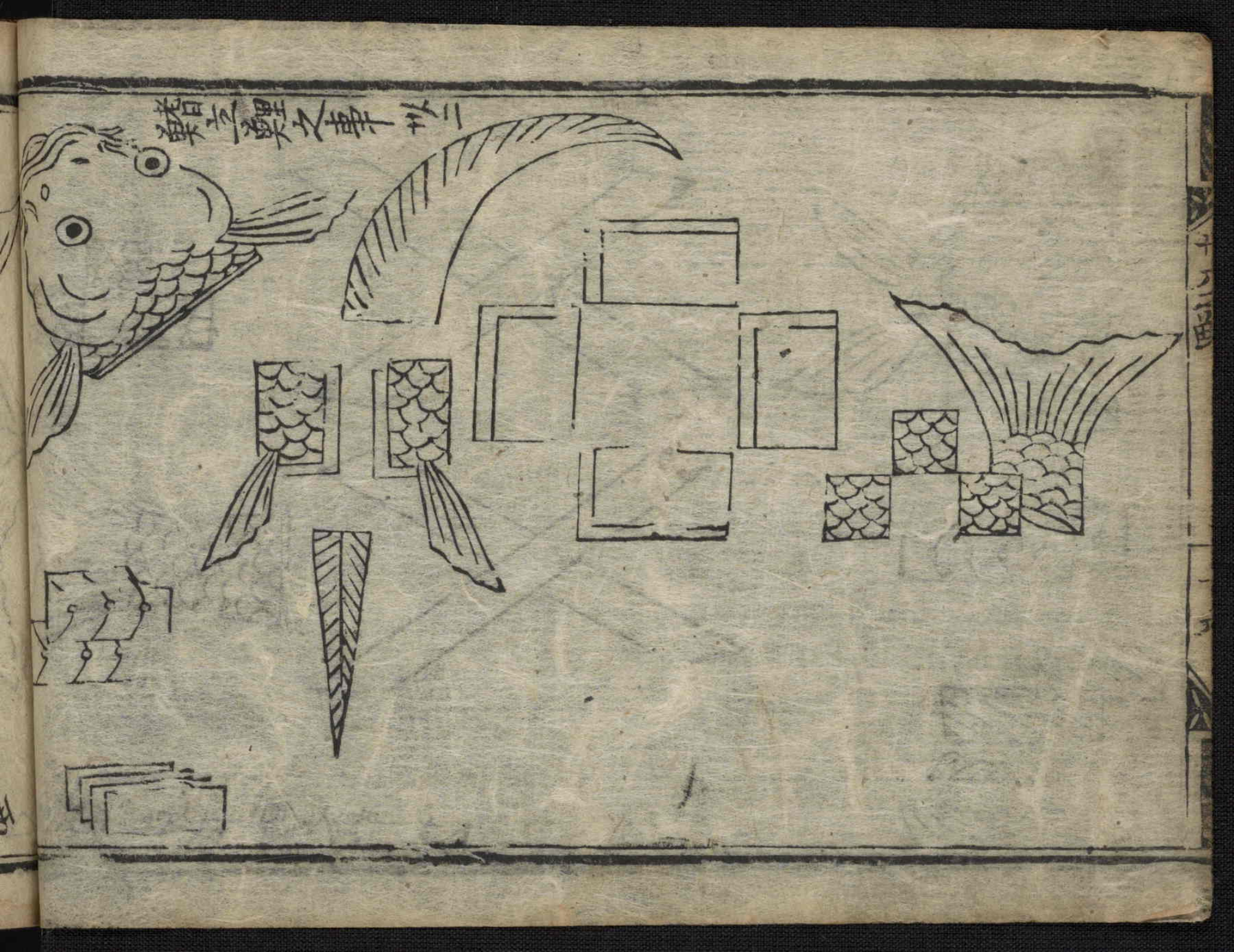


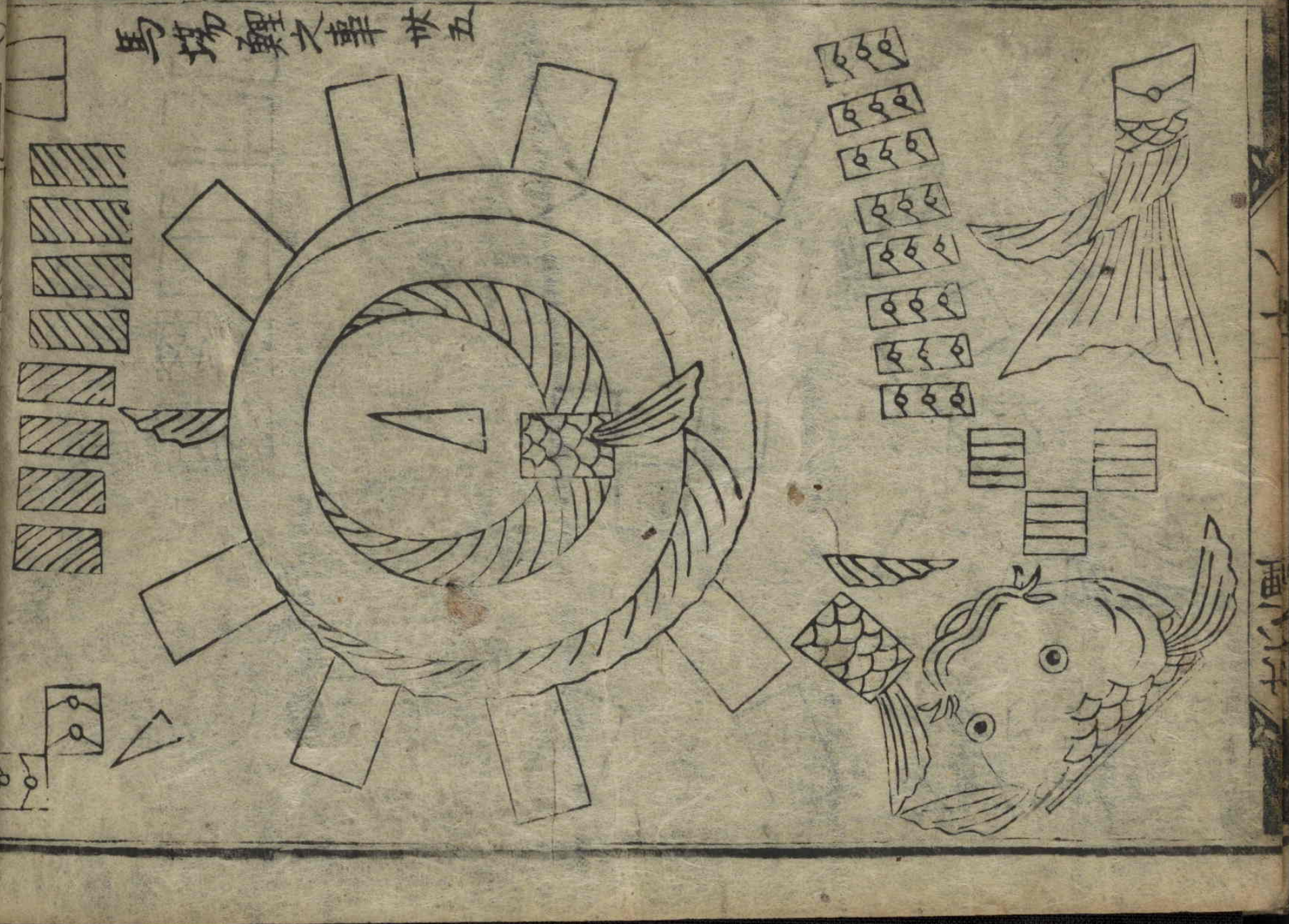


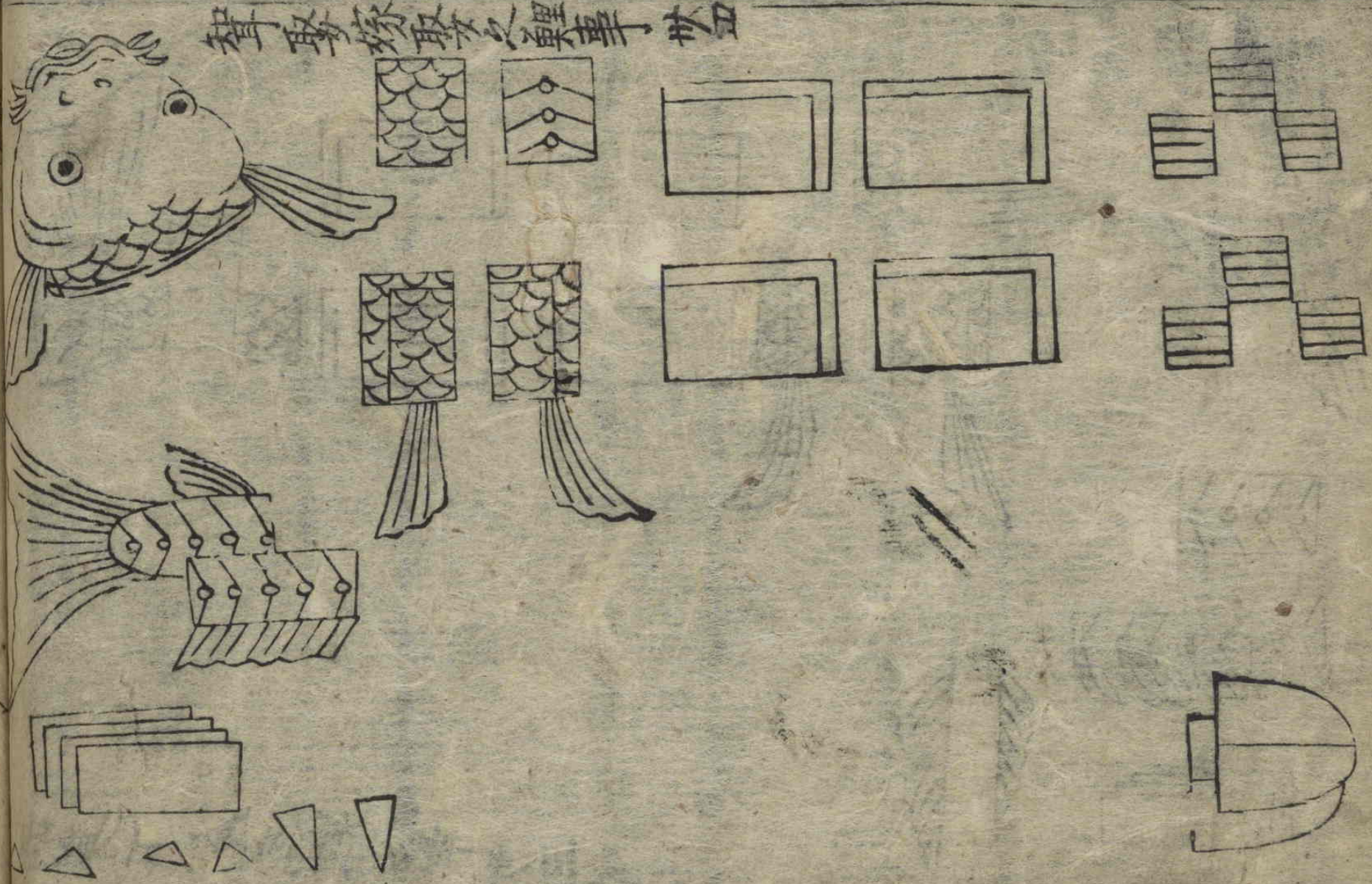


鱗包鯉之事 廿









右四條家之秘傳不可有他言者也

蘭部新兵衛尉

吉田五右衛門尉

蘭部和泉守

羽田神右衛門尉

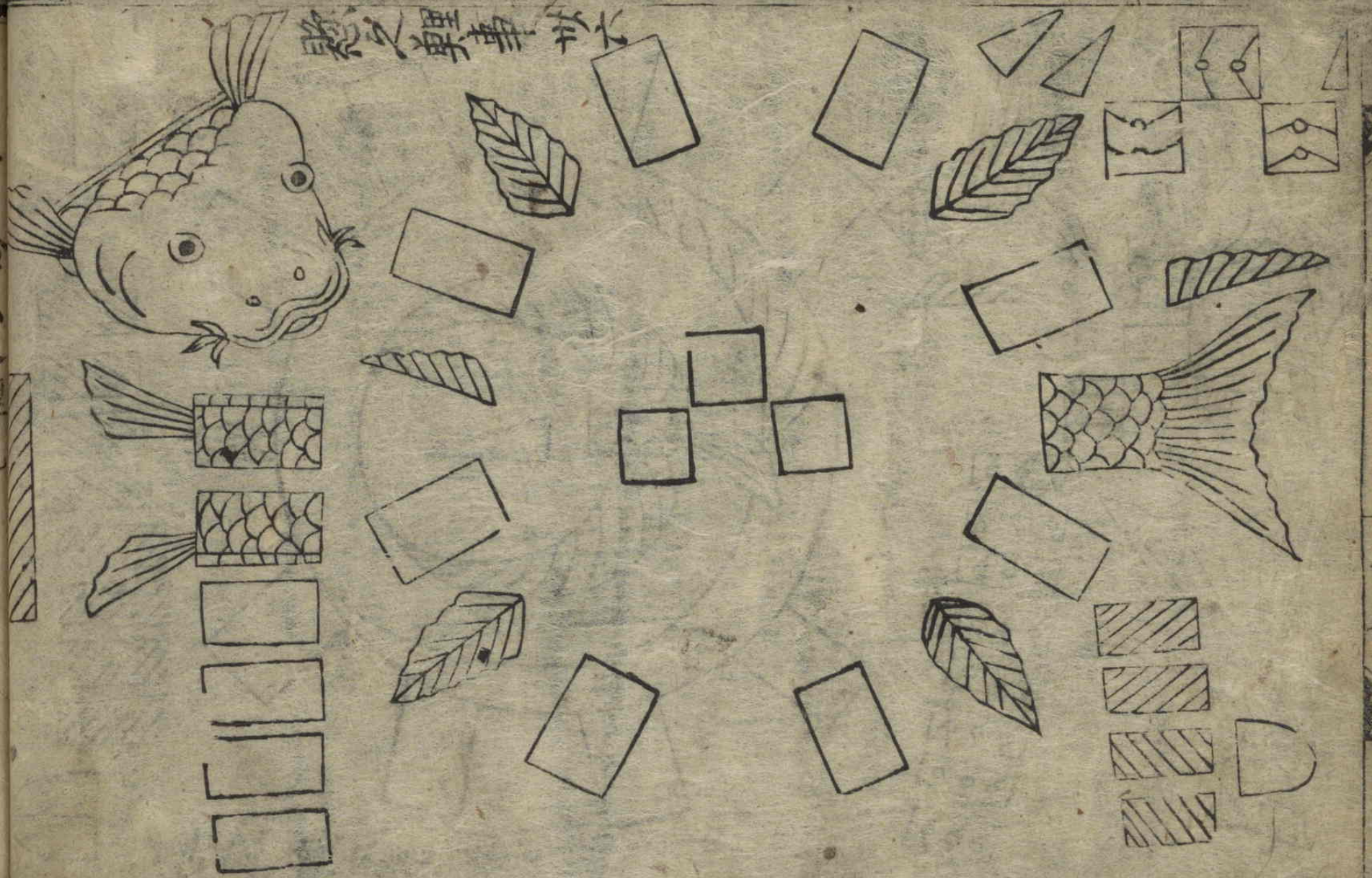
上條権八衛門尉

上嶋五右衛門尉

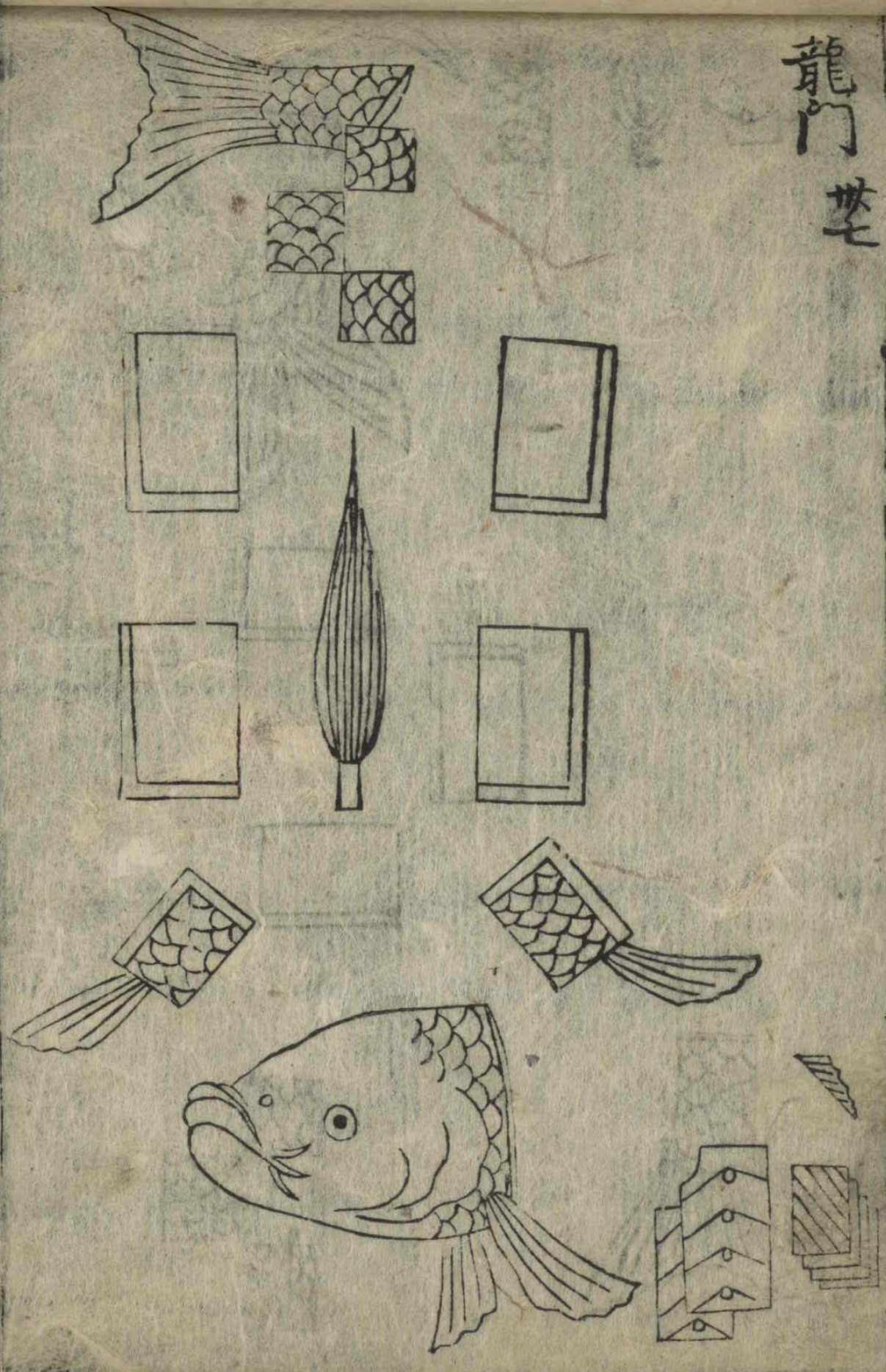
寛永十九年

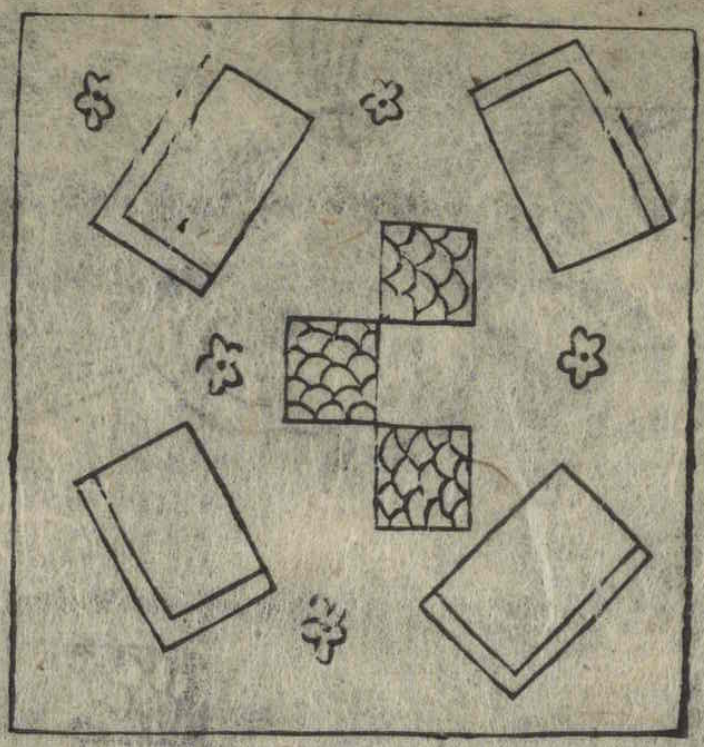
五月廿一日

中村十右衛門殿

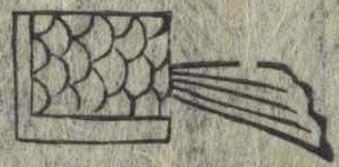


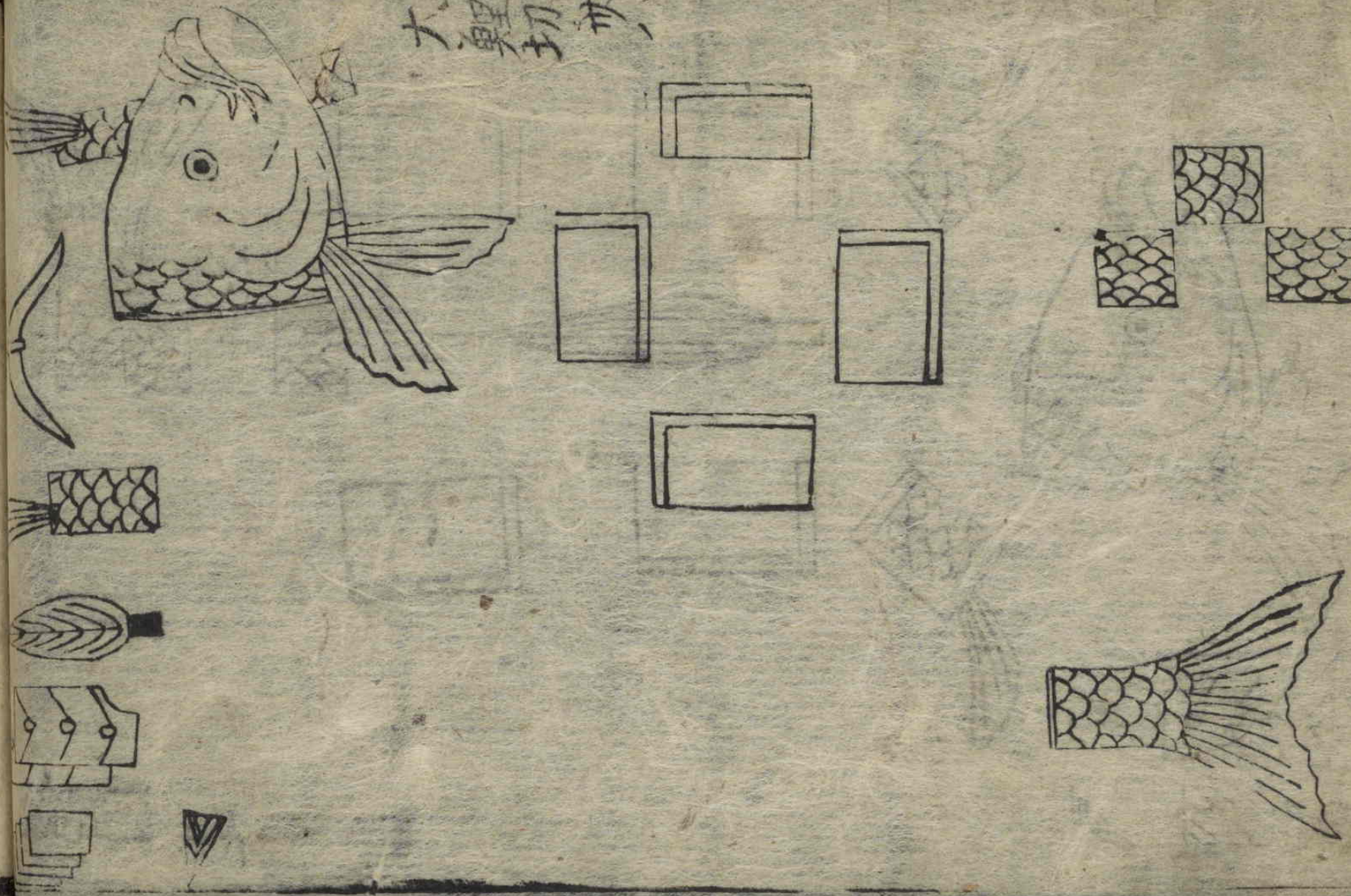
龍門 廿七



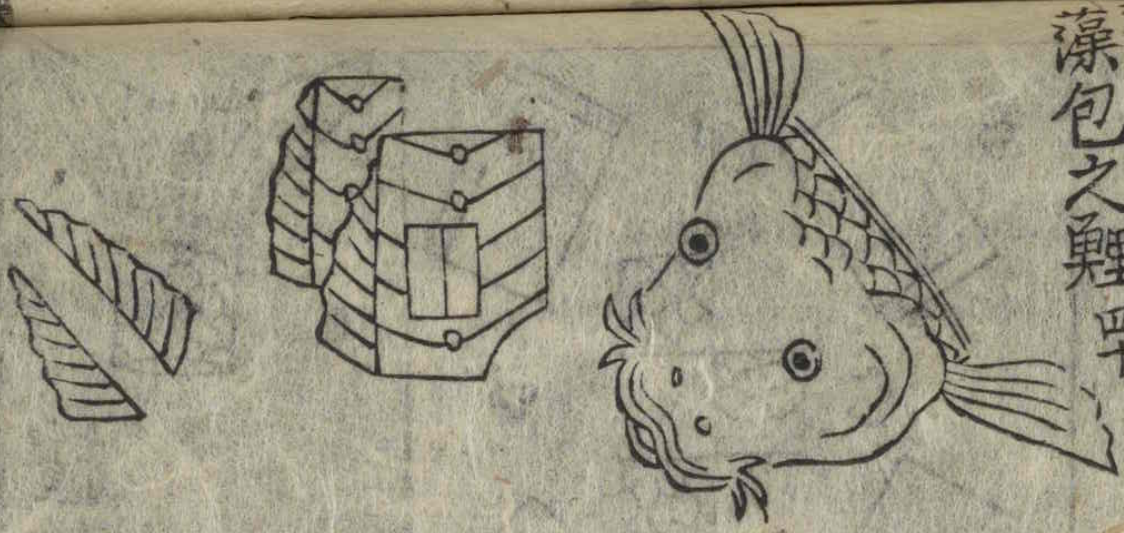


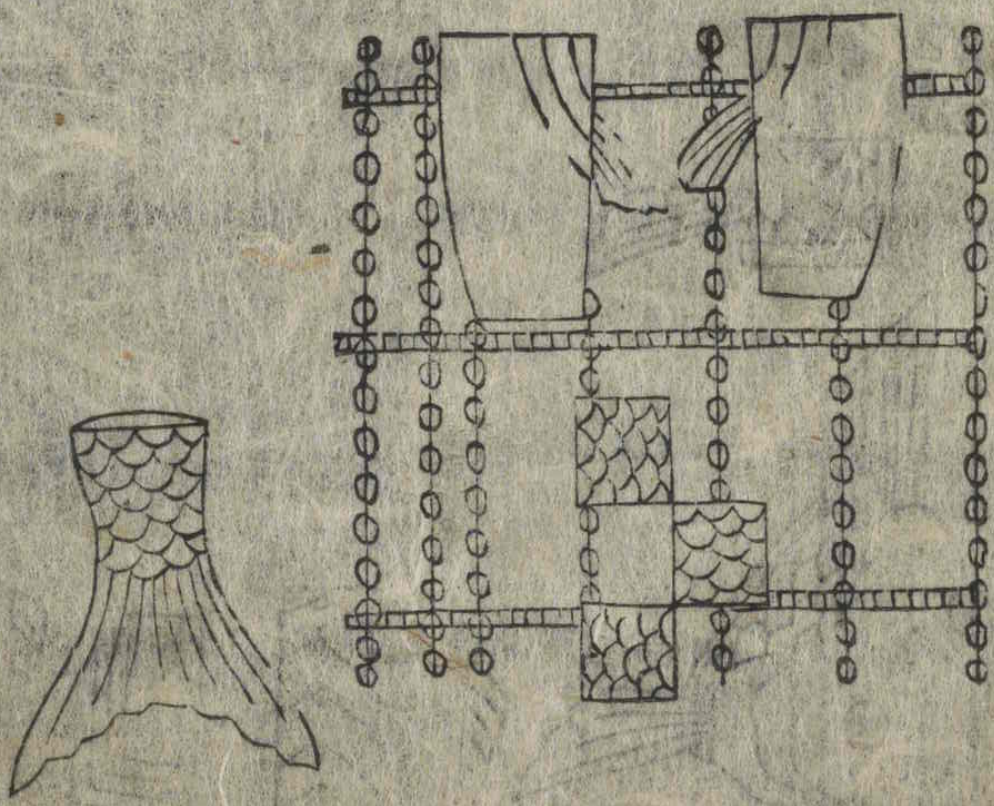
檀紙包之鯉 共九





藻包之鯉 四十

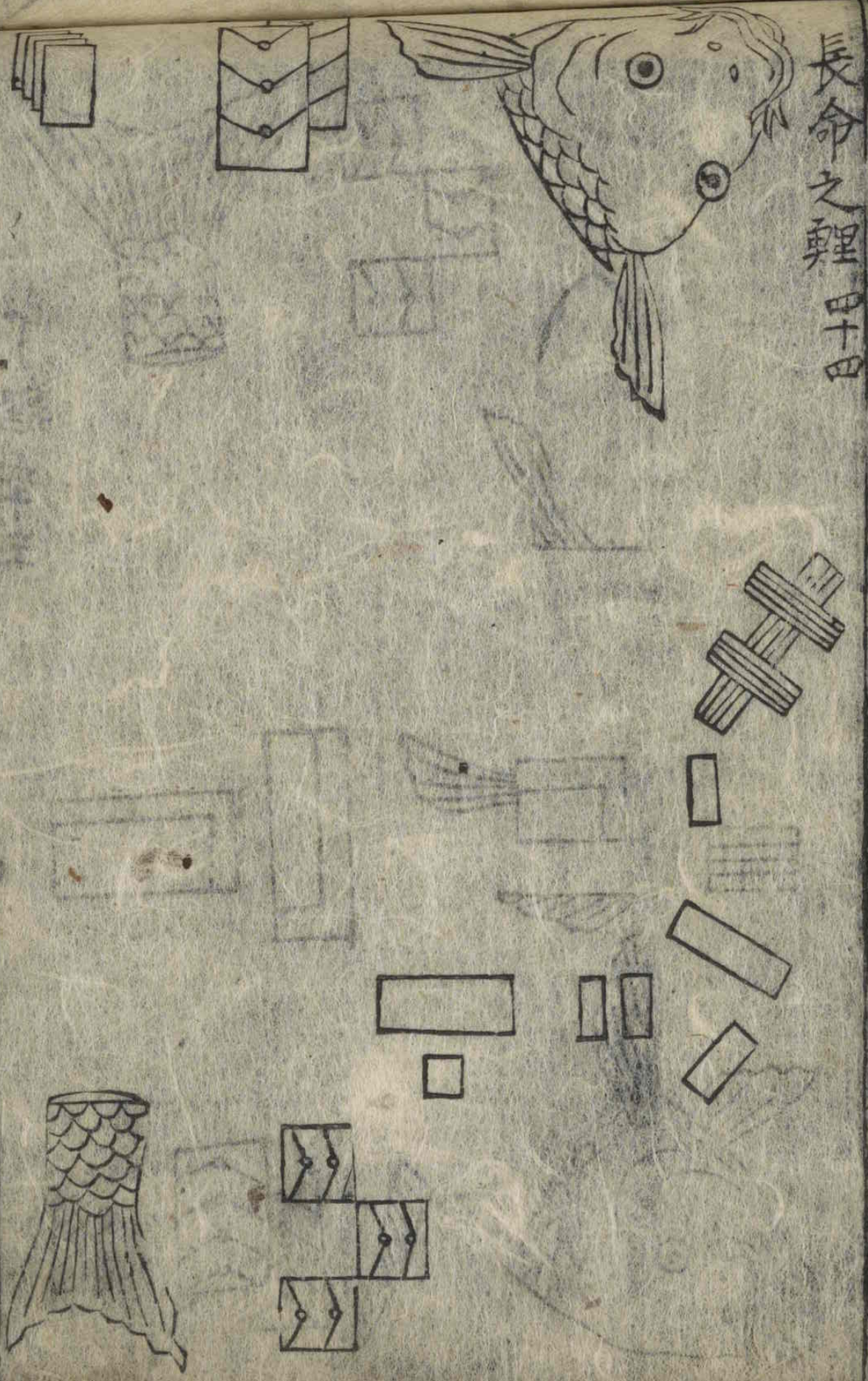


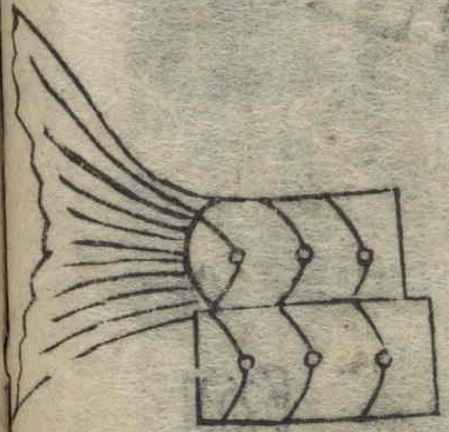


真薦包之鯉 四十二

丁鯉 罕三

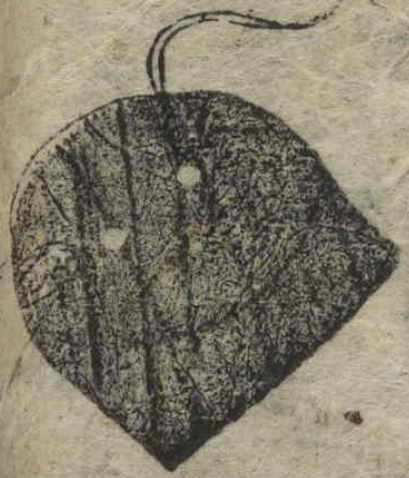
長命之鯉 四十四

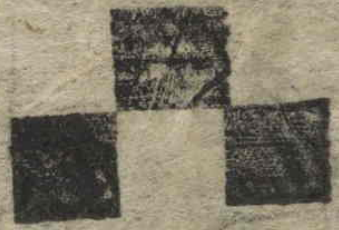


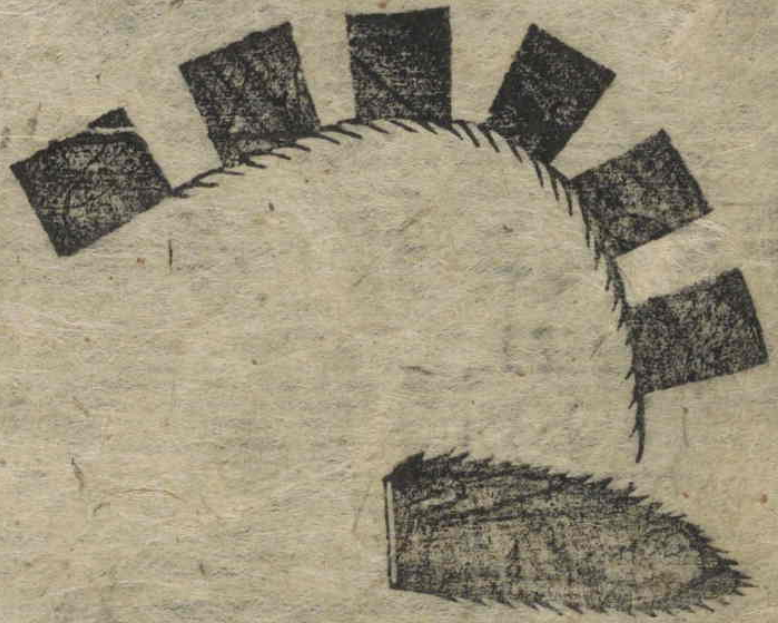


八十四號

サケスキ
鮭鱸
四十九







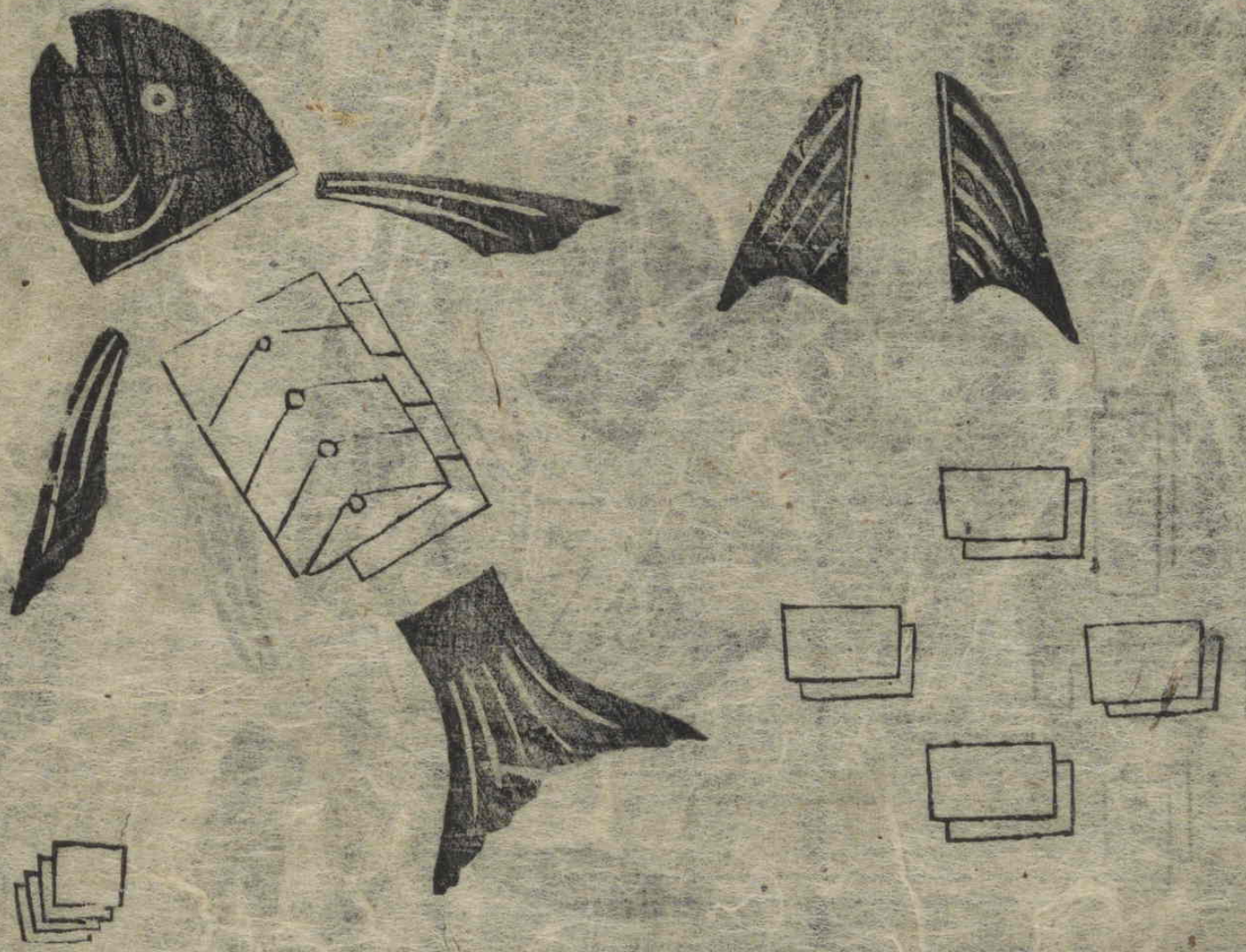
右此一巻者右之文四條家之秘極也
少茂多聞之不可有者也

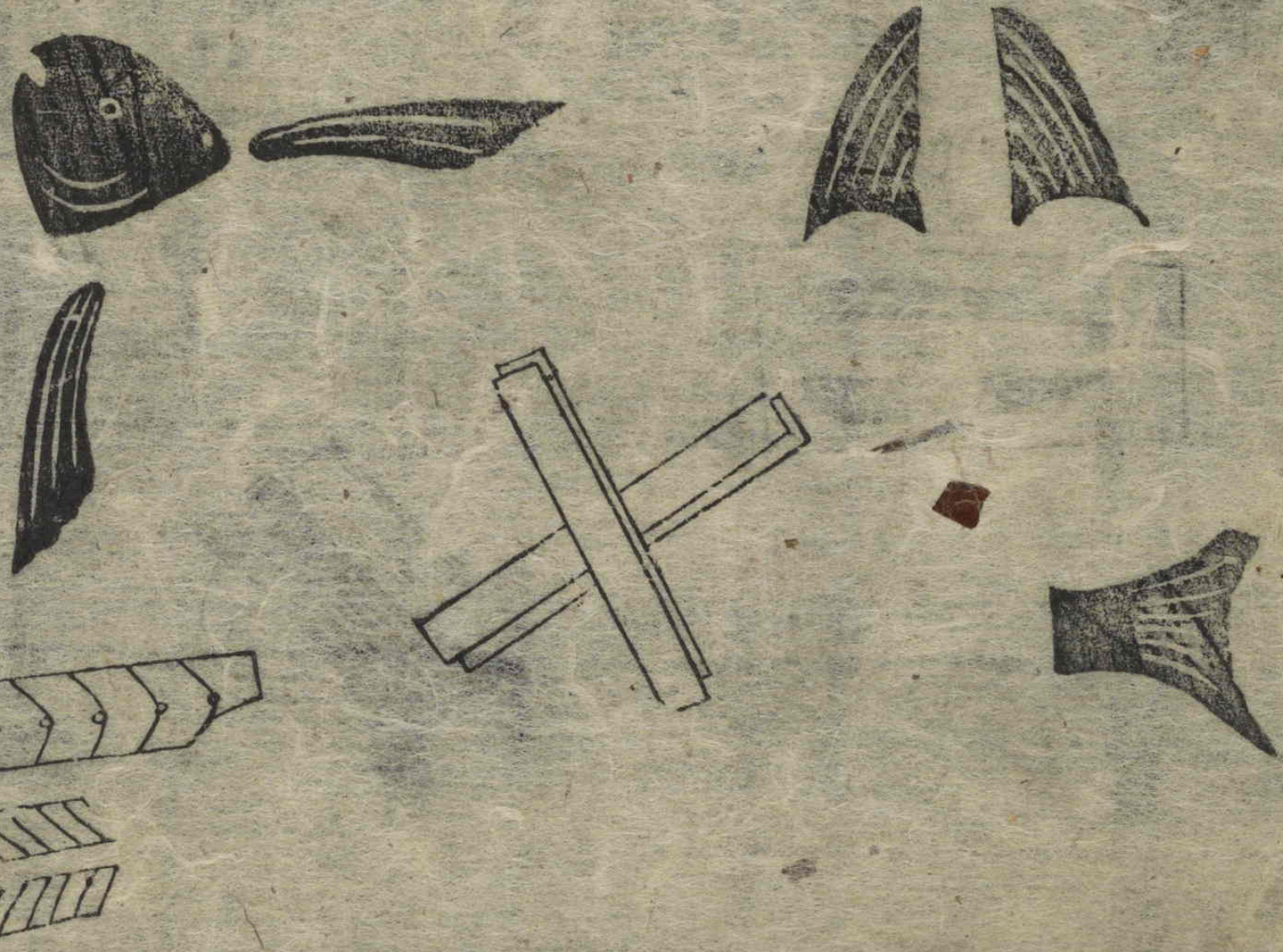
薗部新兵衛尉
吉田八左衛門尉
薗部和泉守
服部権左衛門尉
高橋権兵衛尉
高橋八左衛門尉

寛永十九年
午ノ
五月廿一日
中村十左衛居

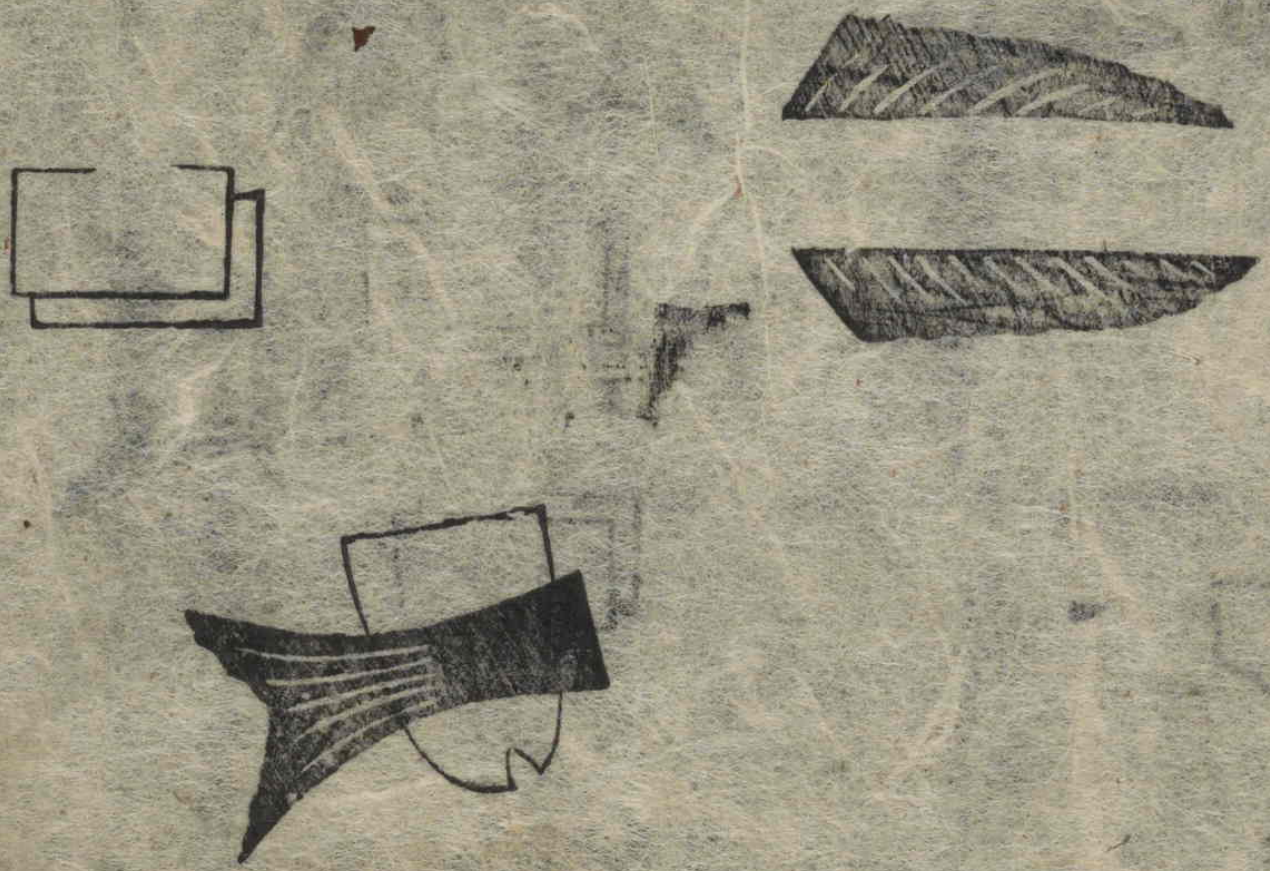
式之鯛
神前鯇
大ながれ 三
小ながれ 四
草りうさい 五
草之鯇 六
式之王餘魚 七
真之鯇 八
花見之鯛 九
真之鯛 十
雪鯛 十一
草鯛 十二
式之鯛 十三
船中之鱸海之傳 十四
花見之鱸河 十五
船中之鱸河之傳 十六
着庖丁之鯇 十七
海鱸 十八
着庖丁之鯛 十九
着鯛 二十
着庖丁之鯰 二十一
王餘魚 二十二
鳥解之鯉之古文 二十三
毛鳥解之事 二十四

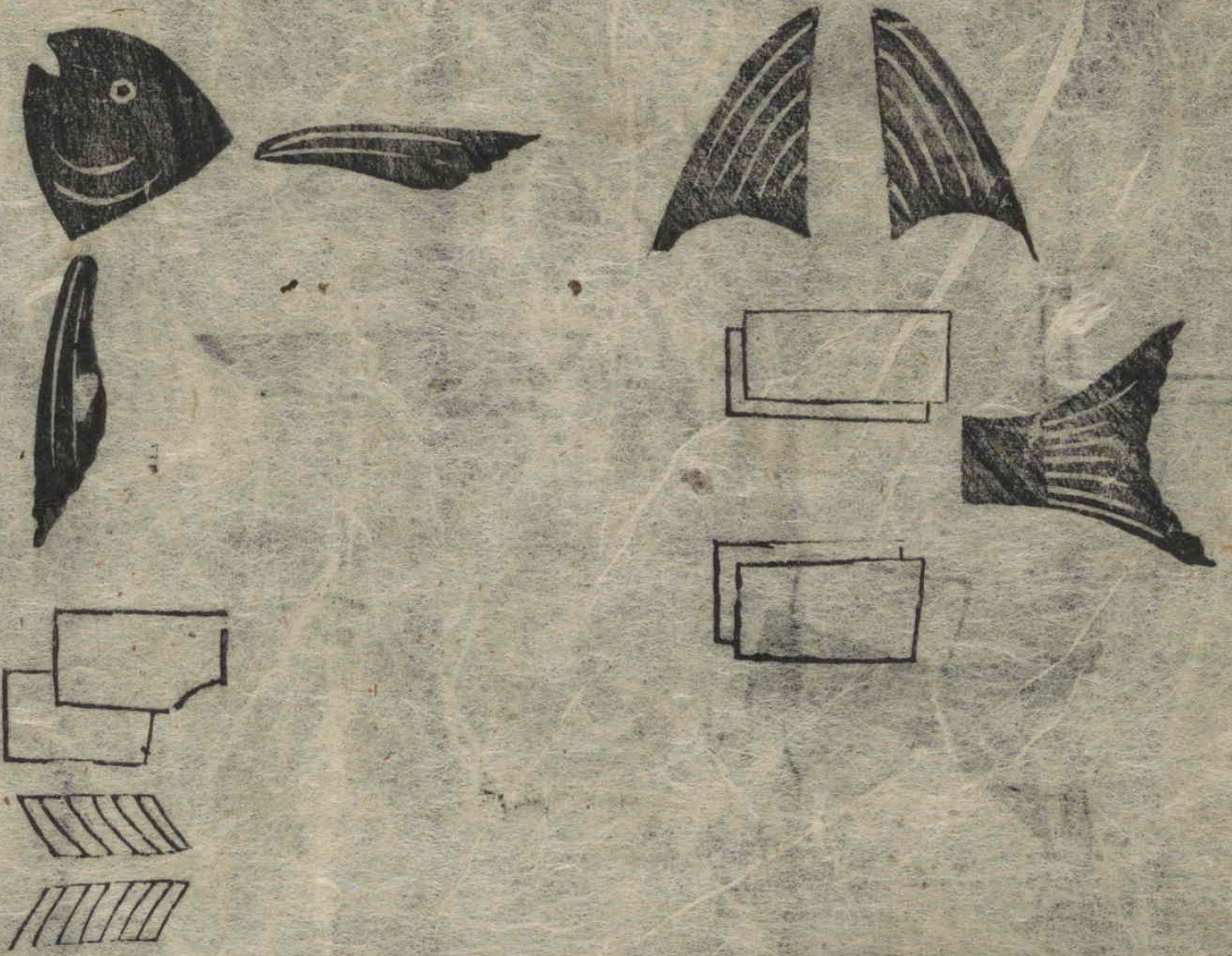
こち 二十五
八手切(やつできり) 二十七
舩中之鯛(せんちうたい) 二十六
蛸(たこ) 二十八



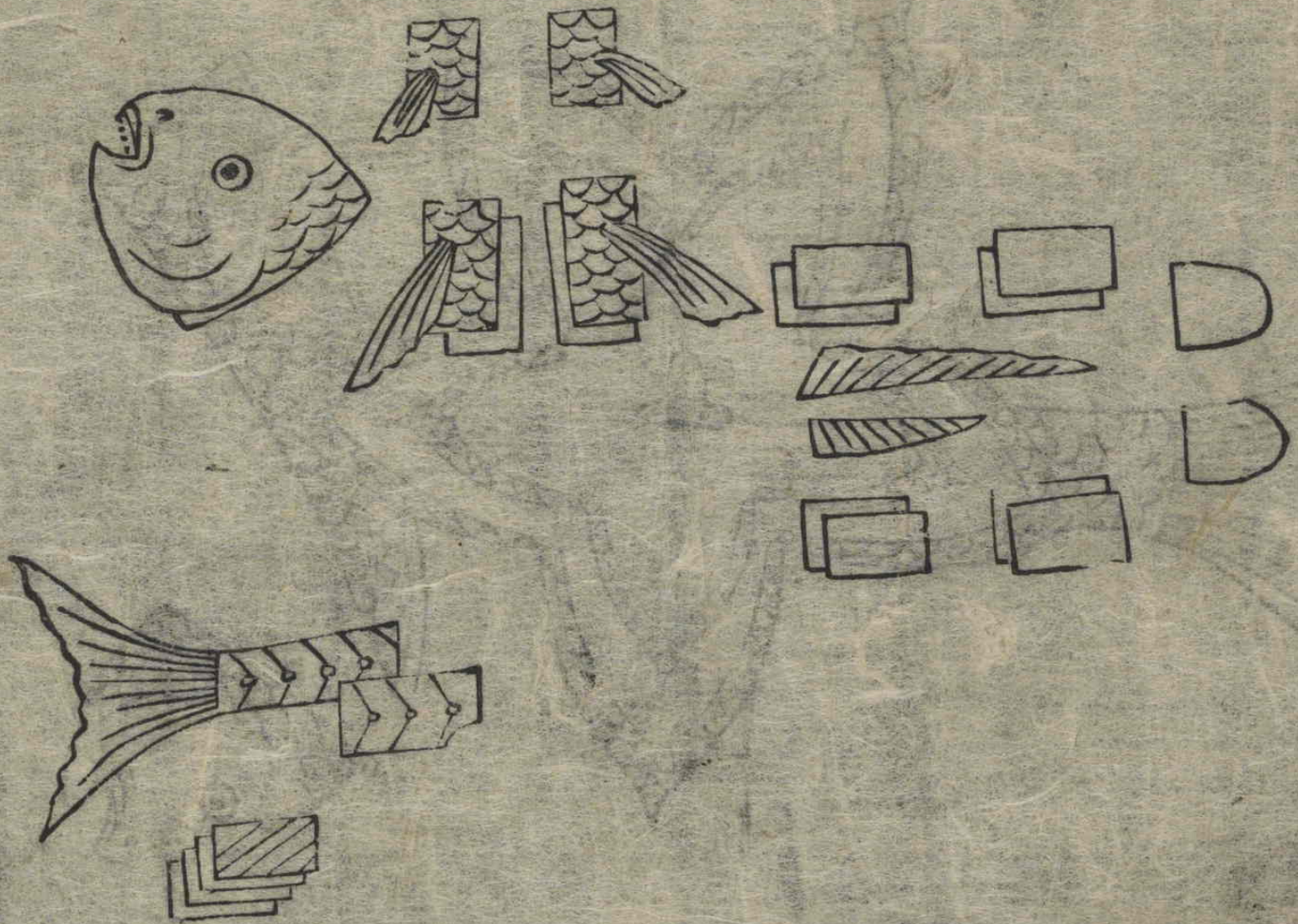


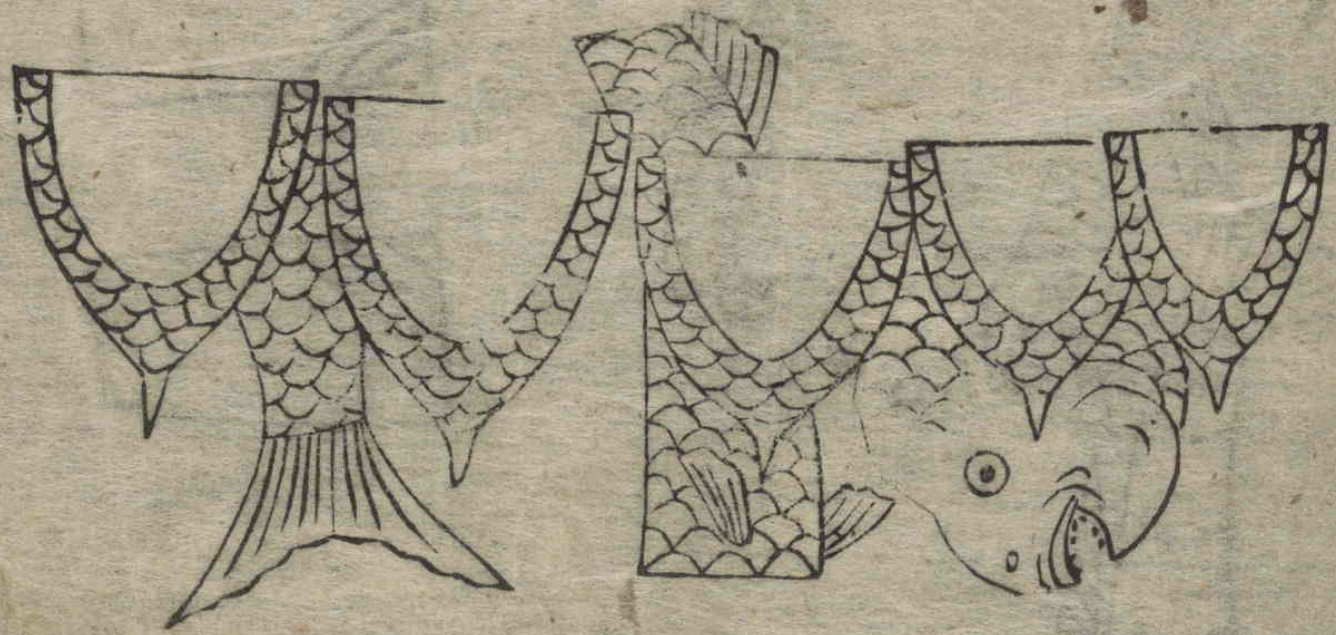
一式之王餘哭

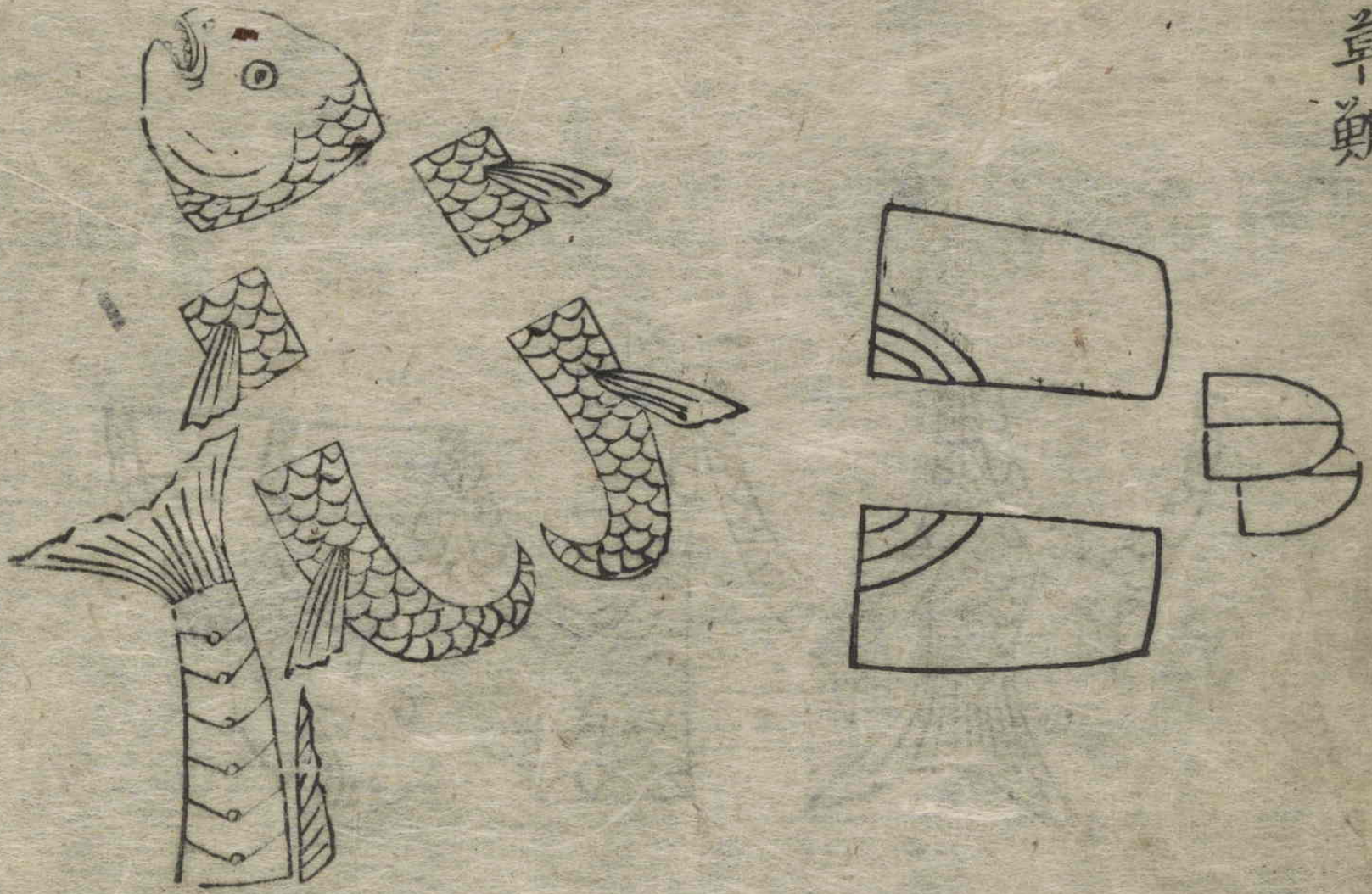


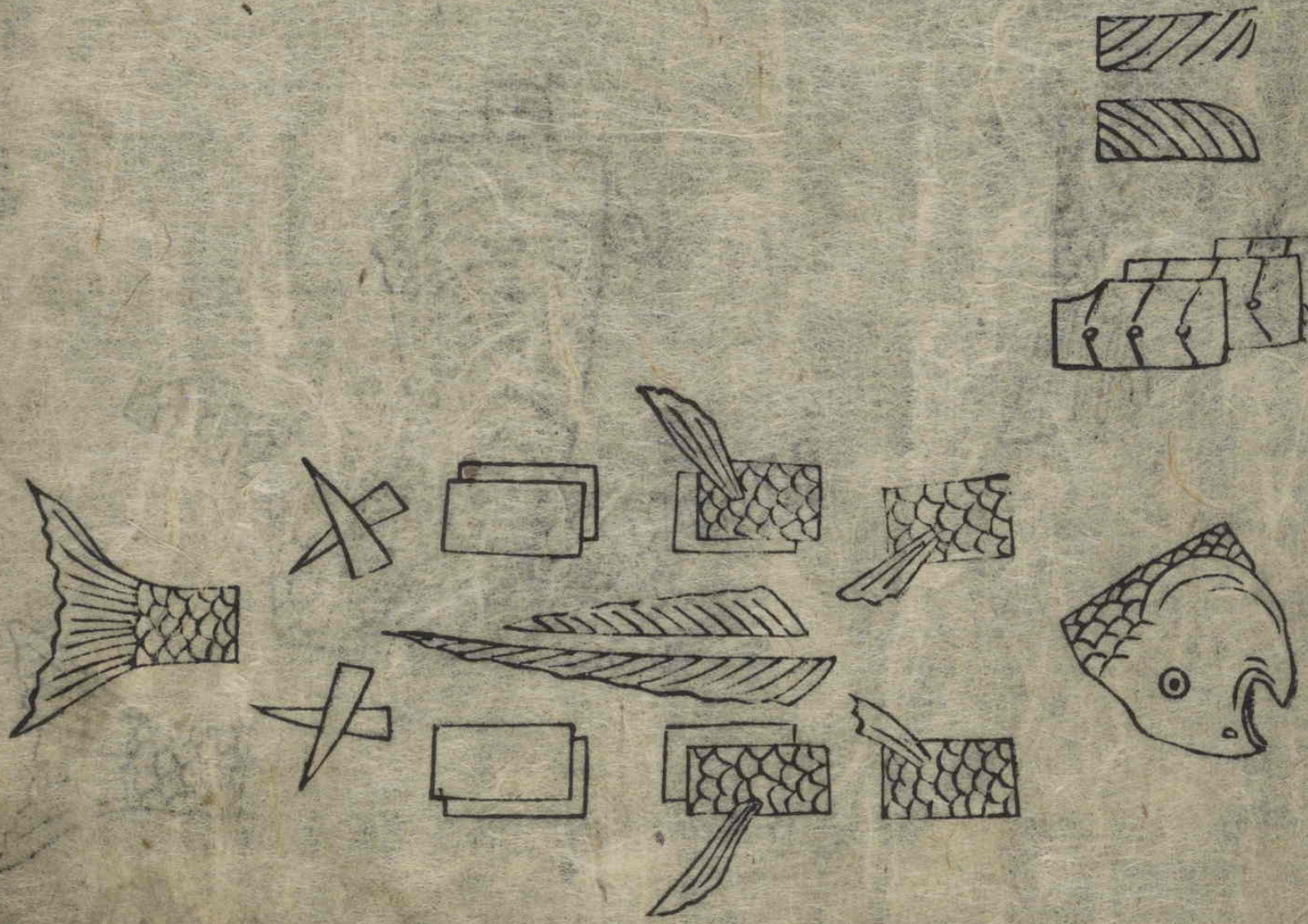


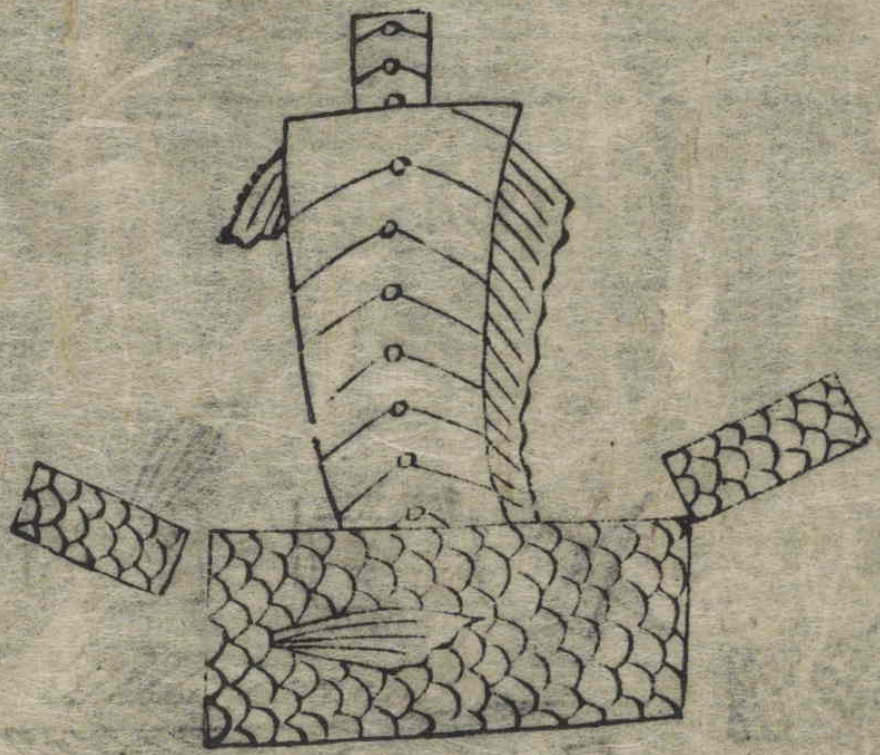
一真之鯛 十



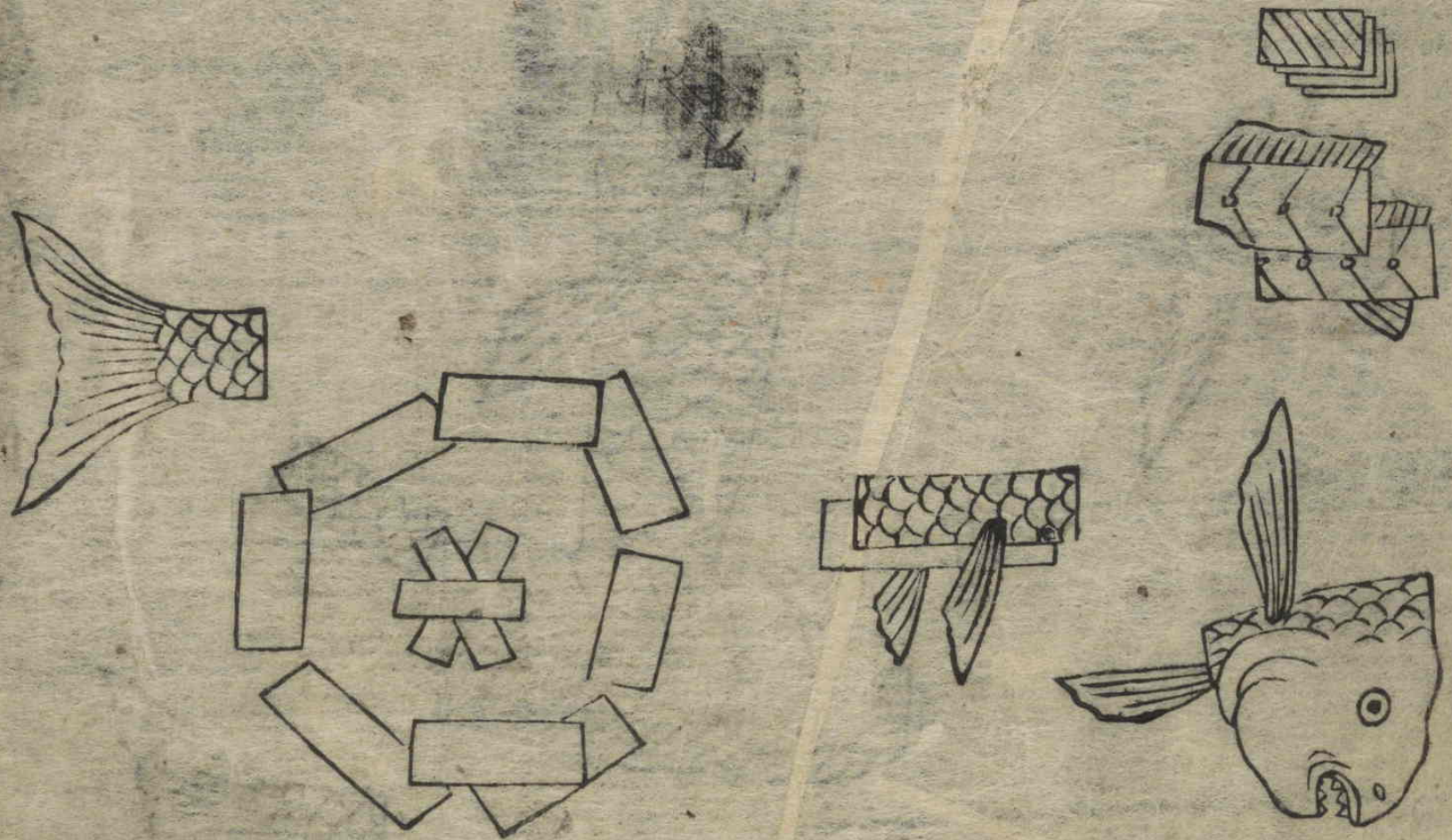


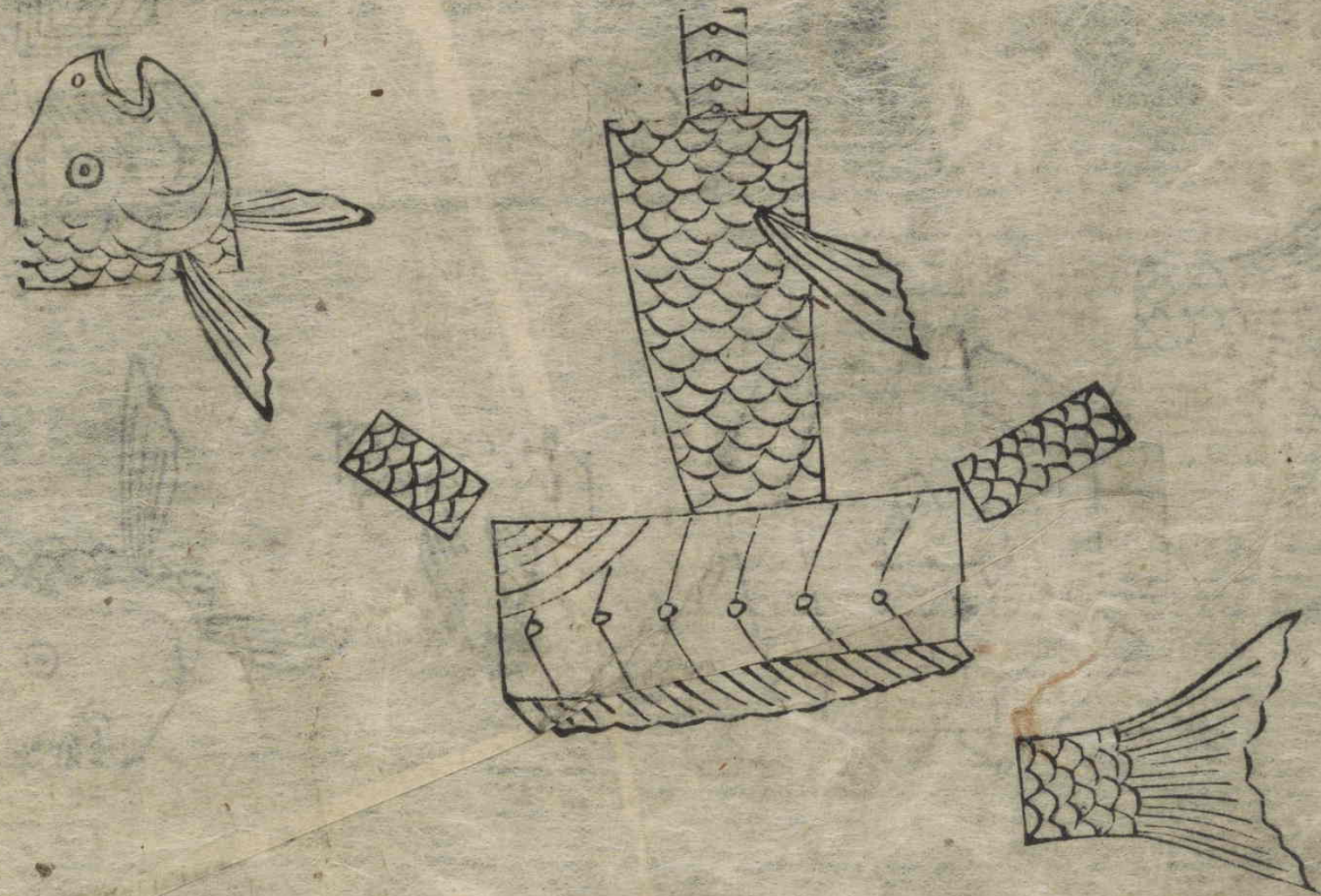






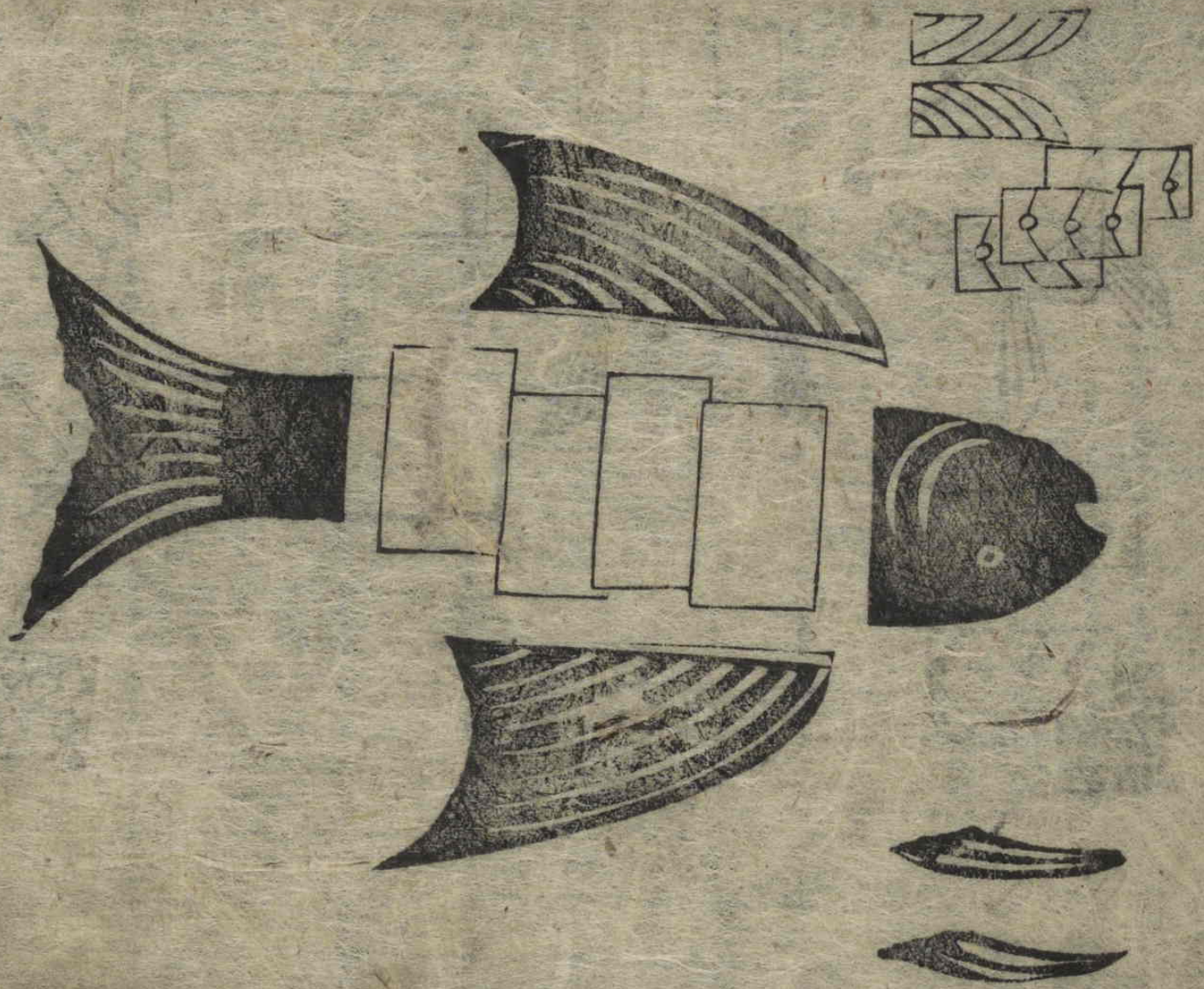
一舡中之魚海之只傳 十四

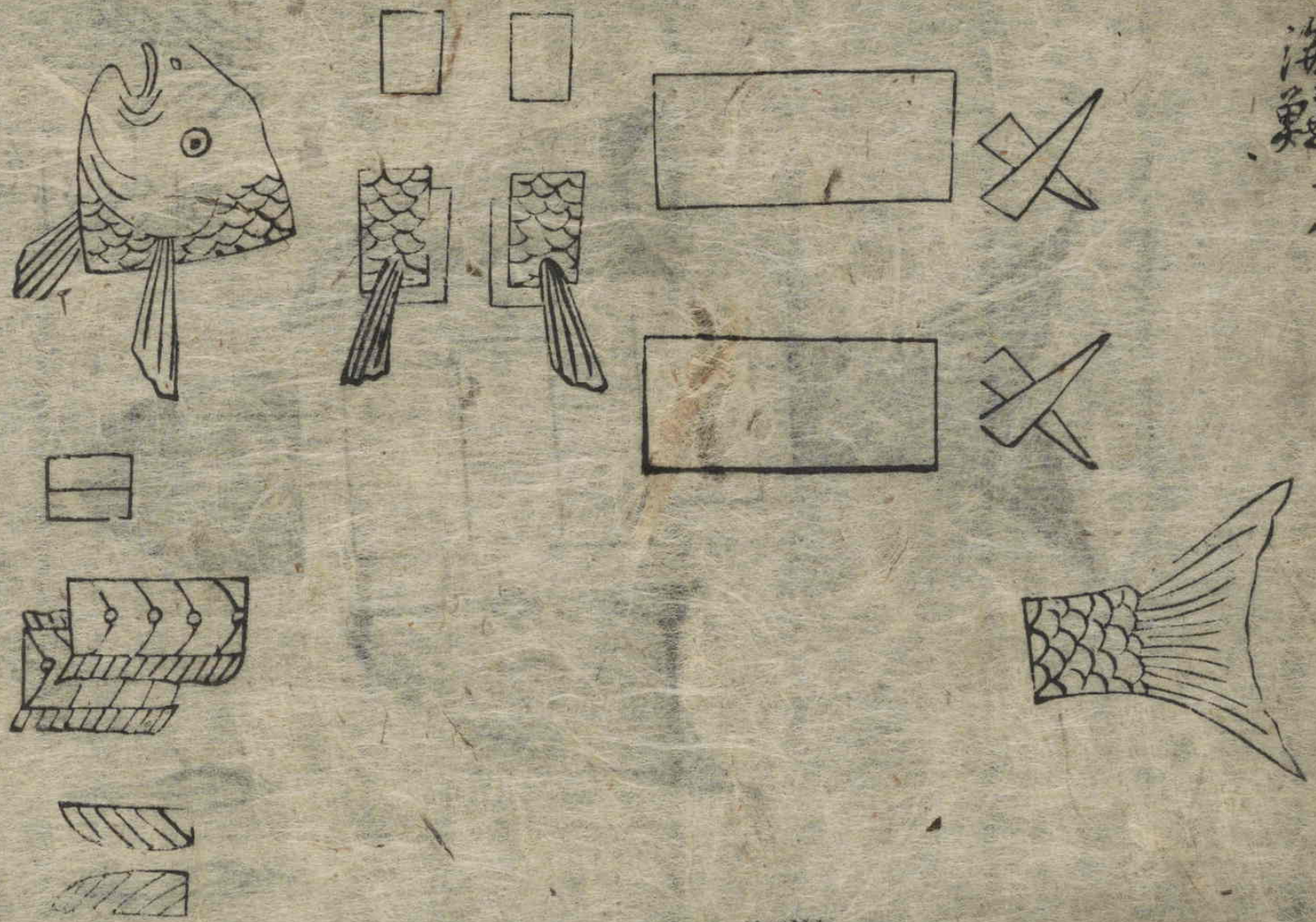


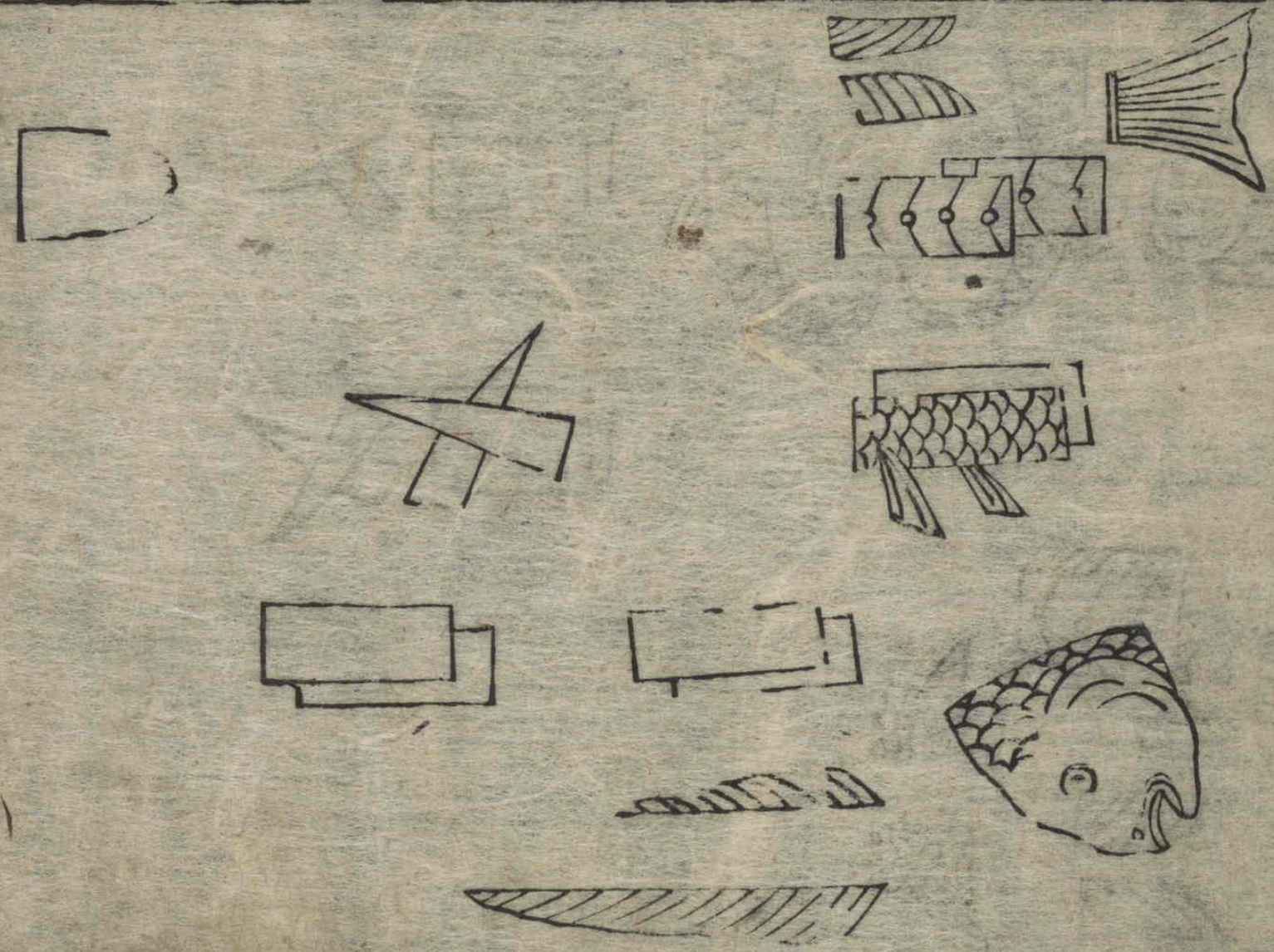


一舩中之鰡河之口傳十六

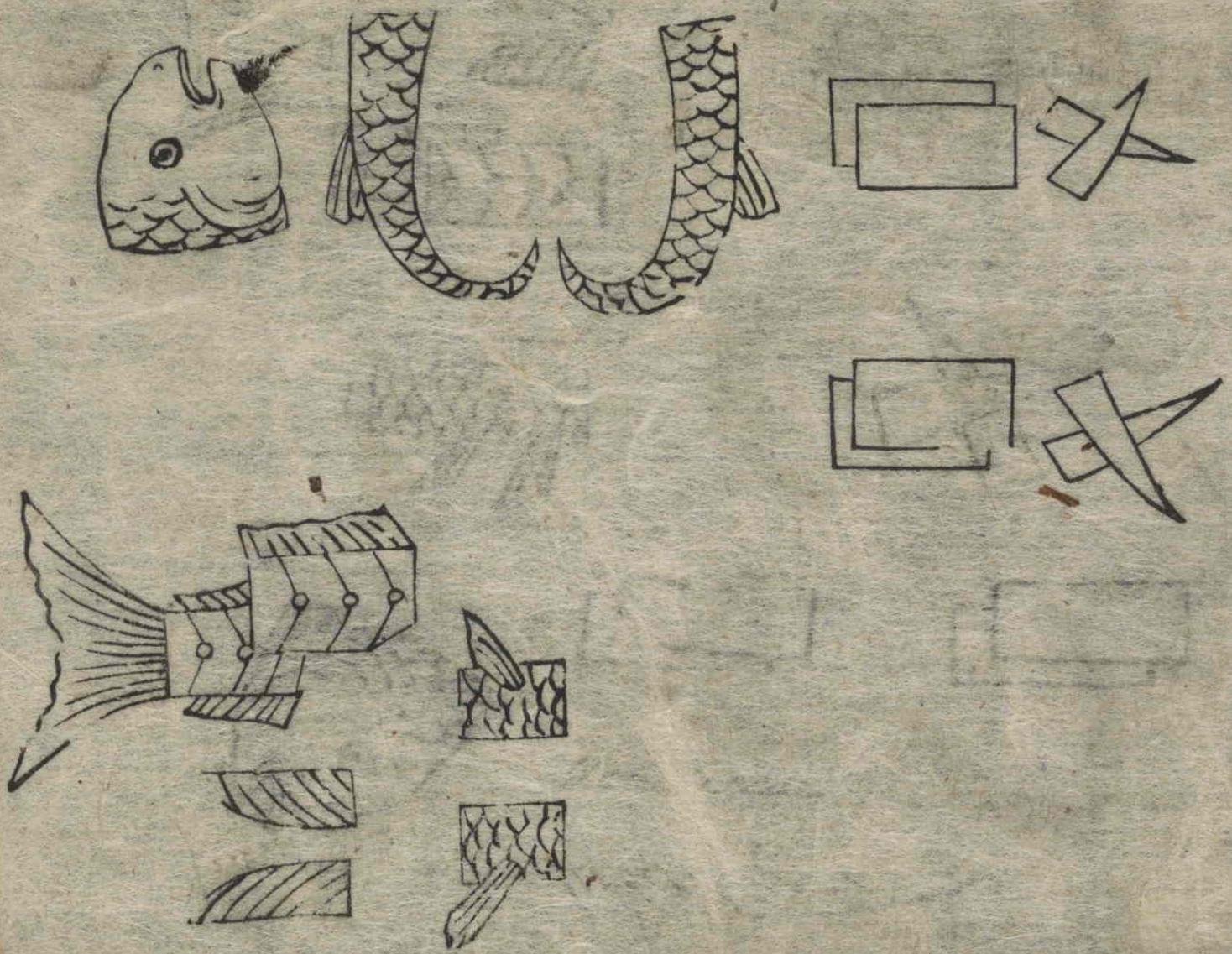
一看庵下之巣
マナガツヲ



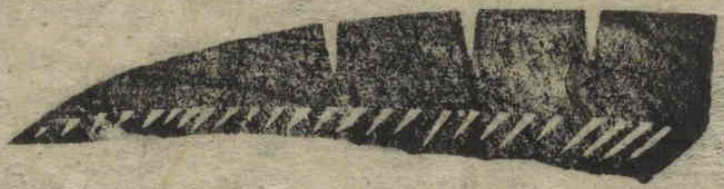


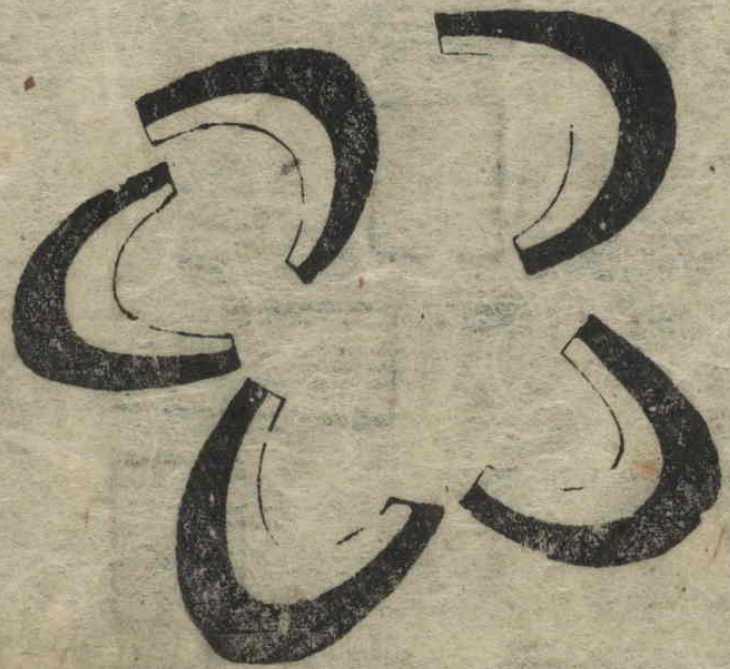


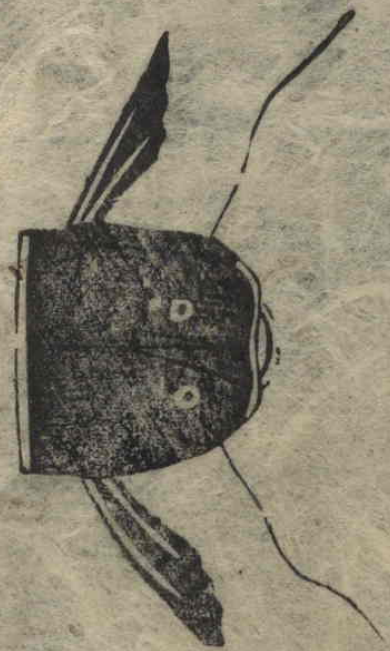
一肴庖丁之類



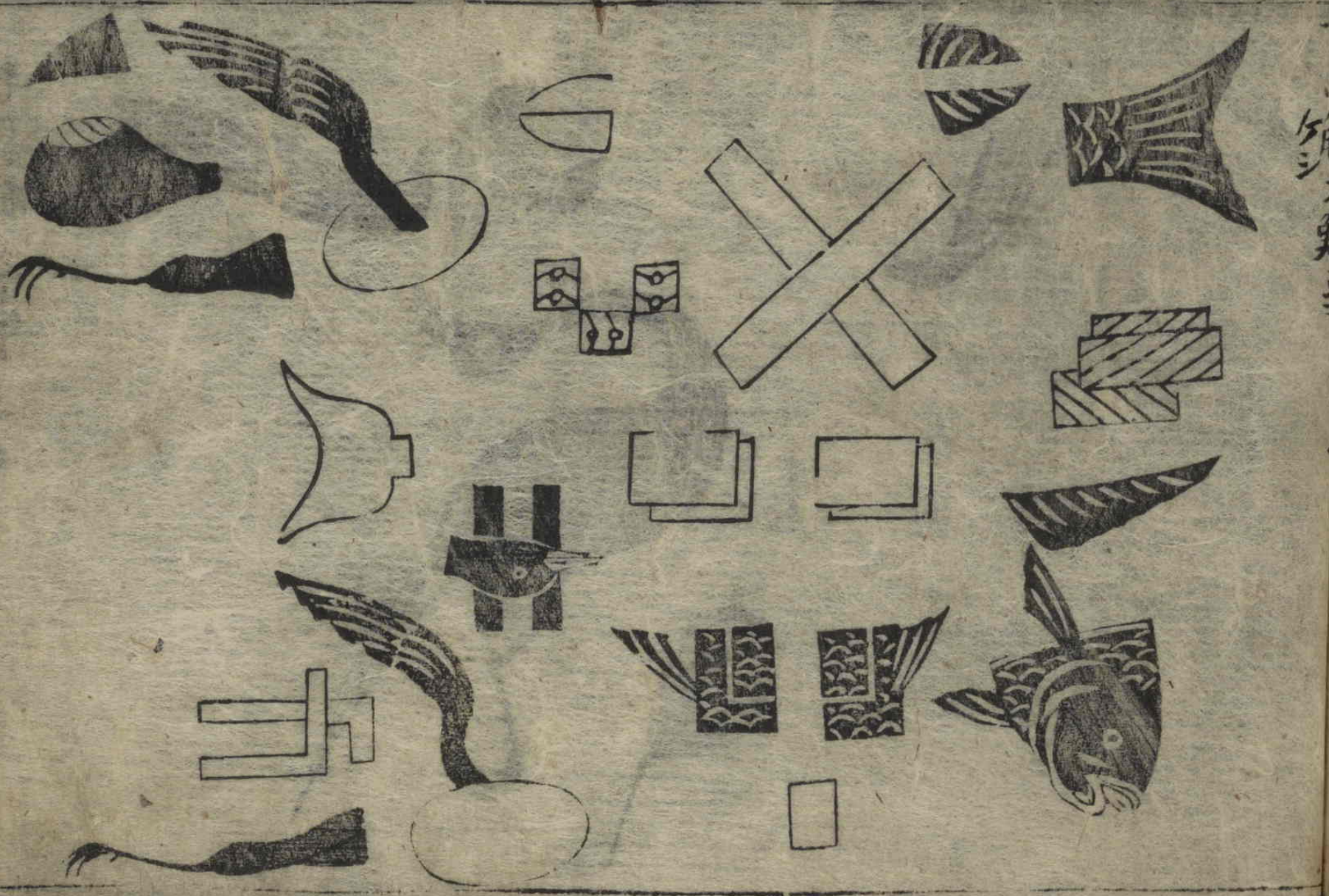
一ヌ有庖丁之鯰ナマズ



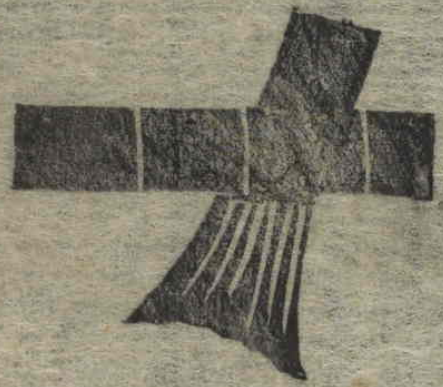


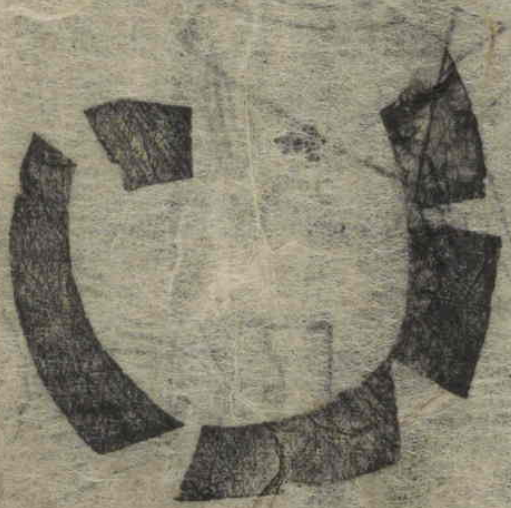
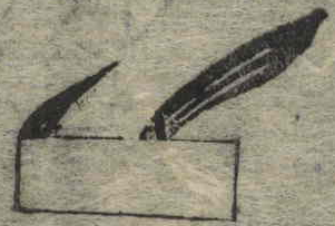


一王餘魚 二十二

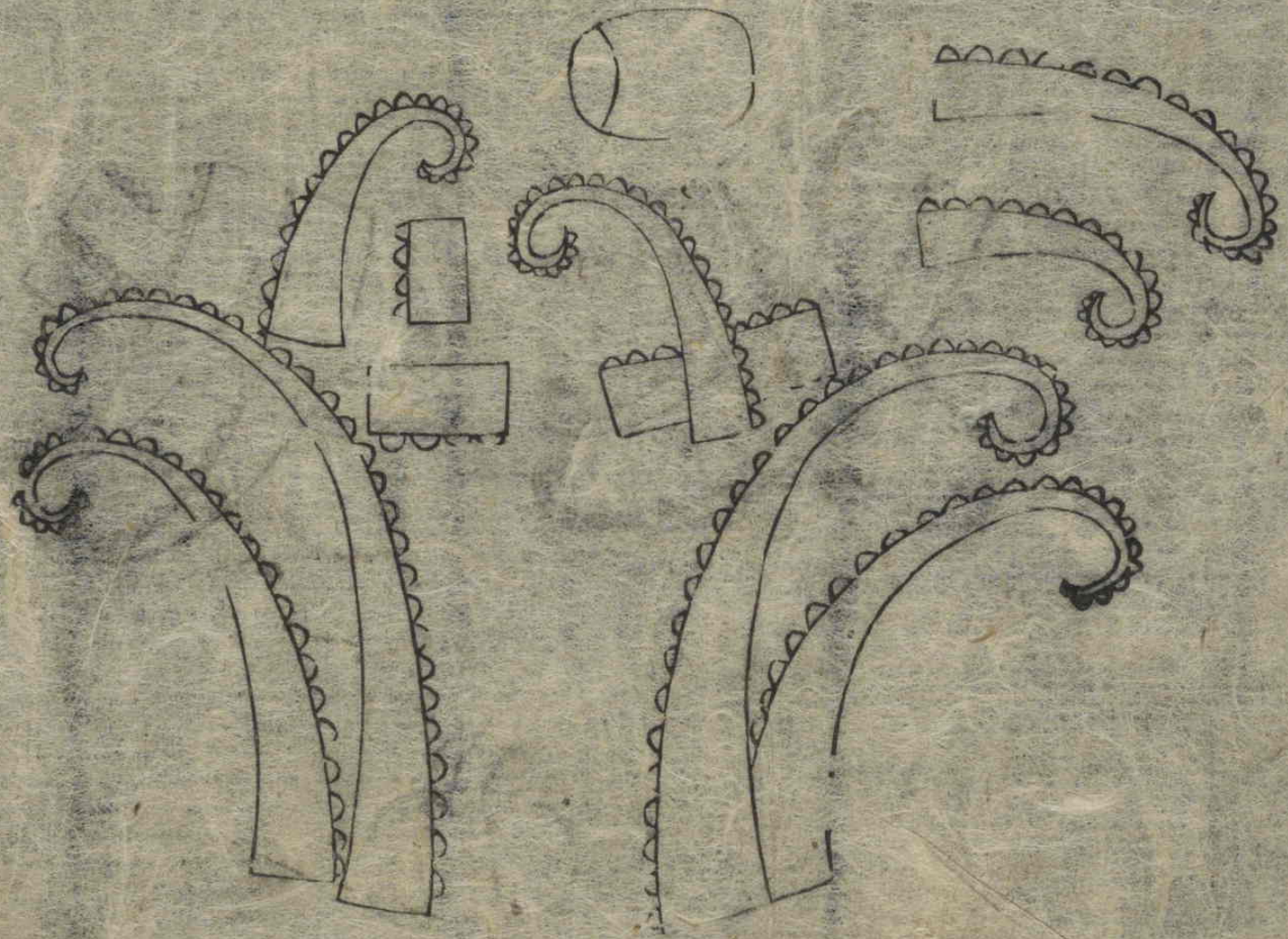


一毛烏解之事 廿キ 二十四



一舩中之鯛 二十六



一蛸名 二十八

右四條家之秘傳也

菌部新兵衛尉

吉田五右衛門尉

菌部和泉守

羽田神右衛門尉

高橋橋兵衛尉

高橋又右衛門尉

寛永十九年

年ノ 又月廿一日

中村十右衛門殿

鯉 一

鮒 二

鯛 三

鱸 四

コチ 五

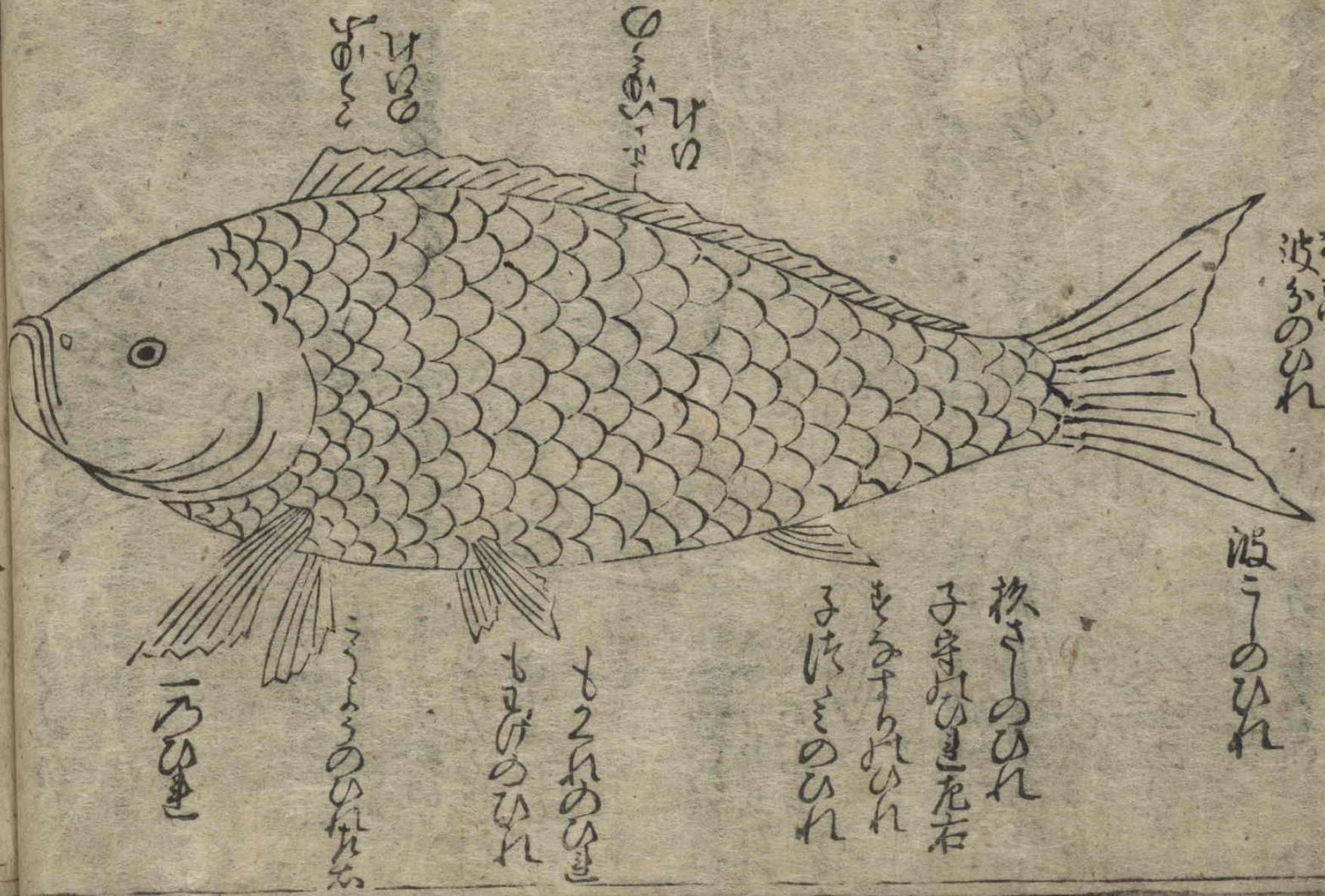
鯢 六

鯰 七

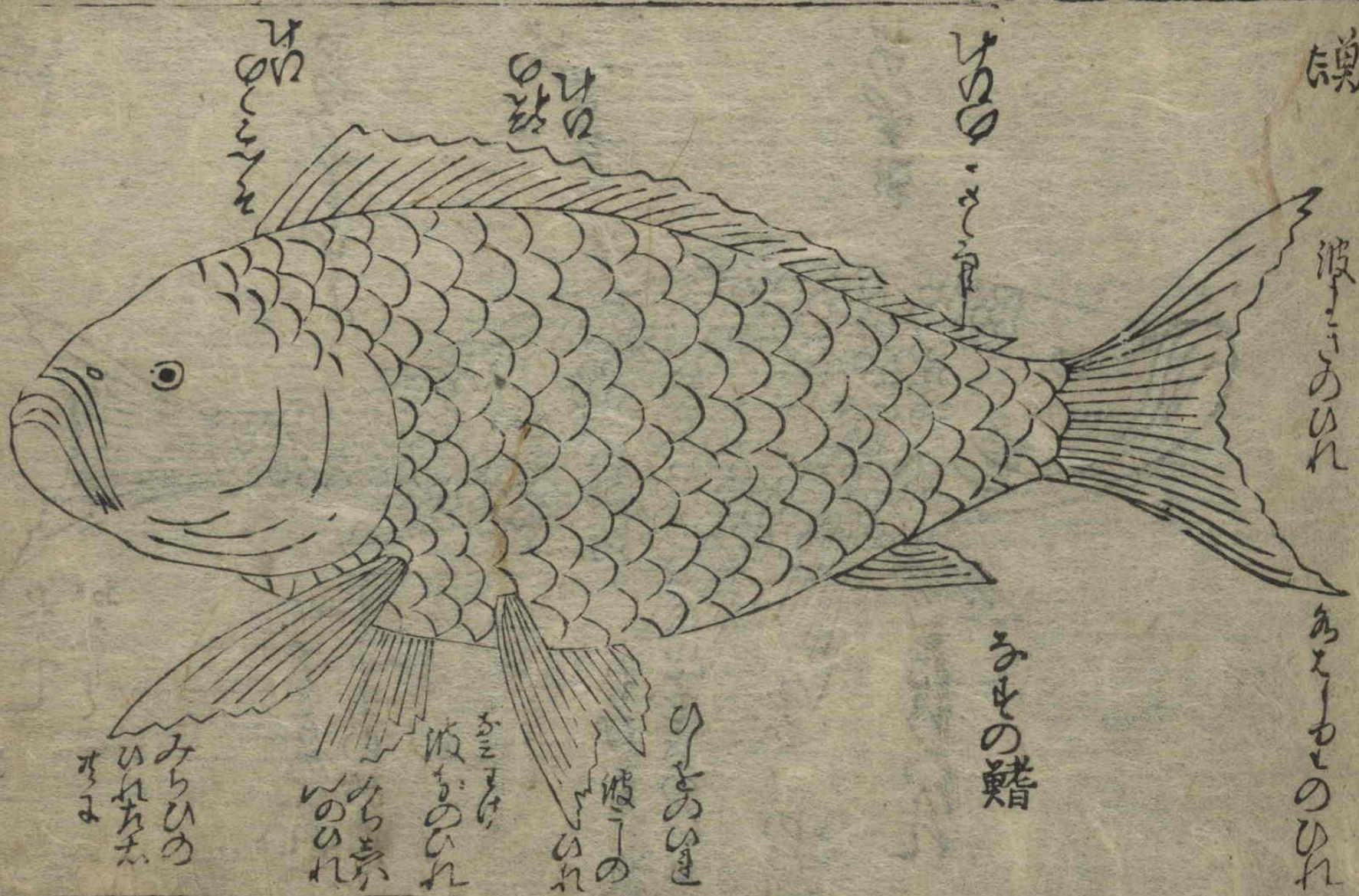
王餘魚 八

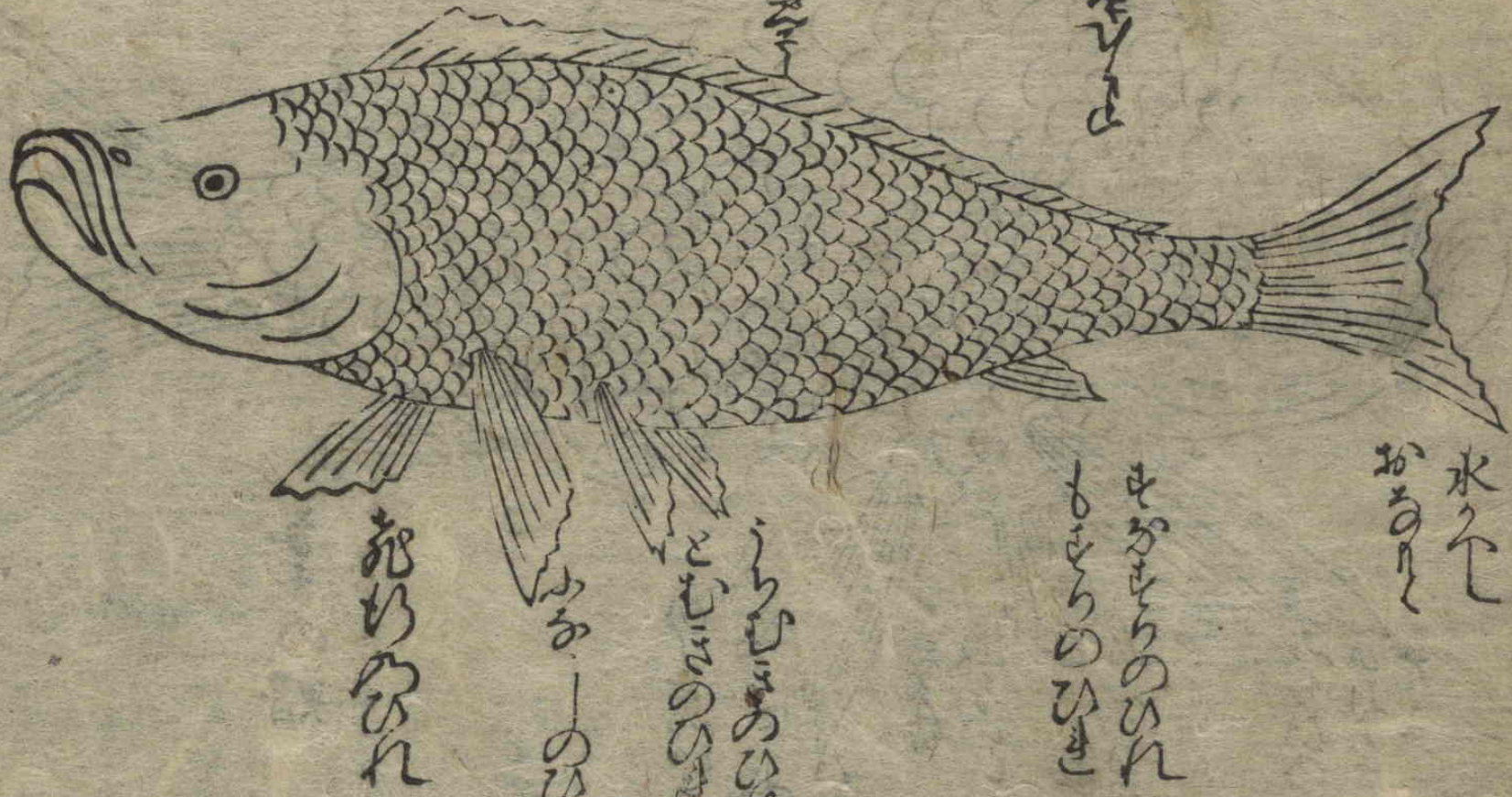
鮭 鱒 鰍 九

さいのひれ
内のちんせい
かわちんせい



鰭
波分のひれ
波こしのひれ
松さしのひれ
子守れひき左右
もみすりれひれ
子法さのひれ
もこれのひき
もすげのひれ
こうようのひれ左右
一乃ひき


鯛



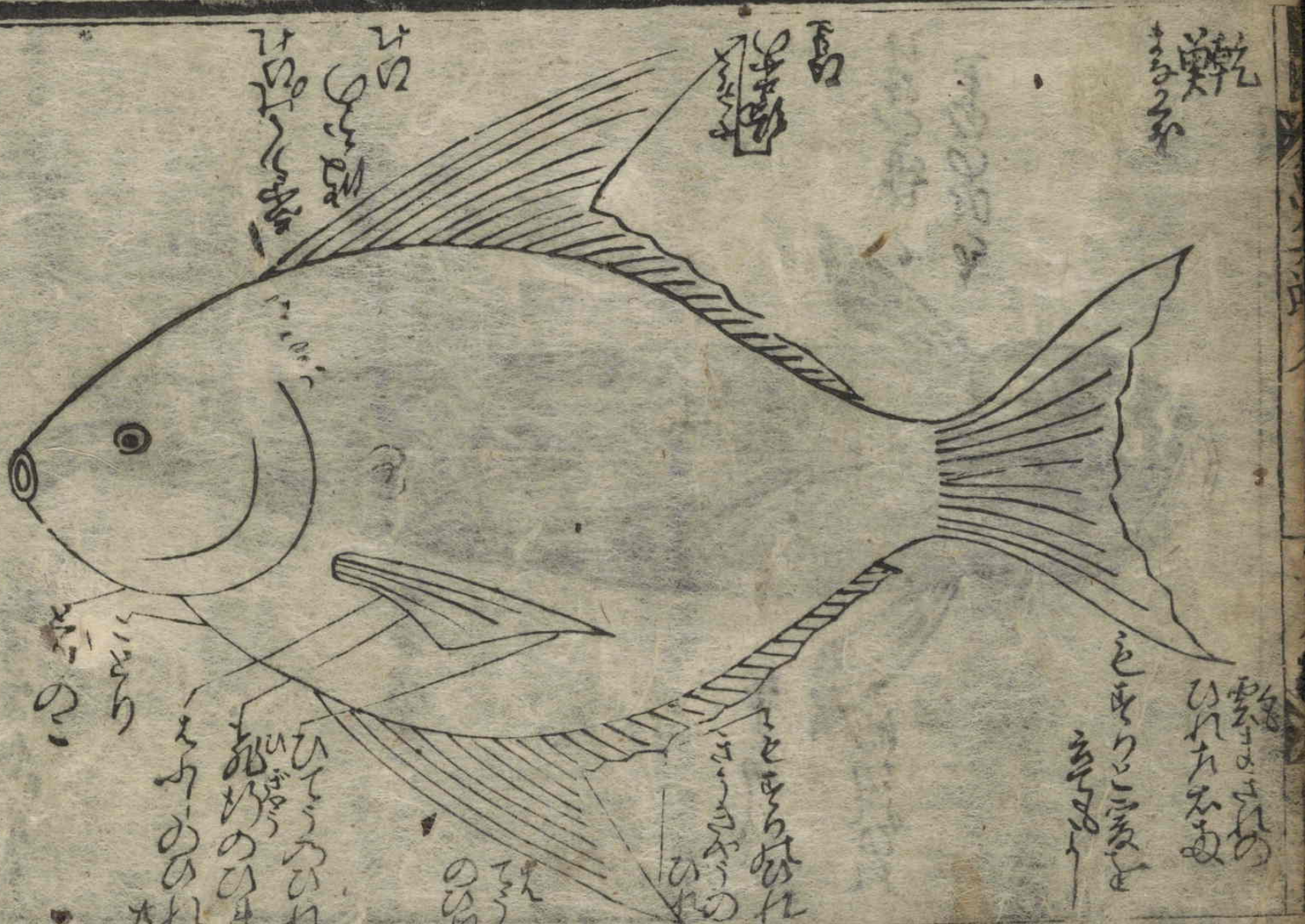
うち

ふぐ

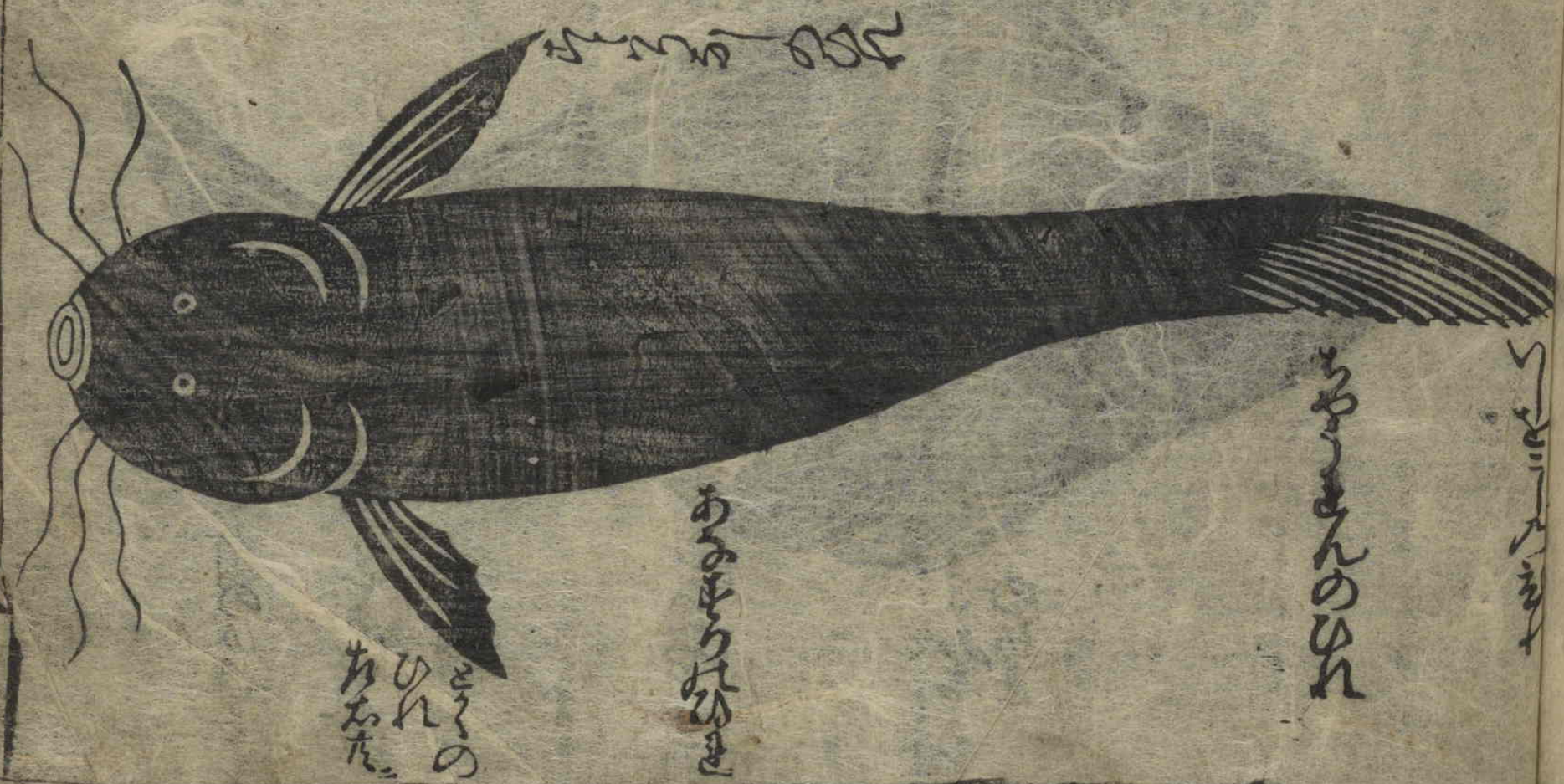
そそひき

ぬのめ

波切ひれ



鯰



初献乃事　洮子乃事
嫁取乃洮子包事　聟取乃洮子事
洮子結び数乃事　移徒乃事
御座敷立物乃事　聟取嫁取乃事
御産所乃祝事　元服乃事
御ひ本玉乃事　御ひ見玉乃事
鱸乃事　鱗乃事
袴着之事　初献乃鳥之事
庖丁刀乃事　箸乃事
俎乃事　常俎乃事
俎乃面名取事　庖丁乃柄之事
庖丁柄作事　筋乃木之事

毛鳥切事　唯鯉切事
桃子はむ事　三峯膳の事
そひ者の事　正月桃子はひ教の事
かうたて乃事　冬ゆゑ御の事
ときゆゑ粥の事

初献之事

一雜煮ハ魔王ノ五臓ヲカタトリシユクス

一心生火色赤シ下ヲカタトル鰹

一肝生木色青シ眼瓜ニカタトルイモ丸長ク削ル

一脾生土色黄波肉ヲカタトル串鮑

一肺生金白モノヲ云氣ニ通スル餅

一腎生水黒耳ニ通スルイリコ

右かくのごとくをかりてぼうにかく云君をたしめたまりて酒の酒下をさうかへ御はてなし酒をひかはらきたへし酒四方酒立方とこ

ハ御ふのさ　ひゝみ合てまいる也
足うりましさうにまいるハ三度の
かなしき後いはせもかなりまに
持て引居し御四方御三方乃御
うひかりきハ大ちうの如くきを御
御ふの乃をもに五度紀也　紙同御
座敷ゆ足うち如くも同様
あるべき也

一　姚子乃事

式二献七は膳又八饗膳乃貴四
後のうゝ口乃御姚子をてまいる物
献の御さうにまいるまん乃又見し御

洮子まてさいの口は蝶をにおりて
はむハ一ツ乃口をかくさんなめに
あらは狩紙をとりてしまう也
以ても禁中まてハはむなを
代まれなり但色いろ乃口ハはみ戸
也肴ハいつまもかくさんに洮
子なりゝ諸ゝ口の所てしし
ゆてさい所成家ハいつまも諸ゝ
中也禁中公家まてしはぬ
事もをきなし蝶酒乃しめ也
天竺国ゝ天ゝ夫婦の意あり此
ものの親に孝あり雖ま目に御

乃葉芝なり芝酒の初也とも
天竺唐國よハ酒のなり未ハ
なりこれは付て蝶をこれ打て口を
洗むるを也桃子をもらうそりか
しはしかかの口の数折のうちだて
別まも蝶ぐさ也

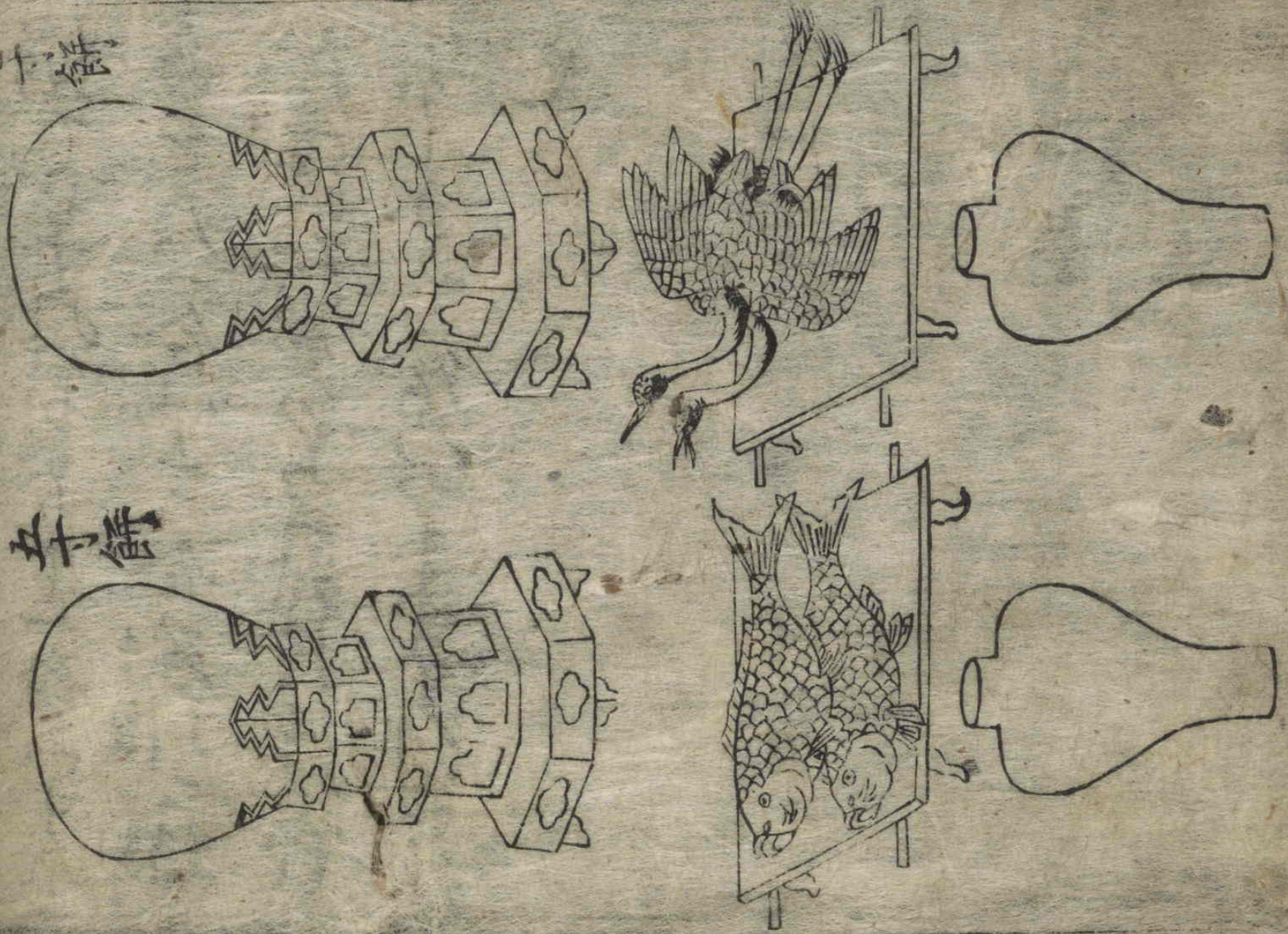
一 まあとりの桃子洗むる事
式三献饗膳の日ハ女蝶あるへし
初献より男蝶をへし御紙也
その歌は笑る紙をハ桃子の
口計和梅の紙をてしへはへし
三日よは笑る紙しるるハ二日

そのかれたかうたてもの梅の紙を
てしまへ以来し
一むこどろの桃子ほしむ事
式三献男蝶さるべし初献より
女蝶たるべし紙ハ引合まてひき
まハぬくさ紙しりあるべし
一桃子のむもひ数の事
正月十二日へし十二月を祝あり
桃子の二ハ三取ニ来し元三ハ
也十三月の年をひ祝りの数ハ
十二可ニ閏月ハ江侍あり
一移徙の事

式之献饗膳さいりは湯よハさう
粥をはさ金冬すてまいりは饗
膳ありて鶴亀乃かうまいりは
さうにより之献すて此食ありは之
一御座敷たて抱乃事
二重二合玉鯉二ツ玉鳥一羽
をみぬにて鯉のたい奥るをに志
てこい腹合也色いり一剝口はむ
やうハ一ツ男蝶一ツ女蝶合て一はし
がいいげまを白紙にて下宝をく
れな丼紙桃子の口ハはしむま
しきも松のあき抱されあき抱

こふくしか紀いの乃小家ゆんやさ
ん後以上十二種
一聟とり嫁とり乃事
右移徙大かた同前也但法湯ハ
白布の法ゆと志ろきひさまにて
よいかいつまとも〳〵亀足かうたて
白紙にて乃へし白布の法湯ハ
よめとりとそ乃かいつまともなり
かゆ乃法湯ハまたまし汁なる也
一御産石乃祝の事
こいたきの餅ちいさく志て敷又
百八十ゆへし但餅のまわり七

すとみすとかして二分れやうに
盤て七すれハかもりて一合みすの
角を大一合以上二合熟引二枚
鶏一はけひ面のち一剋只はけむ
ましきも絵乃やうに半切面組
也



同うぶ食大根二たりなりしられ
莫二ツ股合て二鯛二ツ股合て
此ほ紀ほ少石二ツ石の法○芝祝
なる紙は膳まちさに重て忌ち代
ハ多代なやる世をさられん乃忌おと
かてこけのむもまて此た祝のん
をんなりとうぶ乃御神此は祝也
はまへ去外ハこいてこれ餅まく
よし紙は前ハ三献ゟ重へさなりと
初献こいてこさの餅二献鶴忌
もい抱三献こふ為御めし忌乃
は祝紙三乃御膳可結也

一元服乃事

二重の二合右乃ごとく盃鯉二ツ右
乃ごとく盃鳥一つゝい右乃ごとく面
いち一法いくらてうかさつ出れとく
津むろのほゝ出てものいまも
同ごとく以上十二桂十二合亀足
かうたて志落く下重ハくれ為升
出るへさ也法くしもやも御そ
面こハひさおもせゆてまれそ乃
上を名列まていりゆも法よく
ゆふ組ゆいやうハ面ま一ツさらに
二ツありとめやうに口傳あり

式三献饗膳系附まはれし
たやせ人なりはたち刀御馬進
上は初献乃附はれしたやせ
人なはたち刀はこしの把御馬は
礼は

一御ひもなはし乃事
ぬりそ紀のなす
式三献たちなりにてもよし所
まも三献の又献姫ともさいへ
しは食三の法膳なりとも

一御かみ紀乃事
はさいなりそめ乃事

式三献御饗膳ハ三本たてよ
てて給也但此位よりへした
て松によへて鶴亀をはくりて
重へさ也初献三献さいるへさ
なりはめし三乃は膳ふてもて
給也

一 麺乃事

周の武王此御舟へ出けよあまり
なる麺一ツとひへまは武王志や
くこそおさへ給ふ大公望いこさ
あけて出そまつりまる武王刈
庖丁あされはる大公望てうび

しなくなりを海なりこと時海
中ちうにして又久乃沼立を
と元天道ゑんなうにかなひ給ふ又久
鱠ちまづきとも給ふ五久乃ちうこを
りるも其さハ此し酢ハ河久
しうにて此いろにも細作てい
をつゞして酢にてこさそそめ
又うさをいろにも、海にして下
まりるとそのようにうよみ此醤也
元黄赤の二ツ者ハ蚕也黒
ハ腸をこうして二海にして右
ハ蚕屋し中ハ尾なりしなり

然に武王おさへ給ふにより第一
黄姫なりは庖丁尾なるを
よりて始まるや先にひきを一つ
さらるるも武王おさへ給ふを
そしやくの鰭とも又一乃ひれ
とも云なり白魚は熱力を以て
なりいつきもく黄姫也

一切都ろ鯉作事

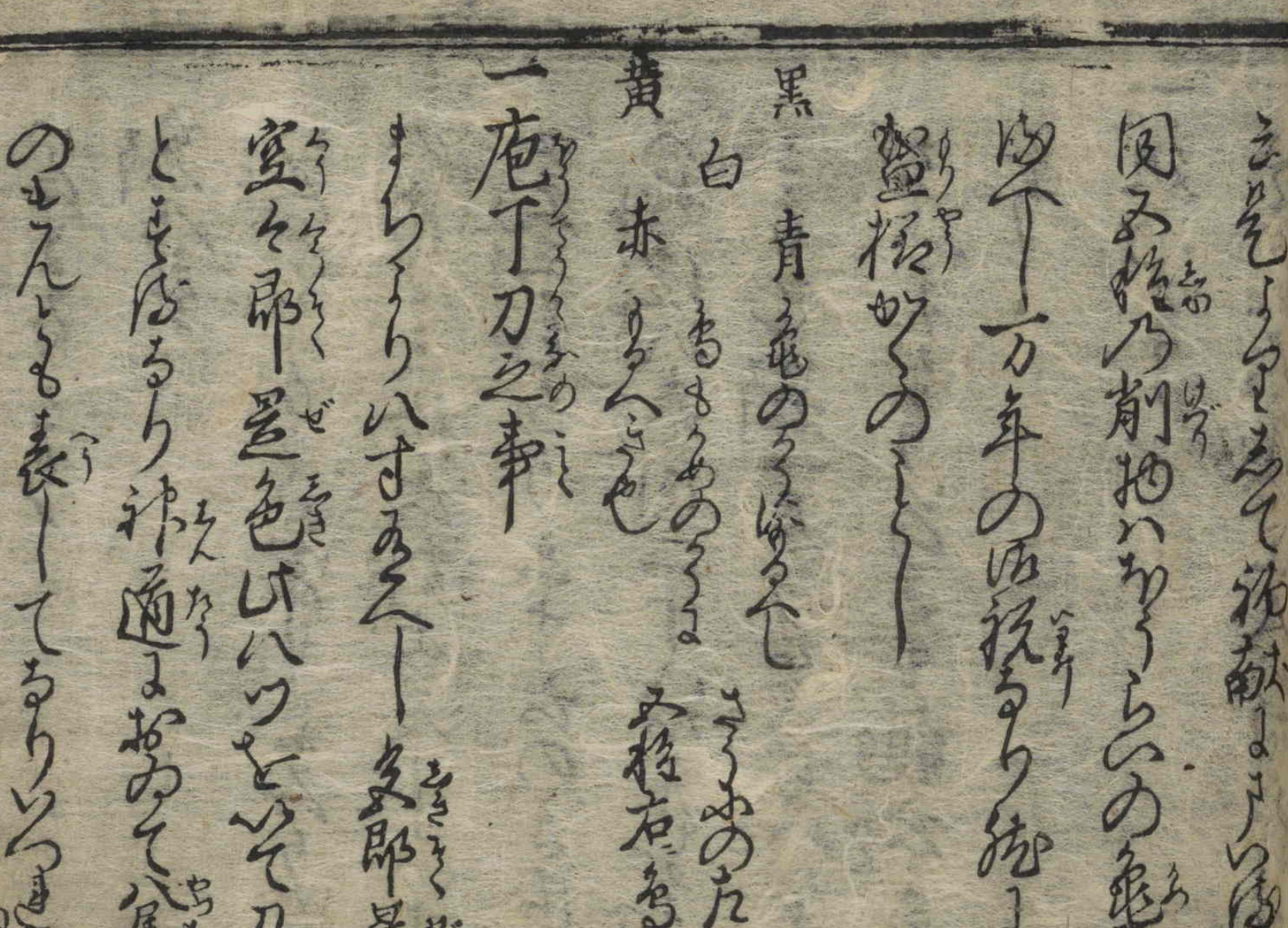
一番ニ うなりと　二番 引ミ
三番 打鯉　四番 あ川力
五番 ちりいつきなるも

伊弉諾尊御拜を以て海中を
さし給へは海間に滴一ツあり所
いち滴元なり此滴ふあるを
又海中を御し給へは御拜の
さきに奥一ツ所なりと時定
よこ忘して中もろへその奥は
まなかなといふ奥なり先の生
は洗ぢくといふ水なるなり拜
幸にあひ給てまつらんと今日
を御るまを拜久しとゝ中
ていぬ井へ返る爲ゆゑ召て大
鷲ゝ云をあらはして海中

あ身を下乃鯉なるべし膳者
ハ袴の鯉なり上ハ魚ハ尾を
ゆるべし刀ハとくまゝ化せる
とさへなる程にあるべしいつまも
く庖丁仕立に口傳ある初献
三献に示也

一初献乃鳥の事

昔ハ鶴のもしハ兎足ありて
盗けるなり所望の雉とうら
しらるとこのうち鳥をもるなり
なりは雉足三ツ有ちし織
雉にやいだ鳥中の足を制れ



云是よりまゐて神献よさい後
同又桂乃削抱ハ御うらいの亀
四十一万年の法税なり然ま
盥様かくのことし

黒　青　亀のうゑ後へ
白　鳥もかめのうゑ　さうふの左に
黄　赤　もうへさ也　又桂右に鳥

一庖丁刀之事

まちより八寸五へし　文郎是
宮々郎是色此八ツをいて刀
とまゐるり神通よおゐて八尾
のまんとも表してなりいつ道も
観念よ是これ法ものよおゐ

て庵下ふまんてう乃事也者
ハんまゝせなり

一 笠乃事

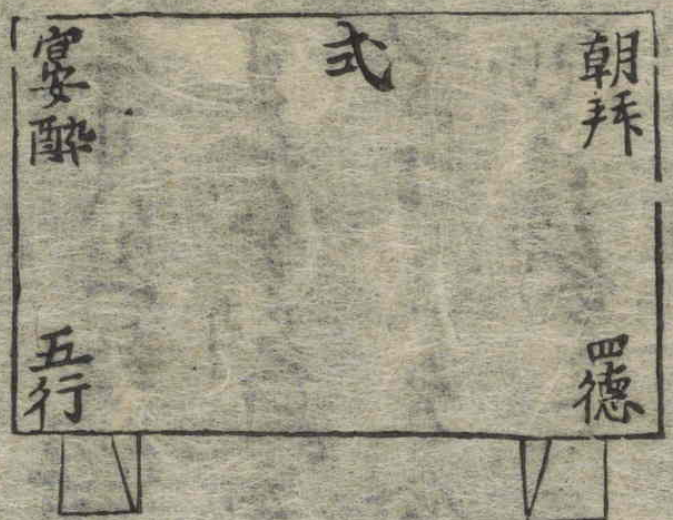
一尺ハ[illegible]ゞ四寸ハ[illegible]ゞり寸
乃内ハ三拾六刻あるへし四寸
四天王尾なり三十六のきにゝ
ハ如経ハ奉同二十ハなんを表
まる也笠一尺ハ[illegible]ハ百ハなん
るふ尾なりいづまも観念ハ[illegible]
無し

一 俎乃事

たを合て四尺八寸八阿弥陀乃
四十八願を以てなり 姐の厚さ
三寸八三 紐経なり 足の高さ三
寸三分 足の廣さ三寸二分あ
つさ二寸五分合八寸八八 葉の蓮
花を表せなり 姐の廻の廻九尺
六寸五九尺九分ん乃 浄土六寸
六字是なり 阿弥陀ハ 無計
もなし 多賀明神ハ命を永く
なり 法神なり 本地ハ おこゝ 弘
そまし 両ハ 乗迹なしなり
も 彼ハ長久延命乃 御術

祓ちり是皆庖丁ゟんちやう
俎乃ゟ也常ハ俎ハ別の沙汰
なりと

一常乃俎のゟ



長二尺七寸五分
廣一尺六寸五分
厚三寸
足二寸五分高
同二寸七分廣
足付事切口ヨリ二寸五分
平七分口傳有之
各金定也

又長弐尺八寸廣一尺八寸足三寸
高各金定也

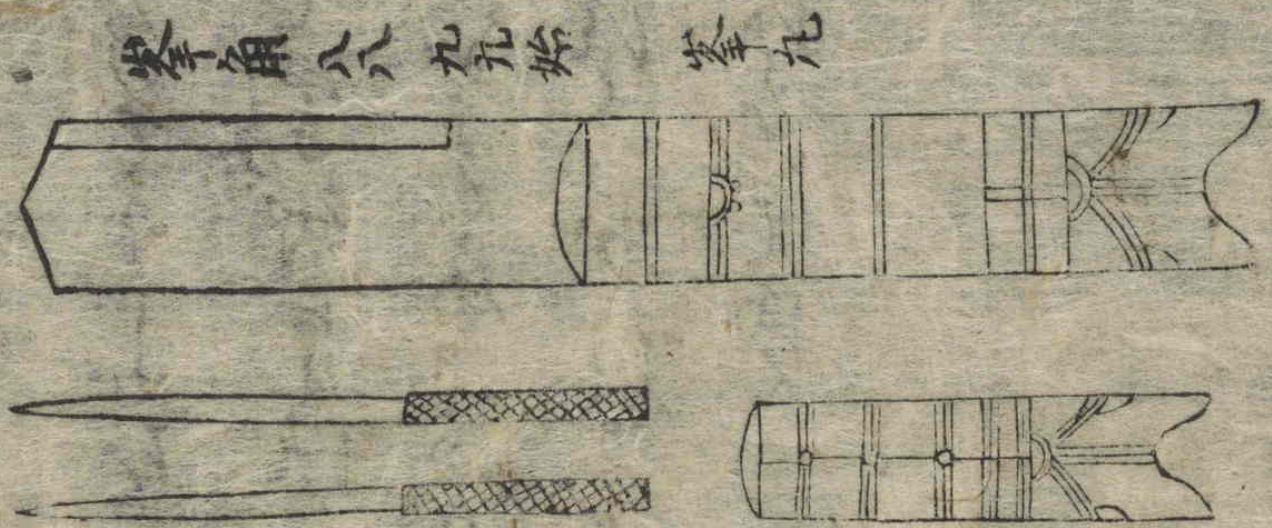
一 姐乃面まおかて名前の事

是ハ何にして見えれば怪なる儀宴
醉ハ朝祥ハ君をはかる神と
為すくなるをてうまいとも四徳
ハ君乃ハ恩徳日月乃ハ恩徳父母
ハ君をん徳見ある事或は君を天
より星下ハ給て守護し給
也あらにまことを知へからハ右宮
乃儀をちら五行とハ次木火土
金水ハ人間て五行とも是也
是ハ程口傳あり

一 庖丁乃法の事

和木又ハ和うの木ちらへしひ乃
木まてもゑかうに拵ゑかぶらとう
とまくてちらへし黒りハをれ
てゆく色しそのことをみをれ
てはむるまあるひ稱りハ物く
さちらへし

一 庖丁の法の代作事
はかに鯉口にもへし仕かふらとう
をゆうにハ鯉口程ハなくともかれ
みれちやうまあへしはかを鯉
口ともうるハ虞霖乃法代庭
前ハ九山八海をまゐび給ふされ



右如此刀をしたらはかれば背ゆく
なれなり背の中より出る
刀ハ鉋もなくはかもなし面よ
一當茶世いと久字をたたかる也
三後はかれはたもまれさる也
松口傳あり
筋乃木の事
梅の木春　赤木夏　はけの
木秋　黒柿冬　是四季の
鯉乃箸のすゝ也常の鯉乃事
ハ何もの木なりともくるしから
まは四季乃鯉ならば唐木

そも可以ことゝ也

一みさごと鷲(たり)とこつぎゐるそ乃
子ハそうふそハあるとるから奥(うか)
とこつるするり然乃如の鷲(たり)を
はかふ時ハうそいらのたをはかふ爲
きと也川うそと大(いな)とこつきそ
まさう大をはかふちり山まも名
みもかし紀ゆへ是を可用(ゆき)
云云故鮮(ちゆへ)と鳥(とり)と俎(まないた)一ツよみ入
て出しゐるん時切(きり)へき事口
偽(えん)存之(れあり)

一毛鳥(けとり)をとる事

毛ハ性山まそこそあるへきなるか
海と成乃うらまそこさる事無
然但貴人の事理に不望あ故
なるに不及毛能然志先為此
足の毛をそこむしるとて主後
て然也口傳也

一天平七年七月廿一日に橘諸
兄卿大饗の時おりしろ鮭を
左大弁鰯を以てあるを作てま
いらせよとの御ひしよりと名付て
打分口中ほとへ入りと云説
あり是不一用之者也

一二唯鯉切事

夜分相行所分相行しときは
色うらはらの非ハ何ぞてもさる
べきなり但一ツ清く切べきなり
始のハ式乃庄ニ重後のハ前ニ
重へきもの前つゝへハ式乃庄
をハ相しのけて後をハ切べし
先鯉ハくらしてもくるしうらも
同ハまへのもみまぬやうにこの
色し是ハ庖丁をしらしも鯉を
らしもいつまも同様にんぼう
への三鯉不望此時二鯉を切べ

ゝるざるためにこゝん鯉を四条
若日社に入られたる也南流乃
大事なるゝ所に秘せる者也

一鯉乃さしみ又ハなまれにいつれ
も鰭と盤ゝ数る也

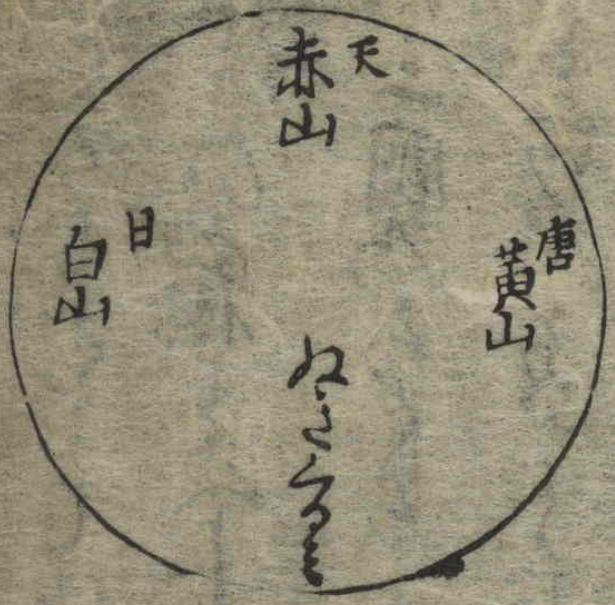
一童波ニ説あまたに梅花を
又云梅花とも山ゝとも云但
其冬ハ此名をもちいてもこ
れ也常ハ童波ともなる也
いふべき也

一洮子けしむ事

何ぞ祝儀もかくのごとく清ミ中也
口は蝶形あるべし後清ハ口清
ましきゆり他面いしの口ハ清
てもなるしうしも正月
十二もまふ面まてこもり
なりさん面こうへ毛又
上ハむまかるへし他毛
もまひめこうまてこも
なし

右大神し代と表

右乃ことくあつへし但正月さん
而ここ諸ハ別なり
一三峯膳乃事



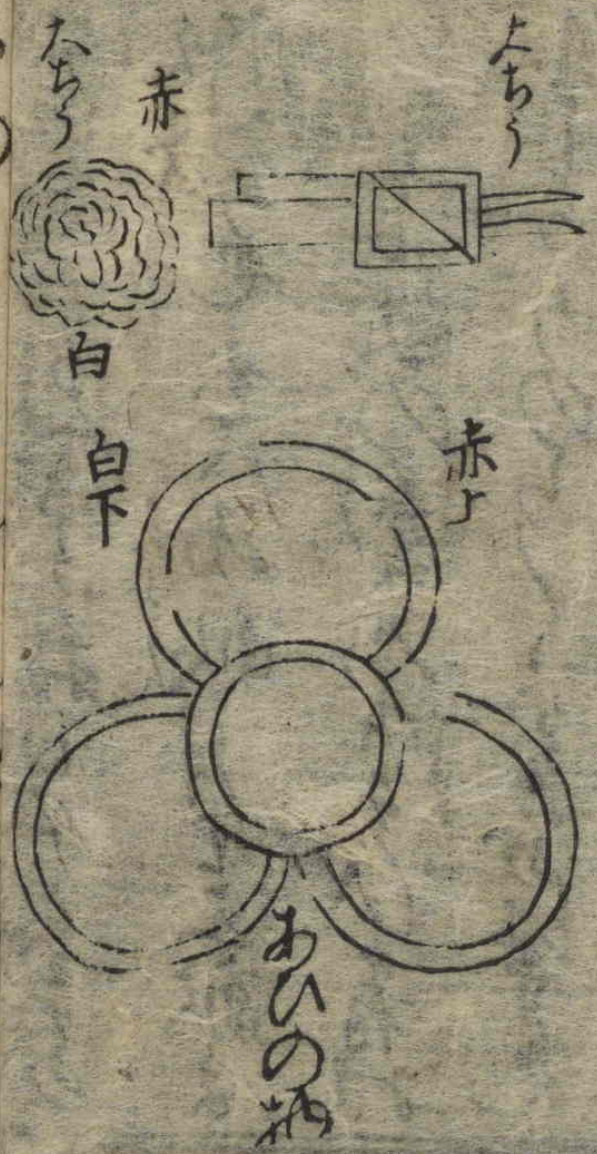
かくのことくして所葉を入し
作そひ着を入し三つ膳
ハ三國乃ろくなり一條黄蛇
也三ツ此ハ無かゝる事といふなり
稽字をこゝも不可用者也
大笠まて師子唐にて羊目
牟にて猪毛を作也
一御そひ着乃事
春梅やき　夏橘燒　秋筋引
冬はまかさ孫大馳めしを入し
鶴若鶯此時なとハ時菖あり
無ゝれ但さし勿なり鶯ハ

の三方魂見まてちり桜ハ高
むまふるまハ元三をいて年元
月元日元是元三也

一うたてゐる事

二色桃子の口その外亀足何
も三日多ち紙し此事ハ白紙カ
紙下かさまハ紅の紙にて不苦

一多なをし餅乃事



右のことくて醫也 但餅たる
絵よりはかたはり 陰陽の姑をいて 四寸にして
よれなりは

一 まさ御乃粥の事

弓四海をしりめ國家長久繁
昌也水に火なんいなしゆ元祝

右庖丁奉守二

現受無比樂

一佛成道 觀見法界
草木國土 悉皆成佛

右四條家傳受

菌紅新兵衛尉
吉田五右衛門尉
菌紅和泉守
羽田神右衛門尉
高橋橙兵衛尉
高橋又助

寛永十九年
午ノ
五月廿一日

中村十右衛門殿

TX 713
.R96
1642
vol. 1
Rare BK
Coll